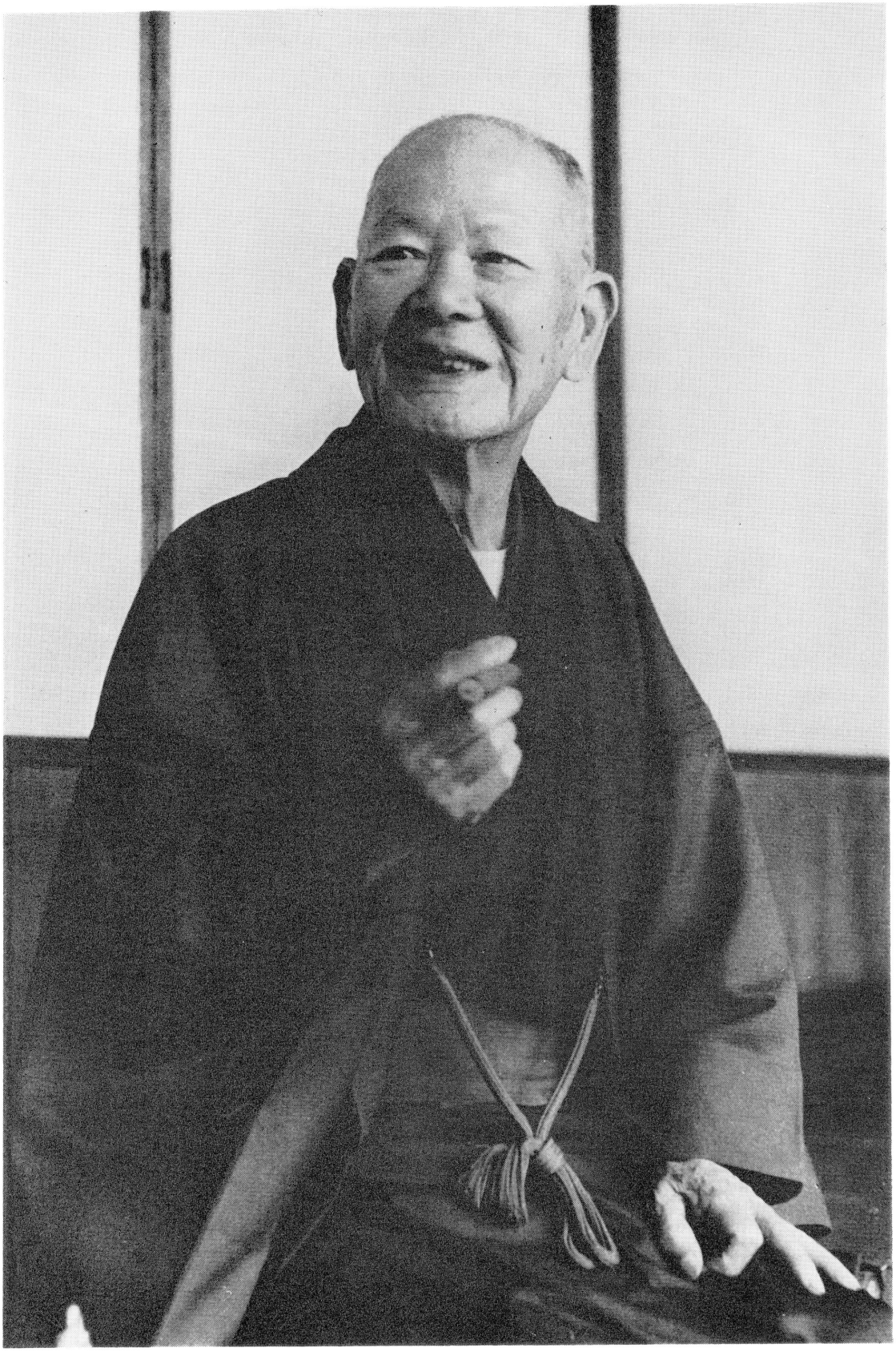
煙洲會

四百回記念



履　歴　書

鈴　木　達　治

明治４年９月11日生

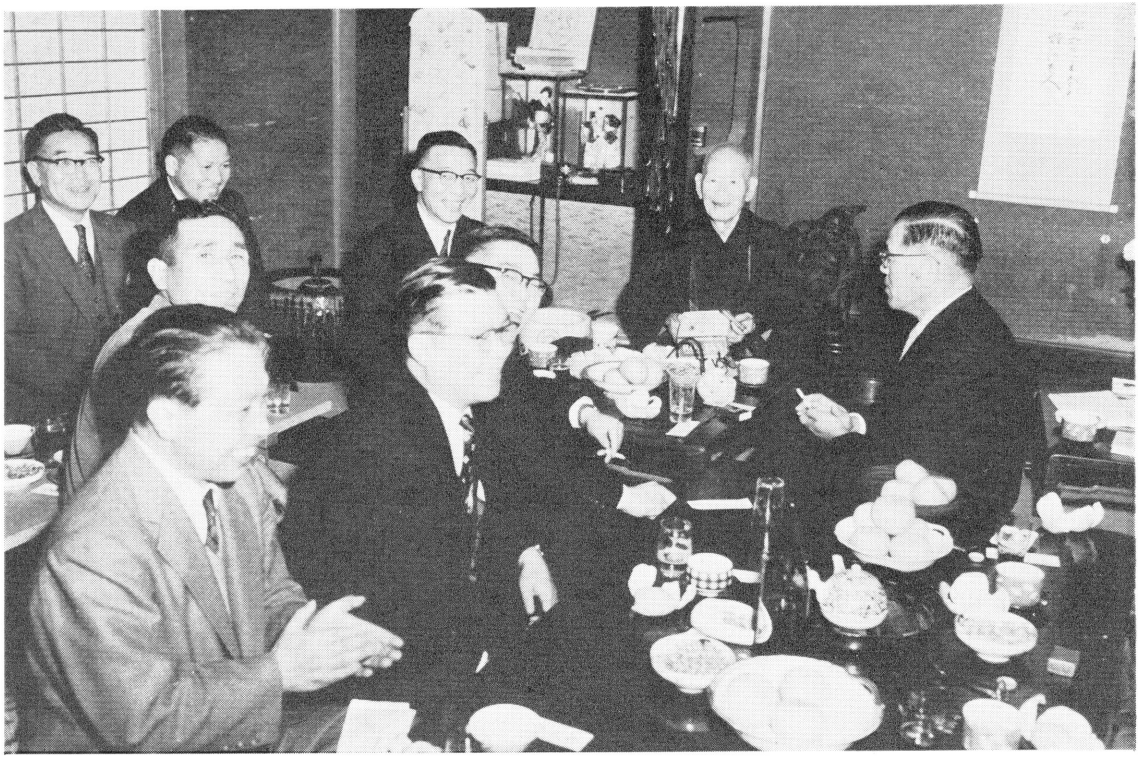
明治19年１月	京都市同志社英学校ニ入リ四箇年間英語ニテ普通学ヲ修メ同校ヲ卒業ス
同　23年９月	同志社理科大学部ニ入リ三箇年間化学専攻副科トシテ獨逸語並ニ植物生理組織学等ヲ兼修シ同部卒業 同理科大学部在学中優等生トシテ二箇年間授業料ヲ免除セラル
明治26年11月	熊本県大江村九州私学校ノ聘ニ応シ一箇年半ノ間物理学化学地理地文学等ヲ教授ス 報酬トシテ月手当金弐拾五円ヲ受ク
明治28年１月	熊本第五高等学校嘱託教員トナリ二箇年半ノ間在勤報酬トシテ月手当金三拾円ヲ受ク
同　　年５月	東京ニ於テ第八回文部省教員検定試験ニ及第シ尋常師範学校尋常中等学校高等女学校教員免許状ヲ受領ス
明治30年７月	東京帝国大学入学規程第二号書式ニ従ヒ入学ヲ出願許可セラル
明治33年７月10日	東京帝国大学理科大学化学科卒業
同月25日	大学予科講師ヲ嘱託シ報酬トシテ一箇年金八百円給与
明治34年２月９日	任第二高等学校教授（第二高等学校） 叙高等官七等　（内　閣） 九級俸下賜　（文部省）
同　　年５月７日	兼任仙台医学専門学校教授 叙高等官七等　（内　閣） 九級俸内（七百五拾円第二高等学校支給百五拾円仙台医学専門学校支給）　（文部省）
同　　年６月10日	叙従七位　（宮内省）
明治35年４月22日	明治35年開設ノ師範学校中等学校高等女学校教員夏季講習会講師ヲ嘱託ス　（文部省）
同　　６月19日	免兼官　（内　閣）
明治36年８月28日	師範学校中等学校高等女学校教員講習会嘱託手当トシテ金百弐拾五円給与　（文部省）
９月15日	叙高等官六等　（内　閣）
12月24日	叙正七位　（宮内省）
明治37年１月26日	八級俸下賜（1,000）　（文部省）
明治38年６月22日	叙高等官五等　（内　閣）
８月18日	任広島高等師範学校教授　（内　閣） 叙高等官五等 八級俸下賜　（文部省）
８月30日	叙従六位　（宮内省）
明治41年６月25日	電気化学工業研究ノタメ満二箇年間独国，英国及米国ヘ留学ヲ命ス　（文部省）
７月13日	海外渡航
８月22日	任東京高等工業学校教授 叙高等官五等　（内　閣） 八級俸下賜　（文部省）
明治43年３月31日	外国留学中年俸参百円支給（文部省）
４月１日	高等官俸給令改正
明治44年５月26日	帰朝
６月２日	七級俸下賜（1,500）　（文部省）
11月20日	叙高等官四等　（内　閣）
明治45年１月20日	叙正六位　（宮内省）
明治45年７月30日	大正ト改元
大正２年４月１日	文官分限令第十一条第一項第四号ニ依リ休職ヲ命ス　（文部省）
10月13日	復職ヲ命ス　（文部省）
大正３年４月15日	東京大正博覧会審査官ヲ嘱託ス　（農商務省）
６月16日	六級俸下賜（1,700）　（文部省）
６月29日	叙勲六等授瑞宝章（421,763）　（賞勲局）
７月31日	叙高等官三等　（内　閣）
９月30日	叙従五位　（宮内省）
11月７日	化学工業調査会委員ヲ嘱託ス　（農商務省）
大正４年11月10日	大正四年勅令第一五四号ノ旨ニ依リ大礼記念章ヲ授与セラル　（賞勲局）
大正５年７月８日	五級俸下賜（2,000）　（文部省）
大正６年９月26日	化学工業博覧会審査官ヲ嘱託ス　（農商務省）
10月15日	第九高等工業学校創立委員ヲ嘱託ス　（文部省）
大正７年６月７日	四級俸下賜（2,200）　（文部省）
７月26日	叙勲五等授瑞宝章　（賞勲局）
大正８年３月27日	畜産工芸博覧会審査官ヲ嘱託ス　（農商務省）
９月８日	三級俸下賜（2,500）　（文部省）
10月22日	支那ヘ出張ヲ命ス　（文部省）
10月30日	出発
12月22日	帰朝
12月10日	叙正五位　（宮内省）
大正９年１月19日	任横浜高等工業学校長 叙高等官二等　（内　閣） 賜二級俸（3,000）　（文部省）
３月18日	職務勉励ニ付為其賞金二百円下賜　（文部省）
３月29日	叙勲四等授瑞宝章（534,882）　（賞勲局）
７月１日	都市計画横浜地方委員会委員被仰付　（内　閣）
８月18日	高等官々等俸給令改正
大正10年２月15日	神奈川県立商工実習学校長事務取扱ヲ嘱託ス　（神奈川県）
３月26日	職務勉励ニ付為其賞金五百円下賜　（文部省）
７月25日	社会教育委員ヲ嘱託ス　（文部省）
12月23日	職務勉励ニ付為其賞金七百円下賜　（文部省）
大正11年３月31日	賜二級俸（4,800）　（文部省）
８月７日	横浜市立大岡工業補習学校長事務取扱ヲ嘱託ス　（神奈川県）
12月20日	職務勉励ニ付為其賞金九百円下賜　（文部省）
大正12年12月17日	職務勉励ニ付為其賞金千五百円下賜　（文部省）
大正13年１月11日	文部省視学委員ヲ命ス　（文部省）
３月31日	叙勲三等授瑞宝章　（賞勲局）
12月５日	賜一級俸（5,200）　（文部省）
12月27日	叙従四位　（宮内省）
12月18日	職務勉励ニ付為其賞金千弐百円下賜　（文部省）
大正14年12月22日	前同断　金千百円下賜　（文部省）
大正15年12月15日	前同断　金千円下賜　（文部省）
12月25日	昭和ト改元
昭和２年２月２日	叙高等官二等　（内　閣）
12月19日	文政審議会委員被仰付　（内　閣）
昭和５年２月１日	叙正四位　（宮内省）
12月27日	年俸金七百円加賜　（文部省）
昭和６年３月11日	叙勲二等瑞宝章　（賞勲局）
昭和６年４月21日	神奈川県立商工学校長事務取扱ヲ解ク　（神奈川県）
５月１日	帝国復興記念章ヲ授与セラル　（賞勲局）
昭和７年12月24日	体育運動審議会委員被仰付（内　閣）
昭和10年２月12日	叙従三位　（宮内省）
２月13日	依願免本官　（内　閣）
２月25日	叙正三位　（宮内省） 特旨ヲ以テ位一級被進　（宮内省）
３月25日	横浜高等工業学校名誉教授ノ名称ヲ授ク　（文部省）
昭和16年２月20日	横浜保護観察審査会委員ヲ命ス　（司法省）

此の履歴書は終戦後ＧＨＱの要求により学校から提出したものです。

煙洲会アルバム

昭和23年 5 月27日　煙洲会　於東芝柳町工場

昭和26年 2 月25日　第100回煙洲会　於横浜三喜館

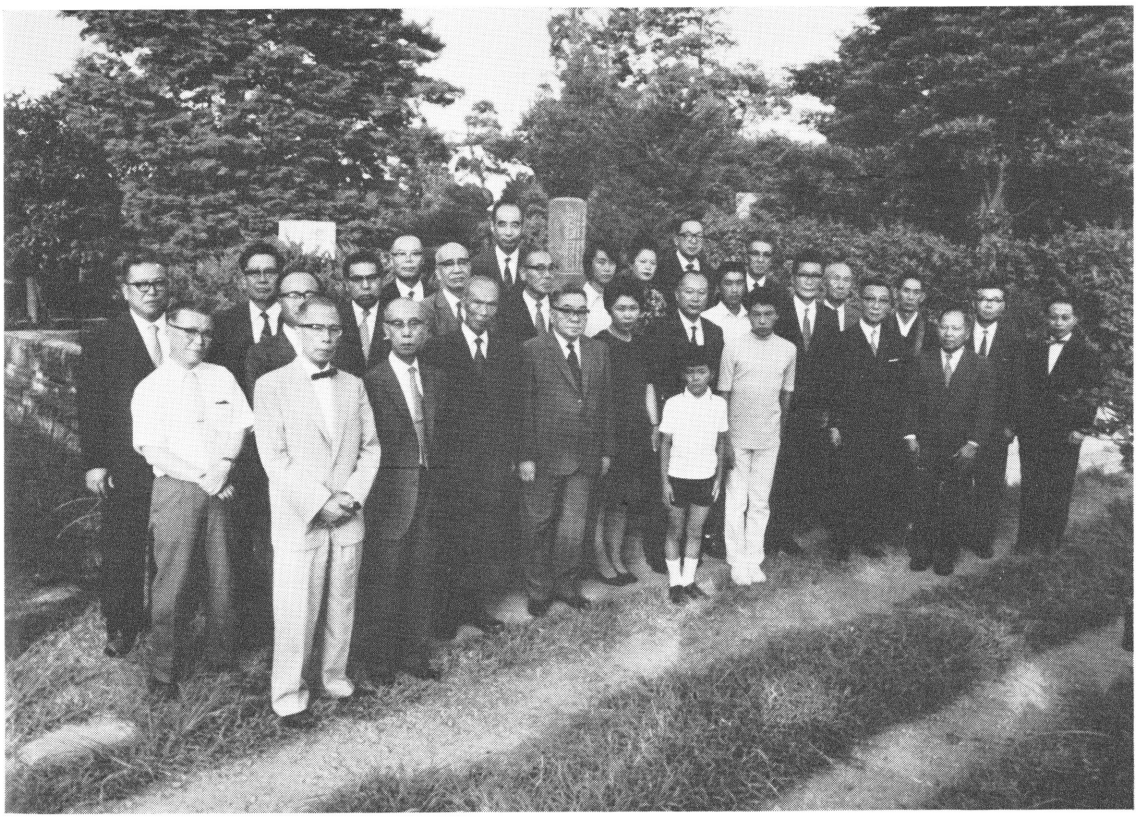


昭和34年11月25日　第200回煙洲会風景　於先生の御宅

第200回煙洲会　菅代表と歴代煙洲会幹事

初代 阿部元吾氏　2代 平田義雄氏　3代 小汀浩一郎氏

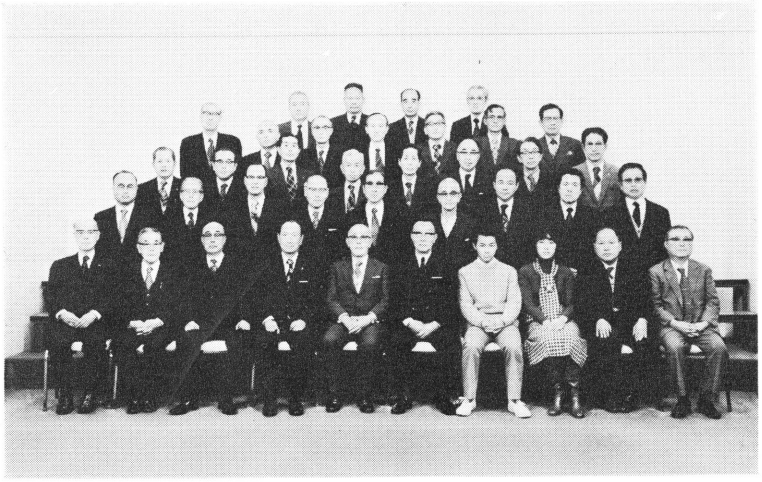
昭和42年 8 月29日　煙洲先生七回忌　於横浜精養軒



昭和46年 8 月27日　煙洲会員の墓参　於日野墓地

昭和51年12月22日　第400回煙洲会　菅代表の挨拶

記念講演をする竹内秀雄先生



昭和51年12月22日　煙洲会　第400回記念

自由主義教育の思出

（無試験無採点無賞罰）

鈴　木　達　治

私は今の横浜国立大学の前身である横浜高等工業学校の創立に従事し，それより満15ケ年間実施した私の自称自由教育につき，思出話としてその経緯を述べたいと思う。それには余計なことかも知れないが，まづそこに至るまでの経験と経路を略述する要がある様に思う。

私は15歳の時に郷里を出て，京都の同志社に入学した。これは明治18年で同志社は当時創立後約10年を経過し，創立者の新島襄先生が校長であった。先生は人も知る様に元治元年に国禁を破り，函館港より脱出し，滞米約10年にして，明治7年に帰朝せられた。翌8年に同志社を創立し，私の入学当時は既に約6百の生徒が在学しておった。キリスト教を以て校是となし，全く米国流の教育で，多数の米国宣教師が，教鞭を執っていた。

学校当局からは何等宗教的要求もなく，又干渉も受けず，全く自由であったことは，何よりも嬉しかった。師弟間に何らの隔りがなく，学友相親しみ相和し，学課の勉強に又精神の修養に，切瑳琢磨の雰囲気をなす校風は，私の一生を感化し，何処までも又何時までも，私につきまとうている様に感ぜられる。特に新島先生の風格は私の忘れ難き人々の一人である。

明治20年前後の同志社の生徒は，袴もつけず，羽織も着ず，着流しに兵児帯で，今日から見れば実に乱暴粗野であった。何も好んで粗野を装うのではない，当時の日本は貧乏であった為めで，学校も又そんな型式に頓着しなかったのである。それとは全く正反対に新島先生はフロックに身をかため，頭のテッペンから，靴の先きまで洗練された風貌は，何処から見ても西洋紳士そのままであった。

しかしながら一たび講壇に立ち，口を開いて我国文化の立遅れを説き，青年学徒の発憤を促がす時の声容は全く別物で，当時の我々青年の脳底に刻み込まれた悲憤慷慨の熱情は幕末志士を想像せしめた。これが私を惹きつけ，大なる魅力を感ぜしめたるものであった。

先生には又特に当時封建的であった官尊民卑の面影の片鱗だも，その心形に見ることは出来なかった。徹頭徹尾民主々義の洗礼に浴した人で，今日から想い起しても，生れながらの民主人又自由人と思われてならない。先生晩年多病で，47歳の壮齢で大磯客舎で逝去した。朝野その死を惜み，門下の子弟は恰かも父母を亡くした思いであった。我々学生は悄々として先生の棺を肩にして，明治23年1月の下旬寒風肌に徹するの日，京都東山の若王寺山頂に埋葬した。その記憶は今も猶忘れ得ない貴重な追想である。

私が同志社を卒業して劈頭の就職関係は，横浜の宗教学校であるフエリース女学校であった。提出した英文の履歴書は，学校当局を驚かした程の悪文であった為め，見事不採用になった。元来私は自由主義者であり，又同志社教育に感化を受けたことから，官途に職を求むる意志は，かりそめにも持たなかった。英文が拙劣であったことが，不思議にも私を思わぬ運命に追いやり，40年に近き私の教壇生活が，官僚教育に始終し，政府に衣食し，一粒も民間の粟を食わなかった。即ち熊本五高，仙台二高，広島高師，東京蔵前高工と転々し，大正9年最後に横浜高工の創立に迎へられた。在職15年にして，昭和10年に退職し，爾来約20年公私の職に就かず，朝耕夕読今も猶政府の恩給に衣食する浪人である。

転々した私の官立学校の生活は，ひたすら現実主義を取って，因循姑息と知りながら，理想をすて節を折って大勢に順応し，無事に教壇に立った。それでも広島高師だけは辛抱が出来なかった。極端な形式的，又官僚的であったからである。危くここで私は失脚する所であった。面白き

回顧の数々があるが残念ながら省略する。熊本の五高には幕末戊申の役に，会津藩を背負って戦った名将秋月胤永翁がいて，一一学生の出身藩を手帳に記入した。小泉八雲で著名なラフカディオ・ハーンや，近代の文豪夏目漱石などの名士が同時に在職した。五高では私は末席の職員であって，又化学であった為め，これらの諸先生と別に親交がなかったことを，後日に至り悔しく思うのである。しかし面識のあったことは，実に忘れ難きことで，限りなき教訓をその遺風と著書に，今日でも受けつつある。仙台二高では，三好愛吉，粟野健次郎，土井林吉（晩翠）の3教授と最も親しく接触した。3氏とも官僚臭と俗臭より抜け出し，且つ名利に恬淡たる達人であった。三好氏が二高の教頭として残した業蹟は，官立学校の教育行政における，型破りの勇断であったであろう。三好氏は後に秩父宮殿下御兄弟に奉侍し皇子扶育官長として令名あったが，その早世は惜まれた。以上3教授との接触と，寛厚の大人中川（名は元）校長との二高5ヶ年間の生活は，私の後日の心境と行動に，大なる示唆と暗示を与えてくれたと感ずるのである。

3年の欧洲留学から帰って，東京蔵前の高工に入った。初めての実業教育への入門で，全く勝手が分らず，五里霧中であった。当時蔵前高工の校長は手嶋精一先生で，実業教育界の名校長であった。私は手嶋校長門下として働いているうちに，段々とその人となりに敬服した。校長は直接学生生徒の指導者というよりも，むしろ卓越したる教職員の指導者であった。それが一般学生々徒にまで及び，蔵前高工をして，実業専門学校中の最高峰たらしめたのであった。猶一面広く観察して見ると，手嶋校長は内部からよりも，むしろ外部から学校を統治したといってもよかろうと思われるのである。手嶋校長は一流の名士で，当代朝野各方面から重きを置かれ，交渉を持ち，随って学校をして社会と密接な関係を持たしめ，毫も孤立又遊離する様な隙きがなかった。かくして私は多くの先師同僚から教へられ，特に手嶋校長には10年近くも師事し，最後には同校長の推挙により、大正9年に創立した横浜高工の校長として任令を受けたのである。

就任して学生に臨み，第一に難関に出会つたのは教育勅語問題であった。入学した学生には，朝鮮人もあれば，台湾人もある。国籍からいえば，同じ日本人である。彼等新付の民族に対し一般的に教育勅語を敷衍祖述しても，その意義において通用し難きものがある。例えば祖先とか報恩に就き，彼等から反問逆襲を受けたときは，私は片言隻語の返答が出来ないで，立往生をしなければならないであろう。これを思うと，開校の当初において，教育勅語に就き，私の所見を述べることが出来なかった。色々と苦慮しつつある間に，幸にして我国憲法を基本とした忠君論を見出した。即ち教育勅語の解釈に憲法を適用し，新領土の国民にも，同様に敷衍的に解説し得る理論に達し得て，初めて安心且つ意を強うし得た。これは全く法学博士松本敏氏の学位論文であった“忠君論”に負う所である。

更に又私は思った。教育勅語は，日本国民として，現実に社会に処する道を教えたものであるが，しかし人間教育としては，この勅語の処世術基準を踏み越えて，我々人間個性の自主独立を涵養育成のため，何等かの信仰と思想は必要であるべきである。人間個々には天賦天禀の異なりたる神知霊覚がある。その異なったものを持っている学生に，団体的の教育を施すことは，学校の所謂大量教育の建前から，余儀ないことであろうが，そこに何等かの無理があると考えられるのである。学校には未来の民族を支配する各階級の人材が集っている。大量生産の団体教育は，優秀な人材を引き下げ，劣等者の為め犠牲となる恐れが多分にあるであろう。その各自の個性を阻害することなく円満に育成せしむる教育家は，少くも福沢先生とか，新島先生若くは内村先生とかいう様な知性，徳性，勇気，見識を兼備した，人格者でなくてはならない。私如き凡人では到底不可能であることは，いうまでもないことである。

そこで私は考えた。私としては学生を訓育することは出来ない。只単に学生の天賦天禀の個性を阻止阻害せしめないことだけを以て，教育者として私の責務とするのみである。恰かも春光慈雨の環境に，花木の自然に発育するが如く，只それを助長せしむるのである。かくして道徳教育から偽善者を救い，職業教育から国家の危険を拭い去らんとするのである。この覚悟と信念は私の自由教育の出発点である。元来私は化学者で，教育学とか心理学とかの素養は，一切持たない全然の門外漢であるから，私の自由教育は自分勝手の称呼で，何等学問的の裏付もなく，又組織的の体系な

きもので，只現実と実践を以て学生に直面したに過ぎなかったのである。しかしてこの自由主義教育を実行する手段として，とったものは所謂三無主義即ち無試験，無採点，無賞罰であった。皆これ私の横浜に来るまでの，長き教壇生活の経験を基礎としたものである。当時の熱心なる教育家は殆ど，凡べて訓練に重きを置いた。軍隊教育の影響かも知れない。訓練の能く行届いた学校は，文部大臣や知事市長，その他学校参観の人達により，賞讃せられ，社会でも優良学校として，認識した。しかし私は自覚なき訓練は，犬に芸を教え込むのと同様に考えた。そこで教育の第一義は自覚で，訓練は第二義的のものとして私の自由主義教育を一貫して行動した。自覚なくして自由教育は行われるものでない。

無試験　試験地獄という言葉は，遠い昔からあるので，説明の必要はない。学生々徒は勿論，親兄弟を初め親類故旧に至るまで絶えず悩やまされるものである。しかして何時までも解消せられる見通しはない。試験勉強の為め，青少年が心身を消磨し，国家の負担となることは何人も認むる所であろう。しかし智識を与える方法としては，試験は最も簡単で，容易でかつ最も能率的のものであろう。多数の学生々徒を教授する学校としては，簡単にして又能率的なこの試験制度を用いることは，教師としては止むを得ないことかと考えらるるのである。しかし学生側からすれば，悉くとはいわないが，学問を強制せられるから，イヤな事である。何事でも自主的でなく，他より強いられて，余義なくされ，事を果たすより苦しきものはなかろう。試験勉強はしばしば，この境にまで追いやられ，終には不幸なる結果をもたらすことさえある。それよりも，すべて試験から解放されて，自ら好んで勉強し，更に進んで楽んで勉強し得るならば，これに優るものはないであろう。

試験制度を採れば，学期末に又学年末に，教師が集合して，成績調査会議が開催される。しばしば馬鹿らしい，又非常に不愉快な会議となることがある。又必然的に落第生も出て来るのである。落第生は実にみじめなものである。落第生は今一年留められて，同じ学課を修業するのであるが，それでも多くの場合，成績佳良にはならない。矢張り前年通りの不良で，二年辛抱したからとて，同情で進級又卒業せしむるまでである。これも私が横浜に来るまでの各学校での経験である。横浜高工の入学者は三年立てば一人残らず必ず卒業するのであった。

ある時孔子は人の問に答えて，自分の多くの弟子の中で，独り顔回をあげて，学を好むといって賞讃した。孔子は顔回を以て博識多聞であるといって，其豊富なる智識を賞讃しなかった。これは非常に考うべきことと思う。学校は智識を詰め込むことが，第一義的になってはならない。試験勉強は学生を強制して，智識の詰込みをなさしむるに，外ならないのである。多くの場合これは学生にとって苦痛である。それであるから試験が終るとヤレヤレと，一種の弛廃の気分を生ずるのである。学校教育は学を好み，学を愛し，学を楽しむ習性を賦与するものでなくてはならない。かくして智識欲に執着し，明かるい希望を抱き，長い一生を幸福ならしめねばならない。学を好む顔回の様な人物を養成するのである。

一方また学校教育は，しばしば智識偏重の弊ありとして，遠く明治時代以来，各方面の批判がある。しかし試験制度が存在する限り，この弊は到底除去することは出来ないであろう。智識に偏重することは，他の一面に人間としての欠陥を生じるからである。若き学生時代に，特に発育成長を待望せられる人間の種々なる徳性を犠牲にして，智識の詰め込みに努力するからである。試験で点数を稼ぐ武器は，記憶と暗記でこの両者に熱中して，学生の旺盛なる精力を消磨し，将来に発達を約束潜在する偉大なる人間要素を消失する杞憂が多分にある。

記憶と暗記に熱中するため，特に独自の判断力を薄弱にする。人間の正邪曲直，是非善悪を判断する知能は試験勉強より解放され，束縛強制を受けず，自ら好んで又楽しんで，獲得したる智識により，より多く得らるるものと私は信ずるのである。凡そ人間の行為は，自己の判断から来るもので，正邪曲直，是非善悪の岐路に立って，迷わず誤らず，正当な判断より来る行為は，善行であり又善徳である。正しい智識と，正しい行為が調和を得て，初めて真の教養ある人間が出来るものである。智識が行為より遥かに進歩していたり，反対に行為が智識を凌駕しては，出色又大に特色ある人間になり得ても，真の教養ある人間にはなり得ないであろう。智識と行為が極端な不調和の人間の多いことは，社会の不幸である。出色と特色とは，必ず賞讃すべきではない。功罪相伴ない清

算を要するものがある。

孔子は論語の中に「質は文に勝てば，則ち野なり，文は質に勝てば，則ち史なり，文質彬々として然る後君子なり」と語って居る。質は人間味であり，文は智識である。野は野人で，史は学者である。私は現代において史は官僚と解釈して更に一層の妙味を感ずるのである。2千数百年前の文献であるが，私には新鮮で含蓄多く味わえるのである。人間味が智識を超越して居る。即ち智識をないがしろにして，出しやばるのは野人である。それと反対に，智識が人間味を無視して，威張るのは官僚である。智識が秀れ，それに伴つて人間味の豊かな人は君子である。君子とは真に教養のある人物である。教育の真の目標は教養ある人材を養成するにある。試験制度は質を犠牲にして，官僚的人材を養成する機関に堕する危険が多分にある。教育上最も考慮を要する点であると思う。

無採点　無試験であるから，無採点は当然である。試験をしなくても，他に採点の方法はいくらでも考えられるが，如何なる方法でも採点はしない。卒業生の就職する時に，その人の席次や，学習学科の点数を付け添えて，紹介するのは，今日も猶普通に行われている形式である。これは露骨にいえば，製造物品に正札を付けて売り出すのと同じ筆法である。製造物品なら正札に偽りありやなきやは，容易に証明が出来るが，人間の正札は，容易に証明が出来ないであろう。自主と独立を名誉とする人間は，自己の価値を表示する正札を背負つて，就職の門をくぐることは，変に感ぜられる。学校は又正札を付けて，卒業生を送り出すのも変なものである。一般社会では今年は，卒業生の売れ口は，良いとか悪いとか，まるで人間売買の様な口吻を用いて，怪しまないのである。今少し人間個性の尊重を考えないものか。

学校の正札は試験による採点数である。即ち智識の標準のある程度を示したもので，真の人物を評価するものでない。智識はその人の有する一部であって，全部ではない。我々の学校は無採点であったから，就職に関し最初は多少の困難があったが世間が次第に理解してくれる様になり，別に面倒を見なかった。

無賞罰　学校において学生に，品行方正，学業優等であるとして，賞品や褒状を授与して，これを賞するのは，一種の賄賂教育である。これに反して停学や退学を以て，不良の学生を処罰するのは失敗教育である。私はかく信じている。親子の間に例を取って見れば，子供の一人に善行があったとて，その子に何か賞品を与え他の子供連中をして，指をくわえて傍観せしめて，親として平気でいれるであろうか。これと反対に一人の子供が何か不良な行為があったとて，親から折檻を受けたとしたなら，如何であろうか。その折檻が多少でも無理であったり，又度を超えたものであったなら，忽ち他の子供の方の同情は親から去って，折檻を受けた子供の方へ移るであろう。封建時代ならばいざ知らず，苟も現代の空気を呼吸したものであるならば，頑是なき児童でも，自然にその心理に染浴している。況や学生々徒においておやである。この心理は処罰事件が，しばしば学校騒動の原因をなすものである。

私の在職15年間高工では，処罰に相当する様な事件は皆無ではなかったが，非常に少なかった。同じく校長をした中等学校であった商工実習学校では，かなり多数の不良や不正事件があった。特に大正大震災後横浜市の窮乏時代に著しかった。詐偽，窃盗，万引，暴力，賭博等で，時々新聞や，警察の厄介にもなった。警察に留置きになると，その都度私は主任教師と，警察に出頭して，連れ帰り出校せしめた。後には警察と特約して，拘留した際は，親元に通知せずに，直ちに学校へ通知する様に取扱っていた。

これら不良を戒める私の言葉は次の様なものであった。お前は学校の生徒である間に，犯罪したことは仕合せのことである。社会に出て後に犯罪して，刑に服する様なことになったなら，あるいは一生を棒にふることになるかも知れない，よく心得て以後を慎しめと戒しめるのであった。不良を処罰すると，それで犯罪は帳消しになった，棒引きになったと心得て，多くの場合悔悟にならないかもしれない。時として無処罰で，犯罪が不問に付せられたものが，一層学校と親密になり，それが更にその父兄にまで延長し，お互いに楽しき思いをすることさえある。

聖書ヨハネ伝の一節に，次の様な意味の事柄が書いてある。当時の文化人である学者と，パリサイ人の一群が，一人の女をキリストの前に連れて来て，この女は姦淫の現行犯罪者である。かかるものは，モーゼの法律により，石にて打ちこらせよと，規定せられてある。左様取り扱って差支えなきかと，今にも打たんとする権幕で，キリスト

に向って聞きただした。黙々として答えなかったキリストは，迫り来る詰問に堪えかねたか，漸く頭を上げ「汝等のうち罪なきものは，先づ石を以て打て」と厳格な態度で申し渡した。良心にとがめる所があるためか，さすがいきり立っていた，学者とパリサイ人は，お互に顔を見合せ誰れも打たんとする気配を見せず，一人去り二人去り，終にキリストと女の外，誰れ一人もいなくなった。そこでキリストは徐ろに立ち上り，四方を見まわし，もうお前を裁ばく誰れもいない。われも又お前を罰しないであろう。「女よ去って再び罪を犯すなかれ」と述べて解放した。キリストは実に見事な無処罰主義の典範を後世に残されたと私は感謝する。

私はキリスト教信者ではない。しかしこのヨハネ伝の一節には，深く感銘するものである。学校に罰則のあることは一般で，教育の一つの方便であろうが，私の長い教壇生活の経験は，絶えずこれを疑問とした。横浜に来り同時に校を主宰するに当り，無賞罰主義を徹頭徹尾実行して，全く自信を得た。しかして15ケ年間の経験により，その効果の決して，不良でないことに就き，充分の満足をかち得たのである。一人を賞して万人を励まし，一人を罰して万人を懲らすことは，私の腹の虫が，承知しないのである。賞せず罰せず、和気あいあい，輝く希望の中に，切瑳琢磨の道場を建設するのは，官公私を問わず学校の特権ではあるまいか。この特権を解せない学校は，徒らに世間の泥沼に，身を没し，ぬきさしのならない状態を呈しているのを見て，私は不思議に思う。無賞罰は教育の要諦と信ずるのである。

三無主義実行の手段　普通一般の学校は試験採点処罰等弁慶の七ツ道具を以て武装し，威厳を以て学生に臨んでいるが，我々の自由主義の学校は，丸裸で無武装，無軍備で，しかも又安全保障であるべき，在学生の保証人もないのである。入学せしめた以上，親子であり又師弟である。凡ての責任は学校はこれに当り，一切他を煩はさない覚悟をしていた。開校当初三無主義を宣言して，その実行の困難なることを痛感した私は余念なく教育に専念するため，専修しつつあった化学工業を放棄することを考え，化学，物理，数学等の多年蓄積した文献書籍を挙げて，４ケ所の図書館に寄贈し，自分の手記した凡てのノートを庭前で焼きすてて背水の陣を布いた。

無試験無採点は，一部少数の学生には，点とり慾が満されぬ為め，不平の声があることを知り，一週一時間づつ私自身が教室に出馬し，新入生を教授した。三無主義を初めとして，自由主義学校に於て，勉学する要領を半ケ年に亘り講演することとした。更に三年級が出来てから，残りの半ケ年を以て，卒業後官公庁及会社に就職した後の処世法に就き講演した。履歴書の書方から初め就職の際の面接より，就職後の同僚との交際，読書，娯楽，宴会，贈答（特に贈賄，収賄）妻帯，斉家，出所進退に至るまでの私の意見を講演した。

猶全学生には，一学期に２－３回，時事問題に就き講演をした。私は学生に対し一度も訓示とか，訓諭の言葉を使用したことがなかった。苟も訓示又訓諭となると，是非学生をして，その問題事件に服従せしむる権威がなければならない。私にはその権威がない。故に私のは単なる講演で，我輩はかく考える，学生諸子は如何，只参考に供するのであるとした。

教室や講堂で学生に講演するだけでは，何か物足りない気がせられるので，直接学生と接触する要を感じ，毎週水曜日の一夜，私宅を解放して，学生の有志と談笑する機会を作り，在職中継続したが，退職後も学生の希望により，戦時勤労奉仕の為め，学生の四散するまで続いた。如何に努力しても，全校の教職員と学生を挙げて悉く三無主義の熱心なる同志者とすることは出来ない。しかし又その必要もないのである。教職員中に数名の同志者があれば，それで沢山である。学生も同様で至って少数でも，熱心な共鳴者があれば，そこに校風徐ろに興って，動かし難き伝統の基礎が出来るのである。猶私は長い夏休中には，四散している学生に対し一通の信書を発信し，連絡を取った。学校の自由主義教育に協力してくれた職員学生には，今も猶深き追慕の念を持っている。

何れの時代でも，国家として教育の大綱というべきものがある。その大綱を破らない限り，教育の劃一主義を固守する必要はない。劃一主義は窮屈で，又甚だ圧迫を感ずるものである。私の当時文部省は劃一主義であるとして非難せられていた。しかし私は文部省は決して劃一主義を以て，我々教育者に強ゆるのでない，むしろ我々教育者側は，劃一主義の推進者であったと思った。毎年の学校長会議は劃一の原案を起草するものであった。又学校自体が，何事か起った時，又何事かを

計画せんとする時には，必ず文部省に伺いを立て，その指令を仰いでいた。それでは劃一にならざるを得ないであろう。私共は学校の自治，学問の自由を他より与えられるを期せずして，自ら与えて満足していた。

私は学校に御真影も，教育勅語も奉戴していなかった。三大節の祝日に，拝賀の儀式を挙行しなかった。当時の劃一制度を破ったものである。私は教育勅語の最も忠実なる実行者を以て任じて居った。一方私は皇室中心主義者であった。以上の型破りに就き，私に非難攻撃を加えるものがあるかも知れないから，私は弁護し得る充分なる用意を持っていた。文部省は知って知らぬ顔をしてくれた。今でも感謝している。

道徳主義教育を看板に表彰すると，多くは形式に流れ，たとえ無力とはいえなくとも，微力である。職業教育は物質主義で，科学とその応用に全力を尽くし，優勝劣敗の競争に没頭し，平和に危険のあることは，独逸の科学教育が，我々にその生々しい例を示してくれた筈である。そこで私は自由主義を信条として，道徳のかん養，職業技術の習得に努力したのである。

建築昭和7年卒　田辺謙輔画伯（春陽会）筆

本文 33 頁参照

最後に校風樹立は，学校教育の要諦である。卑俗な例であるが，私は多少錦魚飼育の経験がありますので，これを引用して見ると，学校は錦魚池で，教師の授ける智識は，錦魚の飼料の様なものである。池水は清浄のものであってはならない。適当な汚水で，盛んに微生物の発生を促す水質と，水温が必要である。若し長雨の為め池水が一新して，清浄となる様な場合には，下肥を撒布する必要さえある。この適当なる汚水は，錦魚の好む世界であって，この様な水の中では，与える飼料はどんどん食せられ，錦魚は無病で良く成育するのである。適当な水でなければ，如何に好餌を与えても，錦魚の商買は成り立たない。破算である。錦魚飼育の秘訣は水を作るにあるので，学校教育の奥の手は，良校風を興すにありと，私は信ずるものである。

私が随時学生に談話した事項は，**自由教育の俤，自由教育の片鱗，自由教育10年，名教自然，入愚亭独嘯，煙洲漫筆**の単行本に記録せられている。本パンフレットの内容は，以上と多少重複したきらいがあるが，私の自由教育実行の道行きを，序述したる点において，多少の差ありと思う。それでも記述の前後をあやまり充分に整いおらぬことを，甚だ遺憾とする。只私は同志と共に実践した教育の昔し話を，序述したのに過ぎないが，今も猶これを信じている。特に現下の世相を観て，何れの職業層にも，何れの階級にも，道義のひらめきの片鱗も見えず，徒らに自己の権益の主張擁護に，日夜闘争排他の状勢に，私は深き憂慮を催すものである。国破れ，土地と資財を割き幾百万の貴重な子弟を失い，窮乏疲労の我国は，続く子弟を養育することに捲土重来の復興の重点があると思う。今こそ教育家の最も尽くし甲斐のある時代ではなかろうか。戦後の教育は，再検討の必要があると思う。教育家よ自己を救うより先づ子弟を救え，然らば自己も救われるであろう。

私は大正9年1月19日に，横浜高工に任命を受け，それより満15年後の昭和10年1月19日，辞表を提出して学校を去った。故旧門下の有り難き厚意により，校庭に「**名教自然**」と題する碑を残した。自由教育の標彰である。

（昭和29年3月15日）

目　　次

半世紀以上に亘って教えを受ける幸福者……菅　　要　助… 2
「煙洲先生と横浜」……竹　内　秀　雄… 4
煙洲思想のバックグラウンド……石　井　欣之助… 9
煙洲先生に捧げて「自動車技術の50年」……荒　牧　寅　雄…13
煙洲先生と化学調味料グルタミン酸ソーダ……徳　田　徳之丞…19
回　　想……平　田　義　雄…20
読萬巻書行千里道……西　尾　清　治…22
煙洲先生の遺志アジアに生きる……大　山　量　士…23
煙洲先生の思い出……秦　　克　夫…31
遺芳は永く……吉　岡　　勲…32
先生の肖像スケッチについて……田　辺　謙　輔…33
２つの卒業証書……犬　塚　　勝…33
インドネシアの憶い出……斉　木　雅　夫…34
親身な山のお婆あさん……望　月　藤　三…37
教育の本質……鈴　木　洋　二…38
煙　洲　会……小　汀　浩一郎…39
ああ40年・400回……前　川　正　男…39
不向如来行処行……林　　辰　治…41
屋久島開発に思う……東　　登…44
煙洲会に思うこと……丸　岡　勝　美…46
先生の思い出……中　山　一　郎…48
編輯後記……村　松　四　郎…50

半世紀以上に亘って教えを受ける幸福者

煙洲会代表　菅　　要　助（74才）

1.　母校在学時代（3年間）

煙洲鈴木達治先生との最初の御縁は大正10年（1921）に私が横浜高等工業学校に入学した時に始まります。当時先生は同校の初代校長として非常な熱意を以て学生の指導教育に打込んで居られたことは今でも眼に見える様であります。

我々母校在学中は毎月数回機械・応化・電化の3科の学生を講堂に集合して先生独特の講演を1時間以上に亘って熱演され学生に多くの感動を与えて下さいました。

又先生は毎週水曜日の晩には学生との面会日と決められ御自宅（当時は根岸の御宅）に学生を誰れ彼れの区別なく招じ入れ，学生との懇談の場を作られ拾数名で夜11時過ぎまで談笑に花を咲かせることが屢々だった。此の様な師弟の人間的なふれあいにより大きな教育効果を体得したことを痛感して居ります。

大正13年（1924）3月，吾々の卒業式に煙洲先生のはなむけの御言葉として忘れることの出来ぬのは「諸君が社会に出たら出処進退を明確にすることが大切だ」とおっしゃられたことであります。

2.　母校卒業後先生の御在世中の時代（37年間）

卒業後吾々の色々な会合に先生の御出でを御願いすると万障御繰合せの上御出席下され教え子達の将来のため愛情を込めた御指導を下され卒業生一同の敬愛置くあたわざる大きな存在でありました。

昭和14年（1939）6月川崎地区在勤の母校卒業生が会社終業後に先生を御招きして夕食を共にしながら先生の御話を聞く会合を始めたのが煙洲会の最初の会合でそれ以来毎月1回開催することとし，先生を中心とし卒業生拾数名が出席しなごやかな懇談の場として約2時間を過して解散すると云う此のうるわしい師弟愛に満ちた毎月1回の会合が昭和36年（1961）8月に先生が91才で御亡くなりになる2ヶ月前の第219回まで22年間亘にって開催されました。

3.　煙洲先生の没後煙洲会

昭和36年（1961）8月29日煙洲先生没後，会員多くの要望により煙洲会を継続開催して先生の高遠な御思想を後世に受継ぐ努力をしようと意見一致した。若い層の会員の入会も多く毎回40名位の出席があり煙洲先生の御思想をくんだ同志の会合として御互に切磋琢磨し相互啓発に役立てて居ります。

4.　第400回煙洲会を迎えて

去る昭和51年12月の煙洲会は第400回に到達し，初回以来37年を経過し其間煙洲先生の御指導，

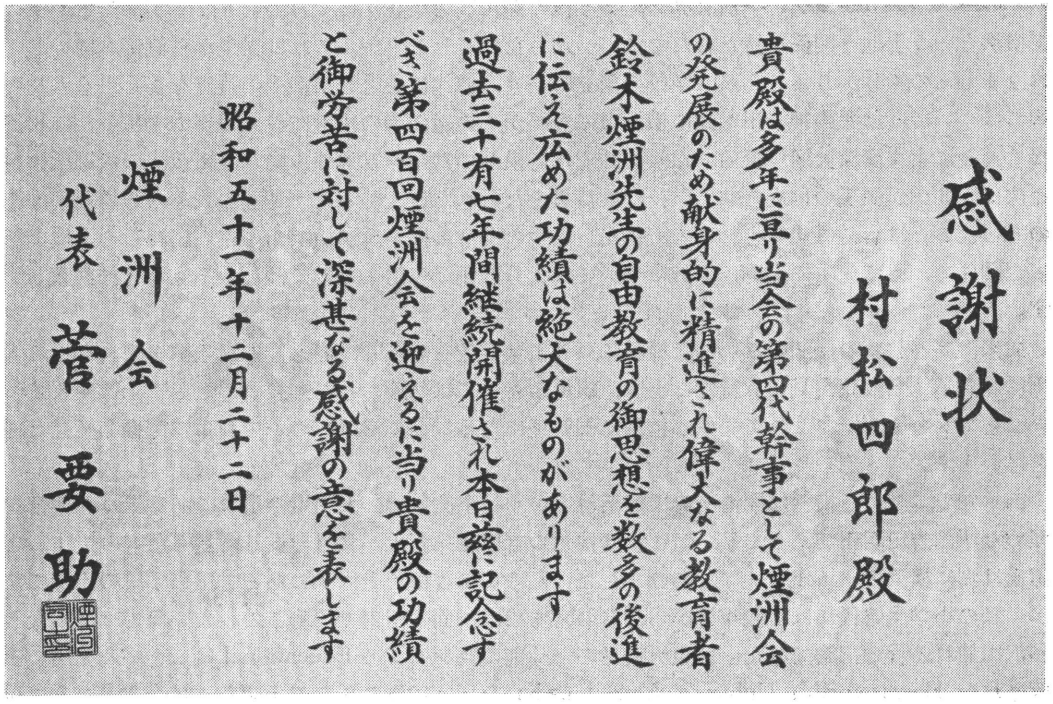
御教示が我々卒業生に偉大な影響を与えたことを痛感するものであり，特に私にとっては母校へ入学以来55年の永きに亘って先生の教えを受けることが出来，全くの幸福者であると感謝に堪えません。

今日以後も及ばずながら１人でも多くの者が煙洲思想の恩恵に浴する様に微力を致す所存であります。

5.　煙洲会の幹事諸氏の功績

煙洲会が永年に亘り継続し「会員の人格教養の向上に大きく貢献したことの原動力は煙洲先生の御人徳によることは勿論でありますが，其の間４代に亘る４名の幹事諸氏の献身的な御骨折によることも大であり会員一同の感謝に堪えぬ所であります。

別掲感謝状にて其の意を表します。



感謝状

村松四郎殿

貴殿は多年に亘り当会の第四代幹事として煙洲会の発展のため献身的に精進され偉大なる教育者鈴木煙洲先生の自由教育の御思想を数多の後進に伝え広めた功績は絶大なものがあります

過去三十有七年間継続開催され本日茲に記念すべき第四百回煙洲会を迎えるに当り貴殿の功績と御労苦に対して深甚なる感謝の意を表します

昭和五十一年十二月二十二日

煙洲会

代表　菅　要助

6.　煙洲先生との御縁の年代表

母校へ入学	大正10年	1921年	3年	55年
同校卒業	大正13年	1924年	15年	
煙洲会発足	昭和14年	1939年	22年	
先生御逝去	昭和36年	1961年	15年	
第400回煙洲会	昭和51年	1976年		

「煙洲先生と横浜」

竹　内　秀　雄

今夕は第400回煙洲会の記念例会として何か先生の思い出を語ってはという御依頼がありましたので，お引きうけしましたが，今となって，果して自分が適任なのだろうかと，いささか不安になって参りました。暫らくごしんぼうをお願申します。

題目は「煙洲先生と横浜」と致しました。それは申すまでもなく，横浜は先生が第二の郷里として最も愛し，またその御仕事の上で最も御活躍になった所だったからです。

横浜高等工業学校の開校は大正9年の4月でありますが，先生が初めて横浜という土地と関係を持たれたのはいつだったのでしょうか。これは先生から直接お伺いしておりませんので分かりませんが，学校の創立に当り，初代校長として，その運営を委せ得る人物の選考については地元の神奈川県竝に横浜市の当局がその適任者の物色に最大の努力を払ったに相違なく，後に東京商業会議所会頭となった井阪孝，横浜の富豪原富太郎，同じく市政界の大御所中村房次郎の3氏が高工の創立と共に学校の維持員となられたことからも，是等の人々の強力な御推薦のあったことは容易に想像されるのですが，先生の御令弟棟一氏が横浜市の左右田銀行の頭取であった関係で，已に先生の人物，才腕については十分評価済みだったのではなかろうかと推察致します。

従来，高等教育の機関のなかった横浜に高等工業学校を設置し，而も，独自の教育方針を以て天下に範を示す名校長を見出し得たことは，横浜市としては勿論，わが国教育界として正に慶賀すべきことでありました。ここで先生が校長に御就任になる以前の横浜について簡単に回顧して見たいと思います。

御承知のように，横浜は開港当時は横浜村という一小漁村で，大岡川の川口にあるデルタ地帯を埋めた所謂吉田新田でありました。これは地元の吉田勘兵衛氏が私財を投じて造ったものです。吉田氏は真に横浜のパイオニーアでありました。私はこの吉田氏と因縁のある吉田小学校の出身ですが，私の小学生時代には，阪東橋からお参の宮までは一面の田甫で，そこの小さい流では，ふな等が沢山捕れる程の田舎でした。関東大震災の一寸前にロンドンの Educational Co. という書店で出版された Harmsworth's Universal Encyclopedia という12巻からなる手頃な百科全書が，その後間もなく丸善を agent として売り出されましたが，その横浜という項目を見ますと，横浜の人口は43万，写真には俗にメリケン波止場という大桟橋と税関の建物が掲載されています。この桟橋の上部は木造のすのこを張ったもので，下には波の揺れ動くのが見え，雨の日など，その上を足駄で通るのが子供心には怖かったことを覚えています。桟橋の入口では米人の新聞売りが大鞄に入れた The Examiner とか The Japan Advertiser などを売っていたものです。これらの新聞は当時神戸の The Japan Chronicle という英国系新聞と対照的なものでした。

山手には御存知の外人墓地（当時は異人墓と呼んでいました）の筋向いに赤煉瓦にきずたの絡らんだ Gaeity 座という外国からの旅役者が興行する劇場がありました。この劇場は明治18年に建てられたもので，その名前はロンドンにある劇場名からとったものです。東京から坪内逍遥はじめ文士連中が見物に来たそうです。この辺は今日港の見える丘の小公園が附近にあって桜の名所，横浜の文学散歩の一つのルートになっています。この他，文学散歩に関係して赤煉瓦の20番のホテル

（英国系）というのが海岸通にありました。当時山下公園はなく直ぐ前が water front でした。このホテルに日本に帰化した小泉八雲，ラフカディオ・ハーンが同ホテルの支配人と知り合いだった関係で，よく宿泊したと云われています。

横浜高工の創立は，前にも申しました通り大正9年，つまり1920年で，この年の4月4日（4月4日は私の誕生日なんです）に私は結婚して，蒔田の英和女学校（今日の成美学園）の丘の麓に世帯を持ちました。横浜高工とは余程縁が深かったのですね。当時，蒔田，弘明寺方面には未だ埋め立て地が多く，その空地で明大の野球部（主将は岡田源三郎という早実出身の名捕手で，戸塚の穴八幡の宮司の息子）とカナダチームとの対戦がありました。野球の発祥地と云われる横浜での主要なゲームは勿論，横浜公園内の芝生の運動場で行われました。ここは主として英人専用のクリケットと米人専用の野球のために使用されていました。Y. C. A. C. という横浜在住の米人対神戸外人チームの野球の定期戦をはじめ，日露戦争直後，米国の太平洋艦隊が，戦力を誇示する意味で大挙して横浜港に来て以来，その数の殖えた米艦チームとの野球試合はこの球場で行われました。早大の野球チームが初めて米国遠征に出かけたのが明治39年で，主将には都市対抗野球の創始者，橋戸頑鉄，投手には当時日本随一の河野安通志という連中で，走者を塁に進めるバント戦法はこの時の洋行土産だそうです。この早大チームを初め，慶応や学習院のチームが外人を相手にしたのはこの公園球場でした。ここで米艦チームが横浜に来た時のエピソードを御紹介しましょう。米艦の水兵がある朝，横浜市内を歩いていると，市民がお互いに「お早う，お早う」と挨拶するのを聞いて，驚いた。「流石は横浜だ。市民が皆，俺達の生れ故郷の名を知っている」と。これは彼等が「お早う」というのを「Ohio」と聞いたからです。もう一つ笑話があります。それは，日本人はお札を云う時に，「ありがとう」と云います。これを聞いた米艦の水兵が，これは分かり易いと思った。それは英語にalligatorという言葉があるのでalligator（アリゲータ）と云っていた。alligator というのは「わに」のことです。ところが，この水兵，alligator という言葉を使うのを忘れて，「わに」という別の英語 crocodile(クロコダイル）と云ってしまったという話である。御本人，相手の日本人が眼を白黒している様子を見て，「しまった」と思ったかどうか？　この米艦のOhioをはじめ，Pennsylvania とか Wisconsin 等のチームが早慶とこの運動場で試合をしたものです。また早大の米国遠征以来，米国の大学チームの Chicago, Stanford, Washington（シアトル所在）などが親善試合のために来日するようになり，明治41年にはセミプロの Reach All Americans がこの公園球場で試合するようになった。このチームの中には当時のメージャーリーグ（American league）所属のデトロイトタイガースの2塁手デリハンティも参加していた。

さて，大正9年から同11年にかけては世界的不況の年でありました。横浜財閥の一つ茂木商店（野沢屋の前身，社長は茂木惣兵衛氏）の倒産に伴い，七十四銀行が破産しました。このあおりをくって，商工実習学校の創立にあたり，貿易商安部幸兵衛氏から寄付された100万円の中，50万円（主として証券）の預金がフイになってしまいました。当時，兼任校長であった煙洲先生の御苦労も並大抵ではなかったろうと思われます。因に当時の茂木邸というのは，現在の野毛山（動物園の敷地を含む）公園一帯に亘る宏大なもので，邸内には細流があり，野鳥の声が聞える別天地で，毎年11月にはそこの菊花園が公開される横浜名所の一つで，三渓園と共に名園の双璧でした。ところで，前に申しました倒産した七十四銀行の整理銀行として生れたのが今日の横浜銀行です。

この辺で煙洲先生のプロフィルに注目し度いと思います。皆さんは，夫々先生に対するイメージをお持ちのことと思いますが，私には，先生の印象としては，あのイギリスの宰相Winston Churchillに似ていられるように思われます。煙洲のお名前が示すように，葉巻をお喫いになることも共通しておりますが，御性格の点で，Churchill が世界第二次大戦を勝ち抜いたあの辛抱強さは，先生が関東の大震災で，校舎が全潰した時，少しも動ずる色なく，文部省の名古屋への移転命令を拒

否して，横浜の地を離れなかったあの冷静，沈着さの中に共通したものが窺われます。

Churchill は第一次大戦の時，海相として活躍し，その素晴らしい海戦記録を著述してノーベル文学賞の栄誉を獲得しましたが，煙洲先生もある意味での歴史家でありました。

歴史と申せば，先生の書斉には Edward VII 伝がありました。60年にも及ぶ Victoria女皇の君臨された後，やっと王位につかれた方ですが，今世紀の初め，日英同盟を締結したこの英国の王様の人間味豊かな人物像に先生は興味を持たれたことと想像します。尚，先生は先輩の徳富蘇峯先生の著書を非常に愛読されていたことは皆様もご存知のことと思います。蘇峯先生はよく英国の偉大な歴史家で，あの有名な英国史やインド総督のクライブ伝等の著者で知られている Macaulay と比較されますが，それは蘇峯先生の文体がこの英国の文豪の其と酷似しているからでありましょう。

次に，先生が，教え児達から御退官の記念に，先生の銅像をという案が出された時に，これを一蹴されて，あの名教自然碑を選ばれた一事を以て，先生の高遠な理想が窺われるように思います。先生は御自分の姿を風雨に曝らすことを喜ばれなかったのです。前に申した Churchill の海相時代，首相だったあの有名な Lloyd George は Churchill と同様，短軀でした。地方遊説の際，そこの司会者が Lloyd George の短軀を見て，一寸以外だったという風に紹介すると，首相は，「この地方では人物を評価するのに，顎から下の長さで測るようだが，わしの評価は顎から上である」と応酬して聴衆をどっと笑わせたという話があります。煙洲先生が御自分の姿を銅像で残したくなかった理由もその辺にあったようです。

次に先生の教育について考えてみたいと思います。横浜は高等教育の遅れた所でした。明治から大正の初期にかけて，横浜の教育に貢献したのは何と云っても mission schools でした。当時市内には横浜商業学校（通称Y校），横浜一中（通称神中）二中，三中，と女子の平沼（公立）と元町（私立）位のもので，他はフェリス，双葉（紅蘭），共立，関東学院，捜真等の mission schools で，これらのミッションスクールはキリスト教による民主的な個性尊重の教育を以て知られていました。特に英語の点で優れていたフェリス出身の若松賤子さんの小公子の翻訳は明治時代に於ける白眉でした。原作は Frances H. Burnett という英国生れの米国小説家が1886年に著したもので，1888年に劇化され，評判の作です。その後映画にもなり，少年少女のための芝居としてわが国で上演されたこともありました。この Ferris は江戸の役者沢村田之助に義足を造ってやったあのヘボン博士の英語塾から女生徒ばかりを引き受けたミスキダーが明治3年に創立したものです。

こういう背景で誕生した横浜高工は新しい使命を持っていました。「名教自然」という，従来の官学の殻を破り，今日去勢された私学が忘却した自由啓発をモットーとする教育方針を堅持していました。先生の思想の中には同志社で学ばれた新島襄先生のキリスト教の土壌のあったことは否めません。また日本人の祖先崇拝，論語，中庸等の精神を重んじていたことも否定出来ません。それに近代の科学精神をふまえて，教育の合理化をも忘れてはおりませんでした。ところで，先生が同志社を卒えてから第五高等学校で英語の教師，而もキリスト教の偉大な先覚者内村鑑三先生の後任をつとめられたというエピソードは余り知られていないようです。この内村先生の直弟子から南原繁，矢内原忠雄という二人の東大総長が生れたことは御存知のことと思いますが，この矢内原先生が嘗て文芸春秋に内村先生の伝記を書かれた時，五高時代の前記エピソードを，煙洲先生が矢内原さんに手紙を以て補足され，同先生から御礼状を頂いたというお話を承ったことがあります。只今，申し上げた南原，矢内原の両先生と共に内村先生の高弟であった関東学院の坂田　祐先生のことをここに付け加えておき度いと思います。坂田先生は日露戦争の時に騎兵の特務曹長として従軍し，帰還してからは関東学院の前身である東京のミッションスクールの4年級に編入して貰い，同校の体育教官を兼務し，其後一高，東大へと進み，哲学を専攻された方ですが，坂田先生は煙洲先生の教育方針に非常に共鳴しておられました。大正12年関東大震災の直後，先生は校舎復興資金募

集のため渡米し，各地を歴訪された折，暫らくシカゴに滞在されました。この時私は初めて先生にお目にかかったのです。私は大学の裏手の Kenwood Avenue，先生は前通りの Ellis Ave. に夫々下宿しておりましたので，屢々往来してお話する機会がありました。偶々，National League 所属の New York Giants が Chicago Cubs と対戦して double-header を行うという好機が到来しましたので，早速，先生をこの試合に御招待することにしました。と申すのは，実は，坂田先生は一高の御出身で対三高の定期戦で応援に狩り出されましたが，野球の事は全然分らないので閉口したという話を聞いていたので，先生を啓蒙しようと思ったのです。それで，その試合の前夜先生の下宿へ押しかけて，野球に関する講義を2時間程やりました。その時，講義の冒頭に，「先生は学校長なんですから，野球の何たるか位は知っておかなくちゃ駄目ですよ」と申し上げたことを忘れません。そして翌日試合を観戦しながら種々と説明しました。その時のスコアなどは忘れましたが，真夏の本場野球の醍醐味を満喫しました。Giants 対 Cubs の試合と云えば，わが国の巨人阪神戦と云ったところで，この日には市長招待のパーティをもキャンセルする程の人気カードでした。忘れもしませんが，1924年というこの年はあのベーブルースが60本の本塁打を打った彼の最盛期でした。それで，幸に，私はルースが American League の Chicago Comisky のグラウンドで，対 White Sox の試合に17回の延長戦で，彼が右翼の観覧席に決定的な大本塁打をかっ飛ばすのを観ることが出来ました。

野球の話がつい長くなりましたが，煙洲先生の教育の特色の一つに課外活動を奨励なさったことを忘れてはなりません。野球，陸上競技等，夫々の特色がありましたが，港である横浜の学校として短艇部の活動に大きな声援を送られ，新艇が建造された時，これに，Suez, Panama, Magellan と命名されたことは有名で，この部が百戦百勝の快記録を樹立したことは御存知のことと思います。

先生がスポーツに理解を示されたのは，つまり，スポーツマンシップが国際人として進出するのに，不可欠なものとお考えになったからだと思います。またわが国古来の柔剣道についても個人の心身の鍛練に役立つものとして奨励なさったことは各部で御活躍になった皆さんのよく御存知のところでしょう。こうした心身の鍛練の他に，入学式や卒業式の行事においては勿論のこと，ふだんでも折に触れ御自分がお話になるばかりでなく，名士を招いて記念講演や，経済問題の集中講義を学生に聴かせるという行き届いたプログラムを常に御工夫になっておられました。石橋湛山先生や毎日の副社長の岡先生がその時の講師であったことも，御記憶の方があるかと思います。また卒業を控えた学生に対し table manners まで先生が範を示されるといった具合でした。

従来の横浜は貿易港として，生糸や茶などを輸出していたので，シルクロードに当る甲州財閥の若尾幾造氏などが活躍し，お茶の輸出が清水港に移るまでは大谷嘉兵衛翁が主宰する製茶業や，雑貨などの外国商社との取引きで，所謂，商館番頭（主としてY校出身者など）が幅を利かしていたものですが，そうした時代も去って，工業技術が重視されるようになりました。ここにおいて煙洲先生の教育が脚光を浴び，京浜工業地帯の繁栄を導くに至ったと申しても過言ではありません。先生の教育は詰め込み主義ではなく，飽くまで自由啓発で，個人の自覚と責任を重んずるものでした。三無主義というのは，要するに名教自然のエッセンスで，煙洲先生という稀に見る教育者の理想に他なりません。先生が六ツ川の御自宅で学生に面接され，親しく対話を持たれたということは教育の真髄だろうと存じます。今日，修身とか倫理という言葉を口にすると笑う人があります。それは，今日の政治家の責任じゃないでしょうか。いや，そうとばかりは云いきれないのが残念…。

坪内逍遥先生が早稲田中学の校長を兼務していました時，御自分で修身の教科書を編纂しました。その教材は主として世界の偉人，君子の逸話を選び，先生一流の名文で表現された興味深いもので，且つ非常に教訓的なものでした。これは恐らく，先生御自身の生活態度が極めて厳正なもの

であったからでしょう。その逍遥先生が，総長の大隈伯が参観のため教室に入って来られた時，葉巻をくゆらしておられたのを見て，直にこれをたしなめたという話は有名であります。煙洲先生は葉巻の愛好家でありましたが，決してそんな不作法はなさいませんでした。震災後のバラック時代に，葉巻をお喫いになる時，先生はよく商工実習の校長室へ行かれたものでした。

戦後，暫らく葉巻に事欠くことの多かった時，冨山校長は米軍の教育担当官のマクマナス大尉が来校する度毎に，同大尉が敬意を表して葉巻を呈供したものですが，その都度，冨山先生は，これは煙洲先生のために頂きますと云って受取られるのを私は拝見しました。米軍の接収に関連して，思い出すのは，わが高工自慢のベッヒシュタインというピアノが徴用された時のことです。このピアノこそ煙洲先生が学生の教養のために購入されたもので，当時，全国でも稀らしい逸品でした。そのため是非返して貰いたいと米当局に掛け合って取り戻したことがありました。

こうした文化，教養の面まで心を配ばられた先生は流石だと思います。本夕は，釈迦に説法ですから，名教自然について理屈めいたことは申しません。唯だ先生の御人柄と学校長としての具体的な施策の一端をお話したに過ぎませんが，最後に先生が90歳の長寿を保たれた秘訣の散歩について一言し度いと思います。先生は学校教育の基本である知育，徳育，体育の所謂，三位一体，演劇で申すなら俗に三一致（Three unities）でありますが，先生は正にこれを守った方でした。前に申した通り，学生の体育は勿論，御自分の健康に非常に留意されました。そのためには規則的な散歩を欠かさず，根岸にお住いの頃は，競馬場の周囲を散歩されたり，正月には根岸から伊勢山の皇大神宮へ徒歩で参拝なさっておられました。その際 pediometer(歩測計）を携行されて，その距離を測っておられたことは有名であります。

根岸の競馬場と云えば，明治時代には東洋一を誇ったもので，私も少年時代，初夏の候，この競馬場の周囲のからたちの生垣の破れ目からジョッキーのカラフルな雄姿が風を切って走るのを見て，どんなに胸を轟かせたことか。〃 当時，明治天皇が行幸遊ばされる時には，鉄道で新橋駅（現在の汐留の荷物駅）から横浜駅（現在の桜木町）にお着きになり，左手の弁天橋をお渡りになって，御用邸に入られ，少休止の後，馬車で市内をお通りになり，山元町を経て根岸にお出になられたものであります。

さて，煙洲先生が，この根岸から六ツ川にお移りになったのは昭和の5年頃だったと思いますが，杖をひく先生のお姿が見受けられましたのは高工御退官の頃からでしょうか。いづれにしても，「先生と杖」というのは未だに強く私の印象に残っております。また，戦時中，東郷神社を祠られて皇国の安泰を祈念し，また横浜高工の発展を念じながら，六ツ川の丘から下界を眺め，悠々自適の晩年をお送りになった尊い先生の御姿こそは私共に忘れ難いイメージであろうと存じます。

甚だ纏まらないお話で失礼致しました。

これで私の講演を終ります。

煙洲思想のバックグラウンド

電化大13　石　井　欣之助

昭和37年8月煙洲会から配布された「先生の思出」の中に「私の中に生きている人間鈴木達治」というような生意気な標題で私（当時61歳）は一応私の頭の中にある煙洲先生を語らせていただいた。当時から15年過ぎた今日76歳を迎えようとしている私は前回の記憶も大分薄らいでいるので改めて読み返して見ると現在でも先生についての印象はほとんど変っていないことに気付いた。

その時も書いたように私は電化1期に入学し病気休学のため1年遅れて2期に卒業した。

そのために菅要助君と同期卒業となり，その縁で煙洲会へも（終戦後ではあるが）顔を出すようになった。人生とは妙なものである。

今度煙洲会の第400回記念に際し何か書けと菅君から言われたが前述のごとく私の頭の中の煙洲先生はあまり変っていない。又前回の考を改変する必要もないことを自ら確認した。しかしわが人生の重要な何頁かに於て煙洲先生のような偉大な人格に接触することができた幸運というものに感謝する念は年を加える毎に強くなるばかりである。それと同時に前回の思出を読み返す機会に他の皆さんの思出や感想をも読み直し感動を新にする所が多かった。同じ文章を読んでも年が15年も隔たれば印象が変るのは当然であるとは言え，このような機会を得たことの幸を思わざるを得ない。しかしよく見ると思出集の大部分は先生との個人的接触を中心とする思出であり感想である。それはそれで大変具体的で結構でありその中から汲めども尽きぬ貴重な印象が得られることはまちがいない。

私は今回は前回と重複しない何かが書けないかと考えた。私は常々煙洲先生の思想の一番の根拠となっているものは何であろうかと考えていた。このことは先生に面と向って伺ったことはない。しかしこのことは重大でもあり（ある人は，或は大部分の人はそんなことは大事なことではないと言うかも知れないが）興味あることでもあると私は考えている。ところが少し考えをすすめて行くとそんな大それたことは私如き者の手に負える仕事ではないことがわかって来た。私はいつかNHKの教育学（大学講座）を聞きかじったことがある。ペスタロッチに始まって福沢諭吉まで来たと記憶しているがその時何故新島襄や鈴木達治にまで及ばなかったのかと残念に思った。

私は前述した前回の感想文（極めて断片的な所感ではあるが）で煙洲先生とキリスト教，孔孟，老荘思想との関係については一応触れた。名教自然や三無主義などのバックグラウンドは老子であろうということも述べた。又先生から仏教に就て伺ったことがないことも述べた。

これらの事に関連してたどって行くと未解決な問題点として私の頭の中に浮んで来ることが数件ある。それらを整理して見るとつぎのようになる。

「皇室中心主義」と老荘思想は両立するか。

「皇室中心主義」者が何故御写真奉拝を行わなかったか。

御写真奉拝をしなかったかどで不敬事件を起し，日露開戦に際しては非戦の立場を取った内村鑑三は先生の崇拝の的であった。（内村鑑三著「代表的日本人」については前回に述べた。）

要するにこれらを通じ先生の戦争観，天皇制に対する態度などについて突込んだ御考えを御伺いし度かったと思うのである。

つぎに私が明確にしたかった問題は先生の女性問題観である。実はこのことに関しては煙洲会の席である学生の女性問題の解決談を具体的に伺ったことがあるので大体は把握していたのであるが，このたび前回の思出集の中の渾大防氏の文章を読みその中に出て来る有島事件に対する先生の態度によって氷解できたと私は思うようになった。すなわち少し具体的に表現するならば先生の女性に対する態度は自由啓発的，名教自然的であったのだと私は解している。

以上のように私は僭越にも先生の思想的バックグラウンドを分析しようとして匙を投げた形となったが，ここに先生の思想というよりも人間鈴木達治を偽りなく最も端的に表現している詩というものがあることを思い出した。

ここにはキリストも釈迦も孔孟も老荘も表面には出ていないが，煙洲思想のバックグラウントにあるものが渾然一体となって味わい深く表現されていると言ってよいであろう。

煙洲先生遺稿集として昭和43年8月29日（先生7回忌）に配布された詩篇は全部で47篇ある，全部御直筆で且つ御達筆のため吾々に読み取り難いもの又は読み誤り易い個所も2，3ある。今それらの中から私の前掲問頭点に答えて呉れそうなもの数篇を引いて鑑賞しながら若干の考察を加えて見たいと思う。

奉賀御即位大典

登極大儀挙旧京　　満都抃舞仰休明
昭和冠帯悉朝集　　三十六峰雲作纓

登極の大儀旧京に挙ぐ
満都抃舞して休明を仰ぐ
昭和の冠帯悉く朝集す
三十六峰雲纓を作す

履歴によればこの年(昭和3年)先生は従四位，大礼服に勲三等瑞宝章を佩し，威儀を正して参列されたと想像される。（昭和2年2月陞叙高等官二等とあるのは一等の誤りであろう。）この年先生56歳，得意思うべしである。東山三十六峰は雲纓（冠の紐）を引くが如くに見えた。青年天子の前途が祝福された。

空軍吟

銀翼連天各争先　　長駆万里向何辺
空軍独可摧兇虜　　現下英雄皆少年

銀翼天に連なって各々先を争う
長駆万里何れの辺にか向う
空軍独り兇虜を摧くべし
現下の英雄皆少年

作年が明記されていないが支那事変初期の渡洋爆撃が想起される。吾等も同じだが若鷲に満腔の信頼を寄せていた。大陸侵略などとは毫も考えていなかった。先生も同様であったと窺われる。兇虜を摧くには空軍に限る。若いものに任しておこう。大したものだ。少年航空兵よ！　底抜けに明るい詩。

昭和13年3月送高工卒業生

傷心何事不勝春　　四百余洲見戦塵
螢雪三年弘寺畔　　得知皇道大精神

傷心何事か春に勝えず
四百余洲戦塵に見ゆ
螢雪三年弘寺の畔
知るを得たり皇道の大精神

第1句は何か一寸心配な気分が頭をかすめているようである。戦線は支那大陸に拡大し止まるところを知らない。螢雪三年の後，学を卒えたわが弘陵健児の幾人かもやがて大陸の戦線に赴くであろうがこれでよいのだろうか。

いやいやそれでよいのだ。皇道の大精神があるではないか。

サイパン島玉砕

柴蠻玉砕恨千秋　　勇躍誰能報此讐
台閣諸公乏闘志　　気魂呑敵属吾儔

柴蠻の玉砕恨千秋
勇躍誰か能く此の讐に報いん
台閣の諸公は闘志に乏し
気魂敵を呑むは吾儔に属す

先生の純粋な意気込が窺われる。サイパンが玉砕してもまだまだ。大臣共が閉口たれてしまっているではないか。闘志満々敵を呑むの慨あるのはわが党の将士あるのみ。

防空壕吟　　昭和20年4月

護国空軍健在哉　　米機盲爆響如雷
梅花不知人間事　　馥郁清香塹外開

護国の空軍は健在なりや
米機の盲爆は響雷の如し
梅花は識らず人間の事
馥郁たる清香塹外に開く

第１句。満腔の信頼を寄せていたわが空軍であったが段々？（哉）が付いて来た。昭和20年４月である。それでも尚米機盲爆という言がある。その上梅花を賞づる余裕を持っておられた。

最後之御前会議（昭和20年８月）
阿南慟哭暈龍顔　悲劇君臣咫尺間
聖慮無辺天地狭　傷心一国涙潸々

阿南慟哭して龍顔を暈(くら)む
悲劇の君臣は呎尺の間
聖慮辺(かぎ)り無し天地狭し
傷心一国涙潸々

阿南中将の割腹自決については煙洲会で先生から親しく御感想を伺った記憶がある。聖慮広大無辺なること天地にも比すべし。いや寧ろ天地の方が小である。

終戦当日謹聴御放送奉謝天恩
誰使至尊為此言　茫然飲涙閲乾坤
回天戦局都無策　総向皇城仰聖恩

誰か至尊をして此の言を為さしむ
茫然涙を飲んで乾坤を閲(とさ)す
回天の戦局は都(すべ)て無策
総て皇城に向って聖恩を仰がむ

天皇の戦争責任など先生は問われない。至尊をしてこの言をなさしめたのは誰だと問われる。よく考えて見れば戦局を転回出来なかったのはすべて策のよろしきを得なかった当局者の罪である。恐れ多いことである。今はただ皇城に向って皇恩の広大無辺なるに恐懼するのみである。

戸塚街道闇売蔬菜
暁色纔分来往囂　幾群人影竊逍遥
看他満載蔬菜列　不達都門闇裏消

暁色纔かに分ち来往囂(かまびす)し
幾群の人影竊(ひそ)かに逍遥す
他を看るに満載蔬菜の列
都門に達せず闇裏に消ゆ

作年が明かでないが終戦直後の風景と想像される。野菜の闇売の情景がエキザクトに活写されている。この時代にこれだけの冷静な観察はなかなかむずかしいことである。正確な中にもユーモアも見える先生御自身の食糧事情はある程度よろしかったのかなどと考えて見る。

時事　昭和21年８月念九
残民争食四漂流　百鬼跳梁更添憂
野老纔余猫額土　朝耕夕読待登秋

残民食を争いて四方(よも)に漂流す
百鬼跳梁して更に憂を添う
野老纔(わづ)かに猫額の土を余す
朝耕夕読して登秋を待つ

作年の終りにある念九は29日のこと。詩の意味は一読明かである。ただし六ツ川台のお宅は決して「猫額の土」ではない。登秋はみのりの秋。

時事　昭和23年６月初九
頑民競利半豺狼　国破家傾独断腸
只托紫煙吾尚在　蕭條孤影豈要傷

頑民利を競いて半ば豺狼
国破れ家傾きてひとり断腸
只紫煙に托して吾尚在り
蕭條たる孤影豈傷むを要せむや

初九は勿論初旬の九日。街頭は利を競う頑民でガヤガヤとしている。人間とは思われぬ浅ましさ。まこと国破家傾，腸は煮えくりかえるようである。しかし待てよ。ここには紫煙がただようている。その名も煙洲。いざ鎌倉いや六ツ川へ子弟の心あるものは取って置きの葉巻を運ぶ。かかる余裕がある。孤影蕭然たりと雖豈心を傷ましむるを要せんや。

昭和22年11月３日
喜寿祝賀宴
回頭八十少三年　往事茫々総似煙
只喜煙洲今日宴　紅顔子弟満堂賢

頭を回らせば八十少三年
往時は茫々として総て煙に似たり
只喜ぶ煙洲今日の宴

紅顔の子弟は堂に満ちて賢なり

八十少三年。80－3＝77。明治4年（1871）生れであるからこの年（1947）は数え年の77歳に当る。正に今年の愚生と同年ということになる。只喜煙洲今日宴。菅君もよいことをしたものである。この年堂に満ちていた紅顔の子弟も大分白頭翁になり皺だらけになったようだ。

失題　昭和23年6月

門巷蕭條隔俗塵　朝耕夕読一間民
余生独楽弘陵子　救国高材待此人

門巷蕭條として俗塵を隔つ
朝に耕し夕に読す一間の民
余生独り楽しむ弘陵の子
救国の高材此の人に待つ

六ツ川の偶居に悠々自適して居られる様子がよく表われている。その間にも念頭を去らないのは弘陵の子である。先生が期待されたような救国の高材を以て自任出来る者はこの中から幾何出たか。各々胸に手を当てて問ふべし。

山寺避暑　（作年月不詳）

筧水潺々樹下聞　蒼苔帯露没荒墳
僧房一枕多涼味　不夢青雲夢白雲

筧水潺々樹下に聞く
蒼苔は露を帯びて荒墳を没す
僧房の一枕涼味多し
青雲を夢みず白雲を夢みる

お寺の庭の涼しい静かな処は先生も好まれたことがわかる。このような御心境は煙洲会の席上であまり伺わなかったところである。僧坊の涼しい所でゆっくり午睡を取られたようである。不夢青雲夢白雲。ここまで来ると禅か老荘か，紅顔の子弟には一寸解し難いところである。

雲をつかむような私の煙洲詩篇鑑賞もあまりボロが出ないうちにこの辺で打ち切ることとしよう。

ところで私は前回の拙稿で「横浜高工」は創作品であると述べた。今回は煙洲先生の横浜高工における教育は道楽―最高級の贅沢な道楽―であったと敢えて申したいと思う。道楽というと，言葉は悪いようであるが全身を打ち込んだライフワークという風に解すればよい。

そのためこの道楽に溶け込めないではみ出した人は或は迷惑を蒙ったかも知れない。具体的にいえば自由啓発や三無主義でない方がよかった人がいたかも知れない。これらの人は寛大に抱容されているよりも他の試験主義の学校へ転じた方がよかったのかも知れない。

然らばお前自身の場合はどうか。辛うじて道楽の一翼を担うことが出来たのではないかと自負している次第である。

〔付記〕

煙洲先生の思想に関して述べようとすれば同志社と徳富蘇峰に触れなければならないが，通り一遍のことは大低の人が知っているが本当のことは誰も知っていないというのが実情のようである。最近応化昭和7年卒の林三郎氏から応化会事務局中山春夫氏を通じて菅要助君の手許に珍しい資料が届けられた。それは鈴木達治先生が同志社に在学当時の同志社の事情および先生の東大入学経緯などに関する興味あるものである。

これらの資料を基礎として同志社および徳富蘇峰と鈴木先生との関係を調査すれば煙洲思想のバックグラウンドとしても一つのまとまった知見が得られるものと期待されるが時間と紙幅の関係から他日を期するほかない。

尚新島襄に関する図書カードを調査した所，国立国会図書館には21冊の蔵書があり，その中には「徳富蘇峰と新島襄先生」という本もあることを知った。　（昭和52年2月24日）

煙洲先生に捧げて
「自動車技術の50年」

いすゞ自動車株式会社取締役会長　荒　牧　寅　雄

1.　自動車技術会創立

昭和22年２月１日，それは自動車技術協会の創立総会が開かれた記念すべき日であり，また初めて耳にしたゼネストなるものが，連合軍最高司令官マッカーサー元帥により停止命令を受けた日でもあった。

創立総会の会場には芝公園日本赤十字本社の講堂が使われた。曇った寒い日であった。東京地方からは，日産・いすゞ自動車の技術者をはじめとして，航空関係の技術者も将来の平和産業としての自動車の役割を期待して多数出席した。関西方面からは，トヨタ自動車を中心として，部品工業に従事している技術者も馳せつけた。発起人の司会により開会が宣せられ，技術会創立の必要と主旨が述べられ，参加者全員の拍手と賛成の中に会長の選任に入った。日産の浅原源七氏かトヨタの豊田喜一郎氏かと予想されていた。選考委員会は当時社長職を辞めておられた東京在住の，そして先輩でもある浅源氏を選出して直ちに総会にかけ，浅原氏は全員賛成の下に初代会長に就任されたのである。なお，豊田氏は昭和25年から第２代になられたが，わずか３年後に逝去されたことは会長はなはだもって残念であった。

会長あいさつにつづいて有志代表として，いすず荒牧が賛成激励演説を行った。誠に真剣に，かつ盛会裡に閉会した。ここに終戦後一年有余にして，自動車技術者は前途に光明を見出すことができたのである。

以来30年を経過して，廃虚の中から今日世界第２の自動車生産国にまでのし上ったわが国の自動車工業にとって，この技術会の功績が如何に大であったかを考えると，まことに感慨無量のものがある。

2.　創始期の自動車技術と保護自動車

日本における自動車技術の台頭は，大正中期から昭和の初めにかけてであり，ダット自動車と実用自動車との合併会社であるダット自動車製造株式会社は，ダット41型乗用車をトラックに改造したり，さらにダット型乗用車をつくり国産自動車技術に挑戦した。

東京瓦斯電気工業株式会社は1,000rpm，30HP，２シリンダ・ワンブロック２組の４シリンダ，マグネット点火，ヘッドランプはアセチレン，スチールキャストクランクケース，けやきでつくったホイルにソリッドタイヤの時代からはじまったが，当時はテーパーベアリングはなくスラストベアリングであり，後車軸の減速装置はウォームかダブルリダクションであった。

東京石川島造船所自動車部は，大正７年欧米の自動車技術を実習して後，乗用車をつくるつもりで，英国ウーズレー社と技術契約をし，主な部品を輸入して組立からはじめ，次第に素材を輸入して加工するようになった。鋳物は，はじめ木型・金型まで輸入した。その後，トラックをつくるにおよび採算上の問題から，ウーズレー１トン半トラックをつくり乗用車の生産を中止した。

いっぽうこれより先，陸軍は軍用自動車の必要性を認め，大正７年５月より軍用自動車補助法を公布施行していた。これによって一朝有事の場合は徴用される保護自動車が生まれ，その補助金によって技術の進歩と生産の維持継続ができた。保護自動車として，ダット型トラック，東京瓦斯電気ＴＧＥ型トラック石川島のウーズレー国産化型トラックが逐次指定され，大正14年頃までには３社の保護自動車が出揃った。以来，軍を中心にして日本の国産技術の本格的な台頭がはじまった。

保護自動車は陸軍試験官立会の下に，必要な性能，路上試験が行われた。市内がコースに使われた時代もあり，江戸見坂(現　ホテルオークラ前)での登坂試験は必要不可欠なものであった。後にコースは千葉県下四街道，酒々井の不斉地，さらには箱根登坂，富士裾野と広がって行った。まさ

に自動車の今昔としておもしろい。

この頃はすでにクランクケースは，スチールキャストの時代から乾燥型キャストアイアン，それも竪ぶきから横ぶき二ツ割となり，昭和10年代にはグリーンサンドモールド量産型と進んで行った。そして，現代のシェルモールドと進歩した。クランク軸は丸棒からの削り出しか，いも鍛造であった。後に精密鍛造になり鋳物に発展したが，ディーゼルクランクは未だに鍛造であり，トッコプロセスによるハードニングになった。

軍用自動車は全部マグネット点火で，コイル式点火に移ったのは商工省標準型式車からで，燃料装置がエアパック式から機械式フィードポンプになったのもその頃であった。トランスミッションギヤがヘリカルになり，シンクロメッシュがつくようになったのは大分後のことで，ファイナルギヤもヘリカルリダクションからクリンゲンベルグ，さらにグリーソンと変って量産技術が確立したのはこれも昭和10年前後のことであった。部品工業も昭和10年代には，輸入は特定部品以外はなかったが，生産機械の特殊なものは全部輸入であった。昭和21年パッカード社でシリンダブロックのブローチ作業をみて一驚したが，当時は先進国に生産や設計技術を学ぶことが第一であった。現在のように渡航もできなかったので，ダイクのハンドブック，ヘッダーのファールツォイグ・ディーゼルモートル，リカルドのハイスピード・インターナルコンバッションエンジン，ドビェの内燃機関および日本の自動車工学などを主として頼りにした。技術雑誌は英オートモビルエンジニア，米オートモティブインダストリー，独ＡＴＺ，仏ラ・ビ・オートモビル，日本の内燃機関誌などがあった。

3. 商工省標準型式車

自動車の需要が増加するにつれ，国産の保護自動車と限られたアメリカからの輸入組立車だけでは間に合わず，会社側も大衆車をつくりたい希望があったので，政府は昭和４年９月国産振興委員会に諮問の結果，自動車製造工学確立委員会が生まれ，１種類の車をつくることにして，四輪自動車の共同設計が行われた。ダット，瓦斯電気，石川島の３社で鉄道省，陸軍，大学からも学識経験者が参加し，各々分担を決めた。鉄道省がフレームと懸架装置，石川島がエンジンを含んでボンネットまわり，瓦斯電気が前後車軸およびホイルブレーキ，ダットがクラッチおよびトランスミッション，プロペラシャフト，ステヤリングなどを受け持った。３社それぞれ，自社技術の全力をあげた。鉄道省は車両はお手の物であったから，フレーム懸架装置ははなはだ進歩的であった。トラックはＴＸ，バスはＢＸとしてホイルベースは長短があった。試作車完成後，大阪まで運行試験が行われ，３社の技術者首脳および斯界の権威が仲良く参加した。

鉄道省では，この標準設計のバスを省営バスとして，困難を乗り切って使うことにした。多治見線をはじめ，三田尻，亀山線などに使われ，昭和８年には三菱ふそうがこれに加わり，一応国産技術によるバスの確立をみた。

陸軍では，この車を陸軍自動車学校の発注でロードクリアランスの高い後軸２軸に置き換えて，不斉地運行に適する車とし，さらに保護自動車になる条件として，ホイールベースを４メートルに延ばして六輪保護自動車ができあがった。運行試験や性能試験には富士の裾野，滝ケ原演習場などが使われ，不斉地試験や登坂能力の試験などが繰り返されて，後にディーゼルエンジン装備のものを加え六輪自動車甲，乙として軍用トラックの主体となった。

かくして，商工省標準型を製造した３社は次々と昭和12年までに合併して，現在のいすゞ自動車となった。

4. 自動車製造事業法による許可会社

昭和８年頃，トヨタ自動車はフォード，シボレーの部品が使えるような車を考えて，最初のモデルとしてシボレーをはじめ各種のモデルの良さを取って，調査・研究から自動車の試作をはじめた。乗用車も考えていたが，商工省その他の意見でまずトラックを出すことを考えた。そして，部品の個々の製作から総合的な組立にいたるまで，協力工場を配して自力でつくることを考え，ボディの製作にはケラーマシン，プレーナーの使い方まで苦心を重ね，今日の基礎をつくった。

日産自動車は昭和８年末に設立され，以前から小型のダットサンをつくっていたが，もっと大きな一般用自動車をつくるべきであるという話が起こり，それには米国から技術と設備を導入した方が良いとの見地から，日本ゼネラルモータースと

の合弁が論議された。その当時，アメリカのゼネラルモータース本社は，日本の軍部は国産車の生産を確立したい気持を強く持っているが，ドイツにおいてはヒットラーがオペルの工場を接収した例もあり，日本における合弁会社も同じ運命をたどるのではないかという懸念と投資に対する不信感とから，合弁会社の設立は見合わせたいという考えであった。そして自動車製造事業法が施行されるにおよび日本産業は日産自動車をして同法の許可会社の申請を出させた。それで日産自動車は提携から一転して，国産自動車をつくることになった。昭和11年には，グラハムページ社から機械設備一式を買い取って，ニッサン80型トラックとして日本最初のキャブオーバを世に出した。

昭和11年7月，自動車製造事業法が施行されて，トヨタと日産は年産3,000台目標の許可会社に指定された。そして昭和16年には，いすゞもまたディーゼル自動車の製造をもって許可会社に加わることになった。

5. ディーゼル自動車技術

トラックが日本において自力でつくれるようになった頃，燃料問題から軽油の使える自動車用高速ディーゼルエンジンの研究に着手した。昭和9年暮，三菱と池貝で試作した4シリンダを軍用トラックに搭載した。東京・盛岡間の運行試験が陸軍自動車学校中心で行われた。インジェクションプランジャーの破損が那須の宿営地で発見された。池貝のものはプランジャーがダブルであった。その他，音が多少高いくらいで異状なく，試運転は成功裡に完了した。以来，自動車用ディーゼルの研究熱は急に高まり，陸軍の要請で三菱，池貝のほか，新潟鉄工，神戸製鋼，いすゞ自動車，川崎車両などが研究をはじめ，その試作品を持ちよって昭和12年から，陸軍自動車学校中心に各種の比較試験が行われた。その結果当時としては性能，音，始動性，燃料の多様性などから予燃焼室式が選定され，遂には昭和15年車両用標準型ディーゼルエンジンとして決定された。陸軍技術本部でも戦車，けん引車用ディーゼルの研究に乗り出した。戦車用は空冷式，けん引車用は水冷式であり，車両と同様の理由で予燃焼室式が考えられ，戦闘用として火に強いことがディーゼル化を促進した。

このディーゼル化の最初は，燃焼室の型式などは各メーカーの自由な選択にまかせて進歩を図ったが，次第にエンジンの種類がふえて部品の補給に困ってきたので，予燃焼室式をもって標準化が行われた。ボア・ストローク120×160の4・6・8・12シリンダが決定され空冷・水冷と分れて生産会社も指定された。そして戦時下の戦車，けん引車に活用されたことはもちろん，遠く同盟国でわがディーゼルエンジンの研究の先生国でもあったドイツにまで輸出の計画があった。しかし，これらのエンジンは第2次世界大戦の終結をもってすべて打ち切られた。車両用ディーゼルエンジンは前述の標準型が四輪車に使われたばかりでなく，六輪車にも使われたのでDA40（6L－95×120，5.1ℓ）として戦後まで残った。また，商工省自動車技術委員会による共同設計の6L－110×150，8,55ℓ エンジンが7トントラック用として昭和17年末に完成した。その運行試験は同年12月大阪まで行われ，軍官民によるディーゼル技術開発の歴史に残る行事となった。

終戦後トラックメーカーは，自動車生産が再開されるや，これらのディーゼルエンジンに独自の研究を加え，予燃焼室式から渦流室式，直接噴射式と進歩を遂げてきた。そして，今日大型トラック，バスは100％ディーゼルエンジンを使用する時代をつくり上げた。

6. 技術商工省自動車技術委員会

昭和14年9月，商工省に自動車製造事業法にもとづく自動車技術委員会が設置された。この委員会は軍官民および学識経験者からなり，当時の自動車技術の最高権威者を集めて自動車の自給体制の確立，品質，性能，生産技術の向上をめざして，本委員会，小委員会，現地会議など24回も開催して昭和16年4月までその活動は継続した。

これには日産，トヨタ，いすゞのトップエンジニアが中心になって，各種の研究を行い，その都度実験，運行試験などを繰り返し数々の実績をあげた。

(1) 乗用車

皇室御用高級乗用車をはじめ，小型乗用車の研究試作をした。

高級乗用車の仕様書決定はいわゆる缶詰会議で行われ，V8かストレート8かが問題になったが，さしあたって手持の6シリンダを改良して代用することにした。トヨタといすゞが試作した。

高級な内部ぎ装やフロントサスペンションバーを使ったのが目新しかった。

小型乗用車は日産自動車が試作し，十和田湖まで運行試験をした。

(2) 簡易型自動車

戦時中の資材不足から省資源を徹底して行った。ヘッドランプも一つ目玉であった。

(3) 代用鋼

ニッケル不足に対応して，クロムおよびモリブデン鋼を中心に各種の代用鋼を開拓した。生産性を考慮したサルファスチール（快削鋼）もこの頃生産ラインに上がった。

(4) 代用燃料自動車

薪自動車，木炭自動車，石炭自動車などが試作研究され，それらの運行試験はまことに苦労の結晶であった。さらに代用燃料としてアルコールエンジンがもっとも熱心に研究実験された。

この頃，陸軍自動車学校関係者が代表幹事で自動車技術協会があり，昭和8年に設立され民間技術者とともに自動車技術を通じ国家に奉仕し，大陸における実用化代燃の研究，標準規格，自動車用語統一に力をつくし，終戦近くまで新橋駅の2階などで，ういろうか寒天のような代用食をたべながら，粘り強く自動車技術の発展に側面から貢献した。

7. 終戦と新技術会の誕生

戦時中には一般トラックとして，日産，トヨタ，いすゞがつくった車は全部軍用に使われ，民間に配給する車はほとんどなく，ごく一部が鉄道省用として使用されるに過ぎなかった。それらの車両技術を応用してつくられたのが戦車，けん引車であり，それまでの自動車技術は陸軍をはじめ官庁の指導と育成によるものであった。好むと好まざるとにかかわらず，そうすることが唯一の技術の温存であり，発展の基であった。国破れて技術ありで，これが戦後復興の大きな力になった。

さて，終戦と同時にこれらの機能は一瞬にして完全にストップである。また，相当範囲の図面なども焼失した。自動車技術の温存のためには有力エンジニアを保護すべきであるなどの意見も出た。しかし，乗用車はまだしも，トラックは日本復興のためにも必要欠くべからざる器材だ，それは必ずや占領軍といえども生産を許すはずだと思った。資材のないその頃，月50台あての配給を得て，既存の設備で四輪トラックをつくりはじめることができた時には，必ずや近く自動車工業の戦後復興の可能性があると信ずることができて愁眉を開いた。

前述の商工省自動車技術委員会および自動車技術協会などの技術団体は終戦とともに解散されたが，自動車を通じてともに協力し合った技術者は残った。それらの既成団体およびその事業を打って一丸とし，こと自動車に関する限り，各方面に互いに手を取り合って技術と真剣に取組む一つの強力な団体，すなわち日本のＳＡＥを急遽結成したいと技術者達は思った。日本における自動車技術者は戦時中自動車を中心にして各種の研究を行ったので，常に顔を合わせ互いに協力して製品の完成のために努力してきた。戦後といえどもその気持は忘れがたく，時折昔の技術者相集って運行試験などをして，従来の技術を落とさず一歩でも前進を心掛けていた。これらの思いが期せずして相集まり，まず技術者の大同団結を考えた。これが新技術会の誕生である。

軍部なきあとの自動車はこれこそ平和産業として，まず日本に残された機械産業の中で最たるものである。これこそ日本の戦後の復興に寄与できる産業であると同志は信じていた。そして，企業の在り方よりもその企業の基本となる技術者が，まず協力して世界の自動車技術に追いつき，これを凌駕するための基礎固めをすることが必須の条件である。戦前の与えられた自動車技術は，戦後は無限の空に向かって自から開拓して行く自由の技術となり，大衆化された技術になった。

8. 創立時代（昭和30年まで）——乗用車技術の再燃と国民車構想

自動車技術会として，岸本ビル2階自動車工業会の一隅を間仕切りして，20平方米足らずの事務所からはじまった。会員数も806名の創立当時から，昭和29年には3,000名を超えるまでになった。この間個人会費のほかに賛助会費，研究委託費，補助金の交付を受けて，自動車の性能向上，特に高速性の向上，工業の標準化および論文集の発行などを行った。

研究委員会が発足して，研究活動の中でもっとも特色ある，各種自動車の性能試験を実施した。

三輪車，スクータ，小型四輪自動車，大型自動車，電気自動車，ディーゼル自動車などを日本の

地形を利用して各方面に運行し，試験委員のほか計測員として大学生を十数名参加させたこともあった。

昭和27年サンフランシスコ条約発効後は各社とも乗用車の生産に新しい時代の感覚と希望とを託して，その技術に挑戦した。トヨタ自動車は，あくまで自力でこれを為し遂げようと，まずクラウンをつくりさらにコロナと進んで行った。日産自動車は，英国オースチン社と技術提携しその製造技術を身につけた。いすゞ自動車も，ルーツ社と提携してヒルマンミンクスをつくって，軍用車一辺倒からのハンディキャップを埋めようとした。日野自動車は，仏ルノー公団と組んで小型乗用車の範ちゅうに足跡を印し，三菱はウィリスオーバーランド社と手を握って，特殊小型トラックを一挙に完成した。

これらの外国技術との提携による技術進歩は，他の国産メーカーの技術者を刺激し発奮させ，同時に乗用車の世界的視野と見聞の拡大に大きく役立ったと思う。特に通産省が昭和30年5月国民車構想を打ち出してからは，われこそフォルクスワーゲンの日本版国民社のメーカーたらんとこれに挑戦した。現在でも1,000 cc前後の各社の車にその片鱗が残っている。

このような経過をたどって10年の研鑽の後には，日本の乗用車が先進国に交って輸出ができるように発展した。昭和29年日比谷で，第1回自動車ショウが開催されたことは，何よりもわが国自動車工業の確立したことの証拠である。

9. 成長時代（昭和43年まで）——FISITA参加および自動車レース

昭和29年12月，溜池の自動車部品会館の2階に移転し，独立して約150平方米の事務所として，会の発展成長時代に入った。

個人会員は昭和30年に3,500名が42年には約8,000名に達した。昭和36年からは毎年確実に約500名の増加を示してきた。会の活動が自動車工業の発展に必要不可欠なものとして貢献したのである。

自動車工業は世界における産業の担い手であり，その支えとなる自動車技術もまた世界的な傾向を示し，仏国パリに本拠を持つFISITAに入会する必要性とその機運を察して，昭和35年に入会した。

以来，技術会の活動は国際的になり，FISITA参加各国の自動車技術者とはFISITA総会を中心に交流を続け，論文の発表から工場見学，討論会などにおいて実際に見，そして聞き固く手を握り合った。

昭和39年5月，時期尚早の感はあったが，参加各国の希望が強く，FISITA第10回国際会議が日本で開催される運びになった。自動車技術会としても画期的な試みであり，官民の協力で大会委員長以下全員総力をあげてその成功に向かって努力した。時あたかも，秋には第18回オリンピックが東京で開催の準備中であり，期せずして東京は春FISITA，秋オリンピックという記念すべき年になった。

FISITAの国際会議場は赤坂プリンスホテル，参加車外国332名，国内428名合計760名であり，発表論文は25編で，英独仏同時通訳の，われわれとしてははじめての豪華なものであった。その他の行事，パーティなども日本流の充分なサービスができた。さらに会場を京都に移して，フィナーレには偶然武者行列の見物もできて，参加外国技術者の方々の拍手を得て終了した。

いっぽう，この期間における研究委員会の活動は補助金のバックアップを得て一段と活発になり，新たに自動車規格作成事業が起こって会の事業の支柱となり，会誌は増ページと内容の充実を見，自動車諸元表が刊行された。自動車工学ハンドブックの完成は昭和32年6月が第1回であったが，昭和37年には改訂版，さらに昭和45年には新版を刊行した。昭和49年には自動車工学便覧を出版した。また，技術会論文集も昭和45年にはじまり昭和50年までに計11冊を数え，その論文数も約130編におよび，まさに自動車技術の進歩と技術会の成長の時代であった。

自動車の高速性，耐久性を判断するとともに，自動車の大衆性をもっとも迅速に獲得するものにオートレースがある。昭和38年にはすでに鈴鹿サーキットレースがはじまり，さらに富士スピードウエイで日本においても世界の技術を集めてグランプリレースが行われるようになり，日本の乗用車はサファリーレースや豪州ラリーなどにも参加して優勝を飾ることもできた。なお，スピードウェイでロータリーエンジンが注目すべき好成績をあげて世界的な宣伝効果をあげた。

10. 安定時代（昭和44年以降）——日本自動車研究所の設立

昭和44年10月に高輪に新築された自動車部品会館7階に移転した。床面積450平方米を超える格段の広さとなった。会員数も昭和46年には待望の10,000名を超し，昭和48年末のオイルショック時までは，平均年600名くらいの増員があったが，その後は鈍化の傾向を示した。自動車工業のかげりか，否，これは一時的な現象であろう。なぜかといえば，昭和40年代に入ると日本の自動車生産台数は，年々，20ないし30%の伸びを示し，昭和43年には400万台を超して以後も引続いて10%の増加を示し，今や800万台を計画し，欧州の先進国を追い抜いて米国に次ぐ世界第2の自動車生産国になっているからである。そして多少の高低はあっても未だ安定した前進を続けている現在，自動車技術会の発展もこれと平行して進行するのは過去の例から見ても明らかである。

昭和44年5月には，新たに発足した㈶日本自動車研究所に当会の研究委員会のすべてを移管した。

そもそも，自動車技術会が不抜の地位をつくりつつあった昭和30年前後に，技術会としては路上運行試験の限界を考えて，何とか試験場を持ちたいと考えた。そして一時，木曽川と長良川の土手を使うことも考えて㈶自動車高速試験所を設立する考えで実地調査をした。しかし，土手を使うことの可否，補償の問題とか島津藩の本堤防での失敗の故事などを考えて取り止めた。その後，不況時代が過ぎて，昭和36年頃から業界をはじめ監督官庁の応援を得て，土浦近郊の谷田部に249万平方米を擁する広大な自動車高速試験場をつくって，昭和39年より運営に入った。これにより高速性能テストは存分に行うことができた。自動車のハイウエイ時代にふさわしい性能を得ることができるようになり，恥しからざる自動車の輸出可能性を付与することができた。今日350万台からの年間輸出計画の陰にはきわめて大きな役割を果したのである。

この自動車高速試験場がさらに年々十数億円の投資を繰り返して各種試験装置を完備し，日本自動車研究に発展した。そしてこの機会に技術会は従来の研究業務を研究所に全面的に移管し，これに協力することによって実質的に一大飛躍をなし遂げ，世界における自動車技術の温床としてのJARIの運営となった。

日本の自動車界は昭和29年以来，毎年11月に自動車ショウを開催して，昨今は晴海の大会場に内外人百数十万の観客を吸収し日本の技術の成果を公開，人間と自動車の調和を図ってきた。

昭和51年5月，再び日本において第16回FISITA総会が開催され，参加者合計753名，うち外国より217名，国内会員536名，参加国21か国，応募論文138件，発表論文80件の多きにおよんだ。会場は新装設備の整ったパシフィックホテルで，日本語を加えて英独仏4か国語の同時通訳という豪華なもので，きわめて盛況裡に終了した。これは東京における第2回目の技術オリンピックである。金メダルの数は増したか，減ったか，それは必ずや今後の自動車工業の実績の中に証明されることであろう。

11. 技術会の将来と希望

かくてわが技術会は創立以来30周年を迎えたのである。日本における自動車技術の創始期はさらにまた30年さかのぼるが，この間に自動車技術に一生を捧げたおびただしい人々の熱烈な努力，それはガソリンエンジンにディーゼルエンジンに，そして小型，大型トラックから最終的には乗用車にいたる各分野にめざしい発展を遂げてきた。しかしまた他面，先進国からの技術的恩恵が，その基礎をなしていることを忘れることができない。昔のウーズレー，グラハムページ，ベンツ，クルップ，マン，さては戦後のオースチン，ヒルマン，ルノー，ウィリスオーバーランドなど，わが国技術にその端緒を付けてもらったことを忘れることはできない。技術の世界は常に進歩の過程にある。慢心は芸の行き止まりとは良くいっている。謙虚に科学技術を身に付けて，新しい自動車技術を生み出さねばならぬ。これからの技術会こそは内にあっては，販売・サービスにあたる会員をさらに数多く糾合し，外に向かっては，世界の人々とその総てを分ち合わねばならない。それがわが技術会の使命である。

このたび，技術会は新しい自動車ハンドブックを作った。そして研究論文集は十数冊を上回るものを刊行している。会誌月刊「自動車技術」は30巻12号まで発行し通巻320冊を数えている，もうむかしのATZもラ・ビ・オートモデルもオート

モビルエンジニアも不要のように見える。それだけに月刊「自動車技術」は世界の人々の憧れの的であろうか。50年まえわれわれが目を輝かして見たATZの内容に実用的に勝るものであろうか。これからは発展途上国も，自動車技術の確立を目指して勉強するであろうから，それらの人々への理解と期待とを忘れてはならない。まず，わが友を喜ばせ富ませることである。もはや自動車技術は一部の限られた技術者だけのものではない。もちろん，深遠なる理論の奥にこそ真理はあるけれども，現代物理学におけるニュートンの運動の法則が常識であるがごとく，平易な自動車技術は永久に大衆のものでなくてはならない。それでこそ，自動車が日常生活必需品として20世紀の最終を飾ろうとしているのである。

日本の自動車技術者諸君，諸君は今や先輩が受けた恩恵を，世界の人々に対してお返ししていただきたい。その気持の中に学の心がある。それこそ今後の日本の自動車技術の発展を意味するに違いないと思う。　（機械大正15年卒）

煙洲先生と化学調味料グルタミン酸ソーダ（略称グル曹）

電化大13　徳　田　徳之丞

化学調味料（グル曹）は明治41年（1908年）帝大の化学教室に於て池田菊苗博士によって発明され，翌42年から鈴木商店によって工業化された吾国独特の化学工業製品であって，現在では味の素，旭味等の商品名で親しまれて居る調味料であります。現在の国内生産料は年8万屯，内輸出が1万屯余で残余は凡ゆる加工食品の調味に或は家庭に於て直接使用されて居ります。最近は複合調味料（ハイミー，フレーブ等）も市販されて居りますが，此等は椎茸，鰹節に含まれるイノシン酸，グアニル酸等の呈味成分が5～10%混合されて居りますが主成分はグル曹です。

このグル曹の発明に池田博士が着手したのは明治39年（1906年）であります。昔から調味料には酸，甘，苦，鹹（塩味），辛の5味の有る事は判って居るが，この外に何か変った「うま味」があるがあれは何か？　と先づ第一に着手されたのが昆布の味でありました。此の研究に当って博士が助手を物色する事になり博士が煙洲先生の理科大学在学中の恩師である関係で推薦したのが当時広島高師の化学教室で煙洲先生の助手をして居った栗原喜賢氏であります。斯様な関係で明治41年グル曹を昆布から抽出し発明が出来た時栗原さんが一番に煙洲先生の処へ持参し試味を願いました。「わしん処へ栗原君が2～3瓦持って来たのでコップの水に入れて味わったがあまりうまいとは思わなかったな」と私に話された事がありました。併しこれはさもあらんと思われます。

グル曹はアシンメトリックカーボンを持つ両性体の有機化合物ですから，1瓩の干昆布を常温で煮詰め不純物を除去して得られる1瓦位のグル曹は高温の為完全にラセミ化して居り味のある右旋性のものに比して難溶である為先生の舌に感ぜられたうま味は20～30%位と推定され当然の結果と思われます。現在の製品は右旋性で99%以上の立派な八面体結晶で技術進歩は隔世の感があります。斯様な次第で先生は恐らく日本で最初にグル曹を試食された方と思って居ります。私は大正13年（1924年）電化二回の卒業生ですが，当時は不景気で先生か役人の就職が漸くあった程度でしたが，栗原さんが広島高師での知合である電化の藤村先生，更に煙洲先生を通じて関東州の大連市に設立されるグル曹製造会社へ行かないかと話がありました。予て自由啓発と海外発展のモットーに憧れて横浜高工に入った私は二つ返事で引受けました。それで出発前先生宅に御挨拶に伺いましたが「君大連の会社は資本金はどれ位かね」と聞かれましたが，私が1桁か2桁間違えて答えたので早速御目玉を頂戴し，「君この不景気な時代にそんな資本金の会社が出来るかね，もっとこれからは社会勉強をせねばいかん」と言われ恐縮しました。其折5，6才の男の児がチョロチョロして居

ったのが，先年物故された博人君かと思われます。尚庭内の立派な東郷神社が先生の人となりと共に強く印象を受けました。同年の五月始め単身神戸から台中丸で内地を離れ三日後にあこがれの満州の大地をふみました。其後昭和10年8月北支の天津に味の素工場（天津工業）が設立される事になり転勤し其建設と操業に従事して終戦を迎える事になりました。其間20余年母校と関連ある大陸生活の思出は数多くありますが，最も印象に残った一つは終戦後にありました。終戦後の間もない九月から天津工業は当時の国民政府の支配下で操業を開始し，私は懇望により留用技術員として技術の指導に当りました。最初の工場長は王さんという年輩の方で，母校と関係の深い蔵前の染織科卒業の快活なよい人柄で敗戦で沈み勝な吾々の気分を大変柔げてくれました。10月に入って国民政府の役人2名がいかめしく工場の接収にやって来ました。種々手続を打合せして居る中，若い方の男が日本語を話し技術も分るので，貴方は日本の学校でも出られたのですかと尋ねると「私は横浜高工の応化を卒業した雷です」との返事に当方は驚きと共に気分は一変して話題は母校の事などに移り和気靄々の裡に接収を終えましたが誠に意外で感銘深い一幕でした。吾々の在学当時の応化に揚，丁君の二名の中国人が居り，階段教室で化学の受講を一処にした記憶がありますが，其後も毎年同様の学生が入学した様で，此等の人々は新興中国の化学工業の発展に或は日中両国間の親善融和に貢献して居るものと思われ，先生の遠大な高見に今更ながら感服して居ります。

末尾ながら栗原喜賢氏は池田博士に協力してグル曹を発明され，其後鈴木商店（現在の味の素株式会社）に於て工業化と化学調味料の研究に一生を捧げた方で，煙洲先生が物故された翌年の昭和37年7月に他界されました。私は大正13年卒業以来化学調味料一筋に精進し，栗原さんは物故される迄其指導に預かった恩人であります。

因に栗原さんの長女喜美子さんは，煙洲先生の令弟である左右田家の御長男武夫さんに嫁しましたが，共に夭折されまして今は其子供さんの代になって居ります。

回　想

応化大15　平　田　義　雄

昭和14年6月，煙洲会の第1回が川崎で開かれたのであるがまさに戦争に突入せんとする超非常の時でありました。

恩師煙洲先生が教え子の事を心配して下さる御心境と，一言でもよいから先生のお言葉が欲しい教え子たちの祈りにも似た願いが天の啓示の如く自然発生的に会合を持たしめたもののようであります。

爾来戦時中は国民として文武不岐の心構え或は戦塵の余閑。戦後の混乱時代には敗戦国民としての日常生活とか天地自然の道。更に復興期に際しては事業所又は会社幹部としての心の持ち方や部下の指導理念と夫々の時に応じての煙洲先生のお話は毎月第4水曜日を原則として開かれる煙洲会で拝聴する事が出来たのであります。煙洲先生は又此の集会を無上の楽しいものの一つとされ数え子たちは在学中には味う事の出来なかった煙洲先生の名教自然の信念に接して回を重ねる毎に自分自身の人間としての深さと幅をひろくする歓びを感じたのであります。

然し人生無情，昭和36年8月29日われ等の煙洲先生は天寿を全うせられたのであります。工学部葬も悲しみの中にも滞りなくすみ次月の例会の席上，菅要助さんの御発言で，煙洲先生の名教自然の精神を吾々の協力で後々まで伝える事が亡き恩師に対するせめてもの御恩がえしであろう，その意味でこの煙洲会を継続し一つには亡き先生への尽きざる供養とし一つにはお互の心の中に煙洲精神を生かし勤務上の或は個人生活のためにしようではないかという事でありました。

御存命中の会合は特別の時を除いては平均十人内外でありましたが，先生と永久にお別れしてからは勿論幹事さんの御努力もありましたが出席者がだんだん増えて現在は平均して毎回35名前後という盛会振りであります。煙洲先生の自由教育，名教自然の精神が如何に教え子たちに滲みこんでいるかがわかろうではありませんか。

現実問題として日本の現在の教育の在り方についていろいろ論議されて居りますが，亡き煙洲先生の名教自然の石碑の由来を説明した方が如何なる議論にも優ると思います。その意味ではわが煙洲会の全会員こそ現代日本の教育改革の推進者であると自負してもよいのではないでしょうか。

煙洲先生なきあと既に15年経過致しました昭和51年12月は第400回の例会であります。この種の会合としては誠にめずらしい事で，煙洲先生の御遺徳の然らしむる所，又名教自然の真髄とでも申しましょうか今後とも永く永くこの煙洲会の続く事を祈って止みません。

△　△　△　△　△　△

この煙洲会につきましてはその出発の時点から，菅要助さんの御熱意には誠に感服の他ございません。歴代の幹事は現在の村松幹事を含めて，菅さんのうしろだてがあってこそ，その任務が遂行出来たのであります。今煙洲会 第400回を記念して，菅さんの代表名の下，4人の幹事に感謝状と記念品をいただきただただ恐縮している次第であります。茲に改めて厚く御礼申上げます。

初代からの各幹事の謝辞

読萬巻書行千里道

電化昭4　西　尾　清　治

煙洲会が六ツ川の先生宅で行われた時集った人々に順次に先生の書が有難度いことに頂けた時がありました。書題も先生が自ら選んで下さったこともあり，又会員の希望の書題も快くうけて下さったこともありました，小生も先生自ら選んで下さった書題もあり，又小生註文の書題もあります。

表記の『読万巻書行二千里道一』ドクマンガンノショセンリノミチヲユクは先生自ら私の為に書いて下さった書である。

私はこれを応接室に掲げ，朝な夕なに之を読み勇気百倍毎日の仕事にいそしんで居ります。表題の意味は直ちに解る様に万巻の書即ち多くの書物を読み，そしてその数を知り，千里の道即ちそれを実際に実行することをすすめたものであります。即ち今日の言葉で言えば国内は勿論のこと，海外にも行って見聞を広めること世界を知ることをすすめたものと思います。

書物を読むこと，即ち理論を知って，千里の道を行く，即ち実行であります。

理論と実際これがこの書の意味であります。私は私なりに之れを解釈しているのでありますが，技術者の場合は有益な技術を書物により知り，更に自分が新しい技術を考案して，之に加え，実際に実験製造して工業化する，即ちこれが技術者の使命であります。この書の意味は非常に広いと思います。

商売を知って之れを実行する，優秀な製品を造って海外に輸出して，日本の技術によって出来た商品を広く世界に売り，世界の人々の幸福と繁栄に貢献する，これがこの書の意味と思います。

更に又健康に注意して，即ち健康上の知識を得て健康上の適当な運動，スポーツ又は乗物等にのみたよらず，歩むこともこの書が教えたものと私なりの解釈ですが信じて居ります。このことは所謂健康管理のことであります。人間は足より老化すると云われます，老化現象は足よりであります。

私は更に読書に関する2，3の古語をしらべて見ました。『読書破二万巻一』ドクショマンガンヲヤブル多くの書物を読みつくす。

『読書不レ求二甚解一』ドクショジンカイヲモトメズ，書物を読むにわからぬ所はしばらく之をおいて強いて其意味を求めぬ。

『読書百遍義自見』ドクショヒャクペンギオノヅカラアラハル百回も同一の書を読めば其文章が自然にわかる様になる。

これら三つの書題は凡て『読万巻書行千里道』に含有せらるることを思い，煙洲先生の広大なる教訓に朝な夕な現在もこの書を仰ぎ教えられて居ります。

○——○——○——○

尚私は401回煙洲会にスピカーとしてヨルダンとシリアの旅行談を致しましたがその節煙洲先生の前記の書を会員の皆様に御覧に入れました光栄を感謝致します。

煙洲先生の遺志アジアに生きる

建築昭3　大山量士こと佐々木武雄

恩師鈴木達治先生と私とは，横浜高工在学時代と卒業後と，夫々，先生と深いつながりを持っているが，その間，先生にご迷惑をかけた方が多いと思う。

何から先に書こうかと思い，先生の著書，『**煙洲漫筆**』を読んだら，私のことが書いてあるので記載してみよう。

その前文に「**建築工学科の新設**」の見出しで次の名文がある。

「……物理や，化学や，数学や，自然科学的のものは，世界人類的のもので国境がない。建築は芸術的で，民族の特色を発揮して初めて世界文化に寄与すべきである。当代文化の誇として後世に残し得る建築は，偉大なる天才，信仰，宗教，祖国愛に依って完成せられ得るであろう。此の理想を以て建築工学科を有する学校は俗悪であってはならない。」（原文のまま）

次の項に「**建築学科のサルコッション騒ぎ**」の見出しで，中村順平教授が建築は芸術なりの信念から，われわれ新入生を芸術家養成の意図のもとに私塾的制度を設け学生を，甲，乙，丙に差別し，丙を「サルコッション」と呼ばせた。サルコッションとは仏語で“穢き豚”を意味するものであった。われわれはこの制度は，煙洲先生の自由教育に反するとして，一争動が起き，煙洲先生宅まで押しかけて先生を困らせたものであった。しかし，そこは煙洲先生である，葉巻をふかしながら悠々として両方の顔を立てて名処置をされ，1人の犠牲者も出さなかった。

「其の頃，既に高工と高商の野球定期戦は毎年初夏の頃，横浜年中行事の呼び物の1つとなり，非常に人気を集めたものであった。従って両校の応援は又，頗る盛大で，応援団長の名は，校内は勿論，市民の野球ファンの内にも能く知られたものであったた。当時の我が校の応援団長は，建築科3年の佐々木武雄君であった。無論，彼はサルコッションの1人で独立派の頭目であった。」

「卒業も迫る第3期の1日，私は佐々木を呼び，君は野球の応援団長として，見事な活動をして，大いに男を上げたことは実に賞讃に値する。然るに君の級は不幸にして1年以来2つに分れて反目し融和を欠いている。このまま卒業し，我が校建築科の第1回出身として社会に雄飛するに心残りがないか。我輩も此点に於て頗る遺憾とする。君が団長として磨き上げた男として，此際旧来の行掛りを一掃して，手を打って融和一団となり，卒業して行く方策を講ずることを我輩が君の男に期待するが，如何であらうかと説いた。処が彼は即座に快諾して，間もなく其れが実現した。今の本町4丁目の若尾ビル7階の料亭で，建築学科の謝恩会が師弟相会して催され，1年生以来のサルコッション問題は目出度解消した。これで私も安心し又大いに愉快になった。」

なお，『煙洲漫筆』には“**大陸会**”のことが書いてある。

海外発展を目標に“大陸会”結成

「横浜高工の使命の1つに海外発展があった。“浪に高工”の徽章はそれを表現している。私は我高工に海外発展を目標とする会を作りたいと思ったが，学生自身の創意から発足したものでなければ我校には適切でないと思いその意識で学生を指導しつつ時機の到来を待った……。」

学生の中に海外事情を研究する為の1つの会を組織する気運が動き出した。応用化学科の比嘉樽吉，斎藤興次（改姓佐藤）（比嘉君は卒業後，後藤新平伯の鞄持ちとなり伯の邸にありしが不幸短命にて逝く）の両君が努力奔走しやがて海外発展の為の会の成立を見る様になった。私は“大陸会”と命名した。会長に後藤新平伯を押立てんとしたが，会長には当然お前がなるべきであると勧誘をうけた。然らば私は会長になりますが，閣下が是非，会員になって頂きたい，と申出た処，伯は結構であると，大陸会のイの一番の会員になら

れた。

私は煙洲先生の趣旨に共鳴して大陸会の最初の会員となった。

高工対高商の野球定期戦で勝利の乾杯

昭和2年7月1日，山下公園における高工対高商の第3回野球定期戦に応援団長として奮闘し，1対0で高工が勝利をおさめ母校の講堂で大々的な祝賀会を開き，市民のファンも大勢参加した。煙洲先生は飲めないビールで乾杯された。当時の野球部長は池内本先生，我が投手宇田典夫君，捕手は清水孫太郎君の名コンビ，応援団の副団長には前川軍治君（電化），岩崎郁夫君（機械）であった。高商の投手は丸橋仁君，捕手は中島博次君で，応援団長は緒方保孝君，副団長は石川利夫君（改吉田），秋定鶴造君（故人）であった。

定期戦が終わって夏休みに入る前，私と応化3年の井口俊夫君が大陸会より海外派遣を命ぜられた。勿論，飛行機などのない時代なので大阪商船の好意により「アフリカ丸」で1か月半，アメリカとカナダに船の旅をした。

当時私は講演部の委員長であったので，アメリカの3P政策や排日移民法の研究を兼ね，シアトルで，ワシントン大学を訪ねた。カナダのバンクーバーではBCコロンビア大学の建築科を訪ね，ちょうど夏期講習会があったので，横浜高工建築科の作品を提供した。これに対して彼等も自作のエスキスを数枚贈与されその成果は大きかった。8月末，帰国し，その後，講演部長であった藤村利常先生の肝入りで，母校の講堂で一般市民も入場させて，われわれの“アメリカ，カナダ帰国報告会”を催し満員の盛況であった。

横浜高工講演部主催で ”関東学生弁論大会“ 開く

煙洲先生はわが講演部の活動にも興味をもたれ，私は先生宅に参上しては激励をうけた。

当時，東京の大学専門学校の弁論部と横浜の高工，高商の弁論部とが東京で“関東学生雄弁連盟”を結成した。同11月に横浜高工講演部主催による“関東学生弁論大会”を母校の講堂で開催して気焔をあげた。

この関東学生雄弁連盟の同志は今なお，連繋を保ち，戦後「十五日会」として今日に及んでいる。この「十五日会」は政治的には超党派，またイデオロギーを超越し，学生時代の憂国愛国の情熱を，戦後日本の発展と福祉のために奉仕せんとするもので，毎年会合を開いて共に励まし合っている。

15日会の主なメンバーと出身校

明治大学＝三木武夫（前首相）・早稲田大学＝吉沢磯次郎，鍋島茂雄，林利夫・中央大学＝伊藤五郎（代議士），堂野達也（前日本弁護士会長），大久保伝蔵（元山形市長）・立教大学＝棚橋重平・専修大学＝大迫定雄，松井政吉・法政大学＝三鬼陽之助，菅順之助・日本大学＝渡辺惣蔵（前代議士），日野吉夫（前代議士）・日本医大＝八田真義（前代議士）・東洋大学＝佐藤四郎・東京大学＝水谷重雄・東京農大＝斎藤豊次郎・慶応大学＝後藤富男・東北大学＝坂巻孝策・大正大学＝松田蜜玄・横浜高商＝秋定鶴造（故人，毎日新聞社論説委員），横浜高工＝佐々木武雄（ペンネーム大山量士）

煙洲先生に教えをこうて 無産運動に参加

私は昭和3年卒業の時，藤村教授の懇望で某建築会社に就職が決まり，卒業生の中で最高の給料まで決定していた。その頃，私は安部磯男や片山哲，赤松克麿等の思想に共鳴し，社会民衆党に入党していた。いわゆる無産運動であった。私は煩悶して，煙洲先生に相談に行き教えを乞うた。先生は「わしの方針は建築を出たから一生建築をやらなければならないということは考えてない。国家社会のためになるなら何をやってもよい。お前が政治運動に挺身したいならやるがよかろう。とにかく君は日本の皇室の尊厳を忘れないでもらいたい」と，私の決意に賛同され激励された。

私は文才がないので文筆活動より，行動力による運動に重点をおいた。日本国家国民の為の闘争を，大衆を動員し，私はその先頭に立って挺身指揮をとった。横浜では，中小商工業者救済闘争で横浜市役所にデモをかけ，ついに市議会は混乱し議事を中止させたことがある。

ドル買財閥膺懲運動では，社民党の青年部約1,000名を動員し，三井銀行本店を襲撃した。また“陛下の赤子は飢えたり”のスローガンで，国会や首相官邸にデモをかける等々，都下の新聞やラジオに報道され，そのつど，警察のブタ箱にご

厄介になり，若き闘士としてもてはやされ，得意になっていたことがある。

この頃，陸軍の少壮将校間に革新派が抬頭し，五・一五事件が勃発し，民間では，神兵隊事件や護国団事件等々，血生臭い事件が続発した。

私も若かったので刺激され，社会民衆党では生ぬるいとして分裂し，国家社会党の結成に参加し，更に同党を愛国政治同盟と改称して，私はその青年部を担当，維新青年隊長をつとめた。小池四郎氏（故人），今村等氏（元民社党代議士）らと愛国革新運動を展開し，その頃，大川周明博士や石原莞爾将軍，前田虎雄（以上故人）、永井了吉先生ら右翼の指導者と交流した。

二・二六事件当事，私は満州に在り，私の青年隊員は反乱軍に食糧の補給をやった。

革新の国難打開講演会に煙洲先生来場

煙洲先生はその頃，農本主義者の権藤成郷先生と親交があった。また文豪徳富蘇峰先生と京都時代からの親友であったので，日本の一大非常時に対処する心構えを先生は準備されていた。先生の六ツ川の庭内には東郷神社を建立され，朝晩お参りされていた。私も先生宅を訪問の時は必ず参拝した。

時期は忘れたが，私は陸軍の革新派の有名な満井佐吉中佐を母校に招へいして“国難打開講演会”を主催したいと先生に申し込んだら快諾された。そして講堂で一般市民にも公開して講演会を開催した。その頃は憲兵隊も警察特高隊も満井中佐の行動を厳重に監視していた時であったので，彼等はみな愕然としていた。しかも当日，煙洲先生がその会場に姿を見せたので出席した聴衆もまた，みなびっくり。先生の肝の太さには驚いた。

日支事変で旭川の工兵連隊に入隊

昭和12年7月9日，日支事変が始まった時，私に召集令状が来た。その頃，出征兵士の歓送迎は町内をあげて盛大であった。私は中区松影町2丁目の自宅から桜木町駅まで徒歩で多数の町内会の人々に送られた。桜木町駅には，煙洲先生を初め，富山校長先生や旧知の先輩，学友，同志たちの見送りをうけ，万歳の歓呼の声に送られて，原隊の北海道旭川に向かった。写真にある軍服は私は当時，貧乏していて新しい軍服が買えないので，東京九段下の古着屋で，元陸軍少将の古軍服を買って来た。ご覧のように大きすぎて，みな笑った。

私は旭川の陸軍工兵第7大隊に入隊直後，北支に派遣され，少隊長の任務についた。

1年余りで中支に転じ，長江を中心に武昌，漢江方面の作戦に活躍し，同15年暮，旭川の原隊に帰還し，召集解除となり，同16年1月，桜木町駅に到着した。駅前には“陸軍工兵中尉佐々木武雄帰還万歳”の大きな幟旗が立てられ大勢の出迎えをうけた。駅前広場には横浜高工の池内本先生を始め，神奈川県政界の大物，岡崎　憲，陶山篤太郎，森栄一の諸先生（みな故人），同窓の牧野衛，西牧肇の両君，同志の堀万吉，菊地庄五郎の両君らの他，特に嬉しかったのは，大仏次郎先生（故人）がお見えになったことであった。町内会や親戚，家族，100有余名の方々の万歳をうけた。

時局下，”必勝懇談会“で大活躍

帰還後，政治活動が制限されていたので，同志と図って“神奈川県民翼賛運動連盟”を組織し，戦意昂揚の運動を続けた。

昭和16年9月26日，2度目の召集があって，秘密裏に旭川の工兵隊に入隊した。原隊で私は“北千島要塞工兵隊長”を命ぜられ“佐々木部隊”と命名され海路，北千島の幌筵島に送られ任務についた。この島で，12月8日，日本が米英に宣戦を布告したことを知った。ここで大尉に昇進し約1年で，札幌の北部軍司令部付を命ぜられた後，召集解除となった，

昭和17年暮，私は静かに横浜に帰って来たが，一切の政治活動が禁止されていて，前の翼賛運動連盟も解散されていた。ここにおいて私は煙洲先生に相談した。その結果，日本は必勝を期するという意味で“必勝懇談会”を結成した。これは，時局柄，何人と雖も，文句をつけることも出来ない名称であった。

横浜海岸の大親分である藤木幸太郎氏，義弟である佐藤軍治（故人），と伊藤清蔵（故人）の協力で，海岸の大人物，酒井信太郎，原田辰蔵（共に故人）と藤木氏らの援助をうけて，本町4丁目の若尾ビル2階に立派な事務所を設けた。

事務所には横浜高工の卒業生や学生が毎日つめかけ，壁には，藤沢の佐々木如空先生の名筆による“物心奉還”の横幕がはられて，意気大いに揚った。

〔写真〕 昭和12年7月・第1回応召時，桜木町駅前にて。煙洲先生は第1回横浜市文化賞授賞。堀万吉君は昭和51年11月，第25回横浜市文化賞授賞された。

堀　万吉君（同志）
西牧　肇君（建六）
牧野　衛君（建一）
菊地庄五郎君（同志）
村上　泰助先輩（機一・故）
冨山　保校長（先生・故）
堀ロキヨ子（少尉の妹・故）
佐々木工兵少尉
佐々木の母（故）
鈴木　達治先生（故）
池内　本先生（故）
大木教官

昭和18年5月30日，アッツ島のわが山崎部隊が米軍の猛攻をうけ遂に玉砕したとの悲報が伝わった。この部隊には，かつて，佐々木部隊に居った将兵（部隊約半数）が工兵隊として山崎部隊に配属されていた。

私は旧部下の悲壮なる戦死に対し，その霊を慰め，冥福を祈ると共に，犬死にさせてはならないと，“山崎部隊に続かん”と必勝懇談会は大活躍を展開した。

私が北方作戦から帰って来たことを新聞のニュースで知って，各方面から講演をたのまれ，毎日，多い時は三回も演壇に立たされ，佐々木大尉の戦意昂揚の講演会は超満員の盛況であった。煙洲先生も私を激励され，先生自らも応援弁士として演壇に立たれたことがあった。

煙洲先生のご息女と結婚，横浜の警備隊長となる

昭和19年4月7日，煙洲先生の要望を入れて先生の養女きみえさんと結婚し，ニューグランドホテルで披露の宴が，ささやかに行なわれた。結婚後間もなく7月1日，3度目の応召があって豊橋の航空基地設定司令部に入隊した。ここで本土決戦に備えて，秘密飛行場の設定の教育をうけ，台湾に派遣され，翌20年1月帰還してから，愛知県犬山市の教育隊の中隊長を命ぜられた。小学校が中隊本部で，将兵を教育しては南方基地に送るのが任務であった。

昭和19年・神奈川会館において煙洲先生と共に．戦意昂揚を叫ぶ壇上の佐々木大尉

日本軍のガダルカナル島撤退から戦争は負けいくさになった。

米軍はいよいよ本土大空襲を開始した。陸軍は本土決戦に備えて作戦をねった。

昭和20年7月1日，佐々木大尉は東京警備軍第3旅団横浜隊の隊長を命ぜられ，鶴見の総持寺裏，第二京浜国道わきの本部に赴任した。横浜隊の任務は，相模湾の米軍上陸に備え，ゲリラ戦を敢行することになった。

軍は一工兵大尉をなぜゲリラ部隊の隊長にしたかが疑問であったが，「佐々木は右翼に関連があり，沖仲仕労働者等多数の同志の糾合と作戦が出来る」と判断したからだと思う。

日本の終戦と「日本のいちばん長い日」

いよいよ敗戦である。8月14日，政府はポツダム宣言を受諾することを連合国に回答し，15日正午を期し，終戦の詔勅を，ラジオで玉音録音放送が行なわれることになった。一般国民は何も知らなかったが，情報はすでに軍の内部にもれていた。陸軍省，参謀本部の中堅将校は近衛師団の一部参謀と相謀り，近衛師団を中心としたクーデターを起こし，以て聖旨を翻さんとした。

また一部将校は玉音放送の録音盤を奪取し放送を不可能にしようと謀った。14日から15日にかけての事件であった。

政府はポツダム宣言に対して，(1)国体護持の立場から天皇の身分を保証すること。(2)我が国の固有の領土は確保すること，の最小限度の要求を連合国にしたが，何らの回答のないまま聖断が下り，ポツダム宣言を受諾することに決定した。

私は陸軍上層部や外務省情報局関係より情報をキャッチしていたので，鈴木内閣はイタリアの「パトリオ政権」であると断じ，国体護持のため立上がらなければ軍人として，また，愛国者としての佐々木の面目がないと決心し，海岸の伊藤清蔵（故人），東方会の山口倉吉君，菊地庄五郎君，高工学生の小島菊代君らに相談し，決起部隊を軍民一体の“国民神風隊”と命名した。

攻撃目標は首相官邸の首相並びに大臣の抹殺によって，鈴木内閣を打倒し，阿南陸軍大将内閣の実現を図り，撤底抗戦によって前記の2項目を連合軍に約束させて終戦に至るという方針であっ

た。

15日未明，暗やみの中を乗用車１台，トラック１台に便乗した“国民神風隊”は佐々木大尉指揮の下，軽機班，必勝懇談会班約40名が，午前４時，永田町の首相官邸に到着し官邸を表門と裏門から機関銃を発砲し，また抜刀班，ピストル班もこれに続いて襲撃を敢行し一時官邸を占領した。官邸には閣僚不在のため鈴木貫太郎総理の私邸と枢密院議長平沼騏一郎邸を襲い焼打ちした。

この事件は，大宅壮一著の「日本のいちばん長い日」に出版され，佐々木大尉の活動が記録されている。また東宝映画では巨額の費用をかけ，日本全国に大々的宣伝をして，大宅壮一著を，田中友幸総指揮監督で映画化したのは有名である。

この事件は後日，新聞や雑誌に掲載された。特に，元毎日新聞社政治部長だった新名丈夫著の「昭和史追跡」に明細に書かれているので，事件の内容はこの程度にして省略したい。

この決起の前日，私は横浜高工の正面入口の所で，学生や町の人に向かって，ポツダム宣言受諾反対の演説をぶっていたら，煙洲先生が来られて，「佐々木よ，血気にはやるな」と忠告されたが，私はカッカッとなっている時で，聞き流した。

その直後，上大岡に居た，仲人役をして貰った平塚淳一氏（故人）宅に行って，かねて用意した，きみえさんとの離縁状を手渡した。きみえさんには何の怨みがあったわけではない。佐倉宗五郎の故知にならって「罪三族におよぶ」のを恐れ，煙洲先生に迷惑をかけてはならないとの師弟，親子，夫婦の愛情の発露からであった。

その頃，私は死を覚悟していた。

私の母と妹（電化卒，堀口柳二の妻）（両人とも故人）が，先生に申し訳ないとして離婚の手続きをしてしまった。

私や伊藤清蔵は捕らず，学生神風隊員の内７名が警視庁に自首した形で佐々木大尉不在のまま裁判にかけられ，一審で「国政変乱殺人予備戦時放火罪」の罪名で10年の刑を言渡された。あの頃は無期懲役の共産党員など解放された時で，神風隊員もそのままにしておけば恩赦で放免されることになっていたが，煙洲先生が学生が可哀そうだとして控訴したため，その特赦の時期を失し，二審で懲役５年に減刑され，千葉の刑務所に服役した。その後，成績優秀であるとの理由で全員１年半で解放された。

服役したのは，副隊長の山口倉吉君（東方会），福田重助君（伊藤清蔵の部下），横浜高工学生＝川島五郎君，上田雅紹（改大江）君，尾崎喜男君，石井孝一君，村中諭君。川島五郎君は服役中惜しくも病死された。大江雅紹君は大阪で大江薬局を開業していたが，昭和49年病死せられた。両者の死を惜しみご冥福を祈って止まないものがあります。

抜刀切込班の伊藤清蔵は病死されたが，その娘節子さんは横浜出身の政治家，小此木彦三郎代議士の奥様で，賢夫人の名が高い。

新日本再建のため大山量士と改名

徳富蘇峰翁は煙洲先生に「貴校の学生達の行為は賞讃に値する。しかし佐々木大尉の行動は遺憾である」との書簡を送られた。翁の眼識は鋭く，その通りである。

当時私は，幾度か自首を決意したが，平沢和重氏（故人，元ニューヨーク総領事，外務省情報官，ＮＨＫ論説委員）らに「君は歴史的人物なのだから軽々しく自首したり，また自決などしないで新日本再建のために働いてもらいたい」と説得され，決意を翻した。

以後，私は８月15日に死んだつもりで，佐々木武雄の名を捨て，神奈川県の大山（阿夫利神社）にちなんで大山量士（かずひと）と名乗って，地下に潜行し，同志を求めて日本再建運動，特に日本民族の世界的使命観の樹立とその実現に向かって精進した。

ＧＨＱのコルトン中佐と及川源七中将のこと

地下にあった時の面白いエピソードがある。マッカーサー元帥は，佐々木大尉らの潜在戦力が何をやるか解らないとして，米国特務機関のＣＩＣを駆使して私の身辺を洗い，私の旧部下や関係者十数名を岐阜警察署に留置した。伊藤清蔵を始め，犬山の見習士官だった真野稔君（現弁護士），菊地庄五郎君らであった。

ＣＩＣは，佐々木大尉を出さなければ諸君らは帰宅させない。佐々木の親，兄弟も留置する，とおどかした。

当時，米国の占領中であって，食糧不足の折というのに，留置者は米軍の給与であったので，毎

日美味いものが支給され，入れられている方がよかったと，釈放されてからいっていた。

私は義弟の堀口宅に居候していたが，岐阜から連絡に出された菊地庄五郎君が来て，私に地下潜行を徹底するよう強調され，これを実行した。ＣＩＣもくたびれたか，１か月後全員を釈放した。

私は東京で連絡事務所がないので，親友の牧野衛君に頼んで彼の工事事務所に置いてもらった。それは事もあろうに，マッカーサー司令部のＧＨＱの建物の地下の現場事務所であった。当時，ＧＨＱの改修工事を竹中工務店が請負い，牧野君はその現場主任であった。牧野君は私と同期の建築１期生で学生時代から親交が深かった。小柄だが大胆な人で，私が，事件発生当時，横浜海岸の藤木幸太郎氏のバラックで藤木氏と面談をしている時，横浜の憲兵が若尾ビルの私の事務所を手入れしているとの情報が入ったので，私は自転車で大船まで走り，竹中工務店の工事現場主任だった牧野君に会い，現金２千円を借りて（貰っても同様）愛知県犬山の旧部隊（航空基地設定司令部教育隊）に逃げこんだことがあった。親友は実に有難いものである。

ＧＨＱの地下事務所で，牧野君の友人，加藤牧師の紹介で，マッカーサー司令部の私服情報官コルトン中佐と知り合った。

或る日，私はコルトン中佐に「延安に居る毛沢東は必ず南下する」と話した。その当時は蔣介石が中国全土を支配していたので，共産軍の進出は到底，考えられないことであった。

コルトン中佐はその理由を私に問い返した。私は，蔣介石の中国が安定するまで，岡村大将指揮下の日本軍を中国に駐屯させることを懇請した。米国のマーシャル元帥は日本軍の引揚げを強行した。

蔣介石と毛沢東の戦力の差は日本軍の兵力の差であったと，私の尊敬する及川源七陸軍中将は言及されたことがあった。

コルトン中佐はこのことをＧＨＱに報告した。及川中将，酒井少将はＧＨＱに呼ばれて事情を聴取されたが，結果的には米軍には第六感がなかったことになる。

やがて，毛沢東の共産軍が中国大陸を制覇し，蔣介石軍が台湾に移駐した時，コルトン中佐と銀座の路上で偶然出逢った。彼は「貴殿のいう通りに中国はなりましたね」と笑いながら私に頭を下げた。

アジア民族の平和的団結のため「亜細亜友之会」を結成

私は，昭和26年２月23日，新橋の蔵前工業会館で，中国，韓国，日本の同志20名で「亜細亜友之会」を結成した。

戦後アジアの大きな問題は，アジア諸民族国家の自主独立の完遂，自由と平和の確保，更に貧困と文盲からの脱却，即ち経済復興である。これをわれわれは忍耐強く，永年の月日をかけ，いわゆる“アジア運命共同体の樹立”を図るべく精進した。この運動は政治や，イデオロギーを超越し，各民族の信仰する宗教は互いに尊敬し合い，寛容と博愛と調和，無我と奉仕の東洋精神を基調にしたもので，“アジアは一なり”のスローガンで，広く内外に働きかけている。

今年の２月23日で創立26周年を迎えた。当日は，奇しくも「皇孫浩宮殿下のご誕生日」に一致し，非常にお目出たい日である。

この間，竹内強一郎先生が煙洲先生宅を度々訪問され，佐々木を赦してやってもらいたいと懇請された。そのかいがあって，煙洲先生が91歳の長命で世を去られる前，竹内先生に「佐々木を赦す」といわれた。

煙洲先生の腹は以前から決まっていたと思う。私のやっていることを知っておられたのだ。義父であった煙洲先生時代，先生は本牧元町の海岸にあった私の家に，博人君（故人）や安佐子さん（永田行夫氏夫人）を連れられ，度々遊びに来られたことがあり，今なお彷彿たるものがある。

私は戦後16年間，独身で波瀾に富んだ生活をしたが，昭和36年３月30日，私に同情した別井波満子と結婚した。彼女は薬剤師で，森永製菓Ｋ．Ｋ．の研究所に勤務していた。そこの所長は横浜高工応化出身の伊藤英雄氏（現，㈱日缶取締役）で，また上司には横工機械出身の松崎保氏（現，専務取締役）が居られた。松崎氏は亜細亜友之会の参与となり協力されている。

いまでも生きている煙洲先生の教訓

私は敗戦で占領ボケした日本人の啓蒙に，煙洲先生の教訓を如何に役立たせるかを常に考えた。

その１つとして，独立間もない祖国復興精神に燃えて日本に留学して来た新興アジア各国の留学

生青年と，次の新日本を背負うべき日本の学生青年との交流を計ることを考え，“アジアは一なり”のスローガンの下に，私が自ら陣頭指揮し，昭和32年夏，留学生と日本学生で遊説班を組織し，「アジア親善全国遊説」と銘打ち，亜細亜友之会主催により，日本の南から北に，九州から北海道まで，45日間にわたる親善遊説の旅を強行した。長期間，日夜寝食を共にし，苦楽を分ち合う生活をするため，お互いの間に，親子兄弟のような親密感が生じ，言葉や習慣の違いも気にならず，一生を通じてのつきあいが生れるのであった。

それ以来，毎年夏休みを利用してこれを実行し，昨年51年夏までで20回になった。

この間，東京都や外務省，各地方自治体の後援を得，また，国際友好団体等の協力の下，日本各地の市町村を歴訪し，年毎にその実績は広まり大いに成果をあげることが出来た。

アジア親善全国遊説の累計

自昭和32年，至昭和51年

◇訪問せる市町村……延339市町村
◇参加せる総人員……1,229名
◇参加学生国籍数……41ケ国
◇遊説の日数合計……506日
◇親善の集会数……484回
◇見学した所……695ケ所
◇来会者の総数……109,380名
◇民泊のご家庭……517家庭

以上は日本国内であるが，海外遊説では，インド，パキスタン，フィリピン，タイ，マレーシア，シンガポール，韓国にそれぞれ本会青年部の日本学生を派遣し，友好親善に多大の成果をあげた。この遊説のほか，毎年暮，「アジア親善大会」を開催し，来賓には在日アジア各国大使や知名人を招待し，会員との親睦と友好を図っている。また，留学生や研修生のため，奨学資金支給の制度をつくり，いささか愛情のこもった友之会にしている。本会は昭和37年に財団法人にしたが，煙洲流に規則にとらわれない温かい家族的な団体に育成し「愛と真（まこと），無我と奉仕」をモットーとして，終始一貫，精励努力している。

煙洲先生の遺訓を生かして計画

私は先生の“名教自然”による三無主義を横浜の地に残したいと考え，煙洲会の同志先輩の賛同を得て次の計画を立てその実現に精進している。

(A) アジア教育文化センターの建設

横浜市西区浅間台の国有地2,600坪の払下げをうけ，「アジア教育文化センター」を建設し，アジア，アフリカ，アラブ留学生，研修生の施設とする。また，これを神奈川県民の国際交流センターとして活用する。建設資金約25億円は寄付行為による。

(B) 亜細亜工業短期大学の建設

弘明寺の母校が保土ケ谷の横浜国大に移転した場合（昭和55年），これを大蔵省から払下げをうけ，「亜細亜工業短期大学」を建設する。

この短大は，昼間はアジア，アフリカ，アラブ各国の留学生，夜間は日本学生の工業教育を行う。この短大のねらいは，日本の企業が海外において，ジョイントベンチャー（合弁企業）をしている場合，その子弟を日本に留学させ，1つは知識の習得，1つは企業に愛情を表現させ，国民外交の一端を担わせ。この学費は日本政府と企業側の負担とする。なお建設費も寄付行為による。

この案は煙洲会の菅要助，荒牧寅雄両先輩を始め，多数の方々の賛同を得ているので，是非実現させたい。

「名教自然」の碑石の下，煙洲先生の“三無主義，自由教育”を我々弟子が永久に残したい。

最後に，煙洲鈴木達治先生より私に贈られた詩文を披露して締めくくることにする。

胆　如　斗　　応援団長の時（昭・3）
千里の志　　大陸会より米・加に派遣時
送　佐々木武雄君応召（昭・19・6・27）

報国丹心答聖明　渾身智略屠長鯨
餞君征旅数行字　総此平生肝血盟
気骨万古　　煙洲
鴻鵠雄飛本我分　紛々俗学又何言
前庭直面看碑石　名教唯慙燕雀群

〔註〕　終戦時，佐々木大尉の国民神風隊に参加した横浜高工の学生や私に対して，高工内で非難の声があがった。これに対して煙洲先生は此の詩文をつくり，これらの連中の愛国心，忠誠心のないことを戒められた。先生の気骨，面目躍如たるものがあることを付言します。

煙洲先生の思い出

応化昭5　秦　　克　夫

私は男ばかり5人兄弟の4番目で島根県出雲市上塩冶町に生れました。長兄清一は東京高工を卒業しました。この長兄は鈴木達治先生に無機化学を習いました。次兄定一は中学校卒業と同時に悪性の流行性感冒に侵され約3年間病床に居ましたが良くなって受験したいと云いました。長兄が「受験するなら横浜高工を受験せよ，鈴木達治先生が校長をして居られる人間味のある良い先生だ，講義も大変良かった，無機化学を教えて貰ったが此処が肝賢だと云れた処にアンダーラインを引き，それを読んで置けば試験は満点だ，先生は自由教育を標榜して居られるからこの学校に入学すれば愉快な学生生活が送れるよ」と云いました。次兄定一は話の通り横浜高工の電気化学科に入学し鈴木達治先生の教えを受けました。然し不幸にして大正12年の関東大震災に遭遇しバラック住いの為か風邪をこじらせ遂に在学中に死去しました。これに続いて私とで兄弟3人が鈴木達治先生にお世話になりました。

学校は入口の門柱に小さく横浜高等工業学校と記載されてありますのみで守衛所は無く入ると花壇があり近所の子供連れの奥さんが遊びに来ている，何所かの公園の入口の様でした。これに続いて大きいグランドがあります。その奥の方に相当古びた平屋建ての大きいバラックがあります。これが我々の校舎です。

私は英和女学校の崖下にありました第1寮に入寮しました，他の学校の様に厳めしい舎監とか寮長は居なく，各部屋持回りで寮長になっていました，また献立も1週間づつ各部屋持廻りに作るため大変なご馳走ばかりで特に食欲旺盛な時代ではありこの上もなく嬉しかったのです。日曜日ともなれば背広を着て出る者もあれば制服制帽又はカーキ色の教練服など着て出る者もあります。残る者は1年生が僅かです，私は田舎者で外人が珍しかったので時々山の手の外人住宅街に散歩に行きました。帰り道は外人墓地に立ち寄り伊勢崎町へと下ったものです。寮生活は気楽で楽しかったのです。

夏が近くなると教室内ではぽつぽつ居眠りする頃となります。窓外は深緑のクローバー色であります。物理の池内先生は「こんな良い天気に家の中に居るのはもったいない，屋外講義としよう」先生が先になって窓越しに出て，みんなも大喜びで窓越しに飛び出してクローバの上で講義を聞いた。またある冬ストーブのある時テストが行なわれました。先生は何回となく答案に書いている処を見て廻って居られました。答案を集めると同時にストーブの中に入れて焼かれたのです，これは大変印象的で愉快でした。化学実験で水溶液の蒸発乾涸の場合の様に長時間かかる作業のときは隣の真面目一方の原田君に頼んで他の友人と一緒に岡村天神にお参りに行ったりしました，かように楽しい学生生活でした。これ等のためか学校は学問の基礎を教える処で実用上の学問は実社会に出てから行うべきであると考えさせられました，これがあとで非常に良かったと思いました，これ等が煙洲先生の主義の賜と私は感謝しています。

煙洲会は戦争の後半頃には横浜銀行集会所で行なわれましたが燈火管制下で特に薄暗い処で先生のご講話を聞きました。先生は常に元気で戦勝を夢見乍らお話をされました。終戦後は先生にはご老齢であります故，六ツ川の高台の御宅で行われていましたが，出席者は15人前後でした。最近はほとんど30人以上で2倍以上になっています，先生の遺徳にあやかって煙洲会がますます隆盛になりつつあります。

煙洲先生には，六ツ川の御宅の横で畑約2段歩（2,000m²）の広い地面を耕されていました，私は昭和電工川崎工場の創業以来アンモニア合成装置を担当していました，当時硫安（硫酸アンモニウム肥料）は統制品でしたが倉庫の掃きよせ硫安は枠外でしたので時々図面袋に入れて先生にお贈りしました処，その都度大変お喜びになって恐縮

しました。終戦後に六ツ川の御宅にお伺いしましたある日，先生の御話では「米国より硝安（爆薬の原料）を日本に窒素肥料として大量に放出されたが，潮解性が大きいので長期貯蔵が困難なので安い暗み値で出廻っている，硝安は窒素分が硫安に比較して1.65倍もあるにもかかわらず，暗値は半分以下である，しかも硫安は品不足で殆どない硫安を貫って大変結構だ」と大変お喜びでした。

また先生はある時「君の造っている硫安製造工場を我が国に作ろうと思ってドイツに行った，ハーバー（アンモニア合成法の発明者）氏が大正2年（1913）に大講堂において小型のアンモニア合成装置を据付け説明しながら運転しアンモニアガスの臭いを出して拍手喝采をした。日本においてアンモニア合成工場を作ろうと考えていたが，翌大正3年日独戦争が起ったためあきらめた。君がアンモニウム合成工業をやっているので大変嬉しい」と思い出深いお話を聞きました。

煙洲先生には大正末期から昭和にかけて軍国主義盛んな時，特に官立学校において自由主義で運営されましたことは，その勇断と決断に感謝の念に耐えません。お陰さまで私達は愉快で楽しい学園生活を過し社会に悠々と出発することが出来ました。

遺　芳　は　永　く

造船昭7　吉　岡　　勲

大分市のはずれにある私立の工業大学に私はいま勤めている。月に1，2回横浜から通っているので教授会には今までの2年間に2回しか出席していない。その2回目の時の議題に，車で暴走して事故を起した学生の処分問題があった。学生部長の状況説明があって，予め厚生委員会で議せられていた処分案が披露された。それに対して意見を述べる者が誰もないまま原案通り決定されようとしている。この大学の学生が起す交通事故は県警から何回も警告を受けた程の状態に既になっているのだそうである。私は原案をひっくり返すつもりは全くなかったが，このままではどうにも気持が納まらなかった。それでつい立ってしまった，そして次のような主旨のことを述べたのである。

学生を処分するということはまことに気が重い。それがやむを得ないこととしても，学生を処分しただけですましてよいものであろうか。この大学には学生の自動車やオートバイが大変な数置いてあるが，それらが全く乱雑になっている。部屋の入口を妨げたり通路を塞いだりしたまま置き放しにされている車が沢山ある。その整理に大学が怠っている所はないか。これでは不時の災害の時被害を大きくするのは勿論のこと，学生の指導をなおざりにしていることになる。こういう癖がついている学生が，路上でも気ままな運転をすることにならないとは言えないであろう。この機会に早急に善処すべきである。

ながながと私事にわたり過ぎたが要点は次にある。その後，ある機会に私の科の委員に学生部長が，あの人は余程強く鈴木先生の影響を受けているのではないですかと言ったという。その委員も同窓の1人であるから，あなたも亦その仲間のようですねと言いたかったかも知れない。

この話をきいて私は感嘆した。そんな風に批評された当否はともあれ，教育者鈴木先生の遺名の広く且つ久しいことを知ってである。この学生部長は45，6才になる地元の人であるが，戦後に立命館大学を出た人であるときいた。だからあるいは学生のころ京都で聞いたのかも知れないが，いずれにせよそれを語った人があったのであるし，聞いた方はそれから強い印象を受けたことに間違いはない。こんな所でそういうことを聞こうとはついぞ思い至らなかった。

ところで鈴木先生の直流である横浜の工学部での状態はどうであろう。組織が変ったことが一番大きな原因ではあるが，その上に教職員の世代がほとんど交代してしまったため，玄関前の記念碑

は建てられて未だ半世紀も経っていないというのに，その意味は全く忘れ去られて唯徒らに佇立しているに過ぎず，顧る者がほとんどない有様である。その上更に困ることに工学部もいよいよあと1，2年のうちに，我々の心の故里大岡の野を見すてて引越して行くことになっている。

こういう状況の中にあって私が先ず考えたいことは，鈴木先生が長い生涯を通じて愛着を持たれ，そして私共多くの卒業生の強く濃い思い出が深くしみこんでいる，長い歴史を担ったあの工学部発祥の土地と，その中に建つ先生の記念碑とをどのように活用し保存するかということである。鈴木先生の教育上の理想を学部においてどの様な姿で生かし続けるかはもう我共の手が届きかねる所にある。

転用には鈴木先生も留意していられた市民教育的なことで，土地と建物とを併せ活用できることを条件としたい。それには技術博物館を設置し，兼ねて少年も成人も含めた技術教育・訓練センターにするのがよいと私はかねてから考えている。そして記念碑もあの土地に保存した方がよい。その理由は既に前段で述べておいた。勿論有益な対策があれば話はまた別であるし，その方が望ましいのであるが。　（昭52.1.23）

先生の肖像スケッチについて

建築昭7　田　辺　謙　輔

昭和32年10月のよく晴れた日でした。もう間もなく約1年間以上の予定で渡欧する私は六ツ川のお宅におうかがいしたのです。広椽にはよく陽が射しこんで，先生は例の如く籐の椅子に腰かけ葉巻をくゆらして居られました。

油絵には既に，御退官の際，松岡画伯が揮毫した名作の肖像画があり，其後も商工実習の絵の先生による力作があります。御高齢の先生が長時間モデルになられた時の御疲労を考え，私には出発間際のあわただしさもあって，この時は色紙水墨を選びました。墨と筆紙が油絵とはちがって，直截に御風ぼうを活写出来る恰好の材料でもあるからです。私の言いなりに，先生はポーズをし，終ってにこやかに再び煙草に火をつけました。スケッチの一枚は先生宅に，他の数枚は最も煙洲会の世話をなさった方々の手許にあります。

学生の頃，友人の国鉄無賃乗車の尻ぬぐいを先生にお願いしたのを始めとして，この時も又渡欧の費用調達を，思えばよくも数々の瑣事を持ちこんだものでした。

何時もにこにこしてこの無礼なる教え子の申し出を聞いてくれましたが，あるいはこのスケッチもその一つであったでしょう。先生の限りない愛情を偲びます。

2つの卒業証書

機械昭10　犬　塚　　勝

卒業も旬日に迫った2月の或る日，生徒全員至急講堂集合の指示が出た。急に何事だろうと訝り乍ら，三々五々講堂に集る。やがて煙洲先生が演壇に立たれた。気のせいかいっもより少し厳しいお顔をしていられた様に思えた。開口一番「ワシは校長を辞める事にした。実はここには辞表が入

っている」と言われて胸の内ポケットを指され，それから約1時間，人は如何なる時にその職を辞すべきか，又辞するに当っては何をなすべきか等々，我々が社会へ出てから踏まねばならない「引き際」について懇々と説かれ，最後に後任校長として冨山先生を推薦されたことを発表された。

これによってそれから旬日後の卒業式には私達は二代目校長冨山先生から卒業証書を頂いた次第である。言う迄もなく，卒業証書には鈴木煙洲の御名前は書かれていない。殆んど3年間フルに薫陶を受け乍ら。

実はこれと全く同じ経験を私はその3年前にしていた。私は神奈川県立川崎中学の第1期生で，初代校長三森先生の薫陶を受け，卒業の半年前の9月に，先生は急に県立横浜2中の校長に転任された。従って私の卒業証書には三森校長の御名前は書かれていない。5年に近い全期間の薫陶を受け乍ら。

三森校長は毎週一回修身の時間に我々の教壇に立ち，教科書から離れて，川崎市民とし，神奈川県民とし，日本国民とし，そして人間としての道を切々と説かれた。この川崎中学は県のものである。然しこの川崎の地に建っている以上地域社会である川崎との結び付きが一番大切であると言っていられた。その1つの現れとして，正門も裏門も閉されることはなく，近くの住民は自由に出入出来，又屏も作られていなかった。我々が体操や教練で校庭を走り廻っている時，近くのおばあさんが孫をつれて見物に来ている微笑ましい姿をいつも見かけていた。煙洲先生と相通ずるものを感ぜさせる初代校長であったと思う。

殆んど全期間を夫々2人の初代校長から薫陶を受け乍ら，僅かな時間のいたずらから，この初代校長とは縁の無い2つの卒業証書が40数年の時間を経て，黄色く色ばんで私の手元に残っている。

インドネシアの憶い出

造船昭8　斉　木　雅　夫

見ると聞くとは大違いだったインドネシア

最初の訪問は昭和49年の夏の二ケ月。そして第二回目は昭和51年の夏の一ケ月，私はインドネシアの各地を巡って来た。首都ジャカルタ，ジョクジャカルタ，バンドン，チレボン，テガール，ペカロンガン，セマラン，スラバヤ，スラカンタ，ボゴール，プンチャック，ボロブドール（以上ジャワ島），パレンバン，パカンバル，ドウマイ，メダン（以上スマトラ島），ウジュンパンダン（セレベス島），アンボン（アンボン島）及びバリ島で今その憶い出をひもといて見たいと思うが，先づインドネシアの概要を述べると，その領域は赤道を夾んで東端が東経141度，西端が東経95度，南端は南緯11度，北端は6度で，東西の最遠距離は5,110粁，南北は1,888粁に渉る広大なもので，この領域内にはひとつの島だけで日本全土より大きいスマトラ，カリマンタン，西イリアンの様な大きい島があり，之等を含めて約13,000もの群諸島があり，総面積は200平方粁弱で，人口は世界第5位の約1億2千人，300以上の異人種，200以上の方言ありと云う（マレイ語が現在インドネシア統一国語とされている）。

此の人口の中には250万を越えると云うインドネシア華僑を含んで居り，インドネシアの経済的見地から華僑は重要な役目をなしている事実も見逃せない。確かにどんな土地に行っても街の商売上の親玉になっている。

文字通り人跡未跡の土地も多いが，広大な土地の天然資源と広大な水域の水産資源がどれだけ新興国インドネシアを潤しているか測り知れない。而し乍ら400年に渉る長い期間和蘭による愚民政策，インドネシア人の立上りの抑圧政策が未だに尾を引いてると思われる点が多々ある。

足掛け三ケ月に渉るインドネシア各地へ足跡を残した駆足旅行の私の目で見た事，聞いた事等の憶い出のひとこまの日誌の抜粋をまとめて見て皆

様にお知らせしたい。

インドネシア独立記念日

第一回目のインドネシア訪問の帰国も間近に迫った8月17日，インドネシア独立28周年記念日を迎えた日，私は原油の輸出地で知られているスマトラ島のドウマイ港のプルタミナドックの工作船の船長公室で年とった退役海軍大佐と相対して坐っていた。突然彼は立上り，冷蔵庫から冷たいビールを取出して二つのコップについで私に一つを差し出し乾盃した。そして彼の口から飛び出した言葉と顔は恐らく一生私は忘れない。「今日はインドネシアの独立記念日です。私は貴国日本と日本人に厚くお礼を云い度い。今日我が国が独立国家になったのは貴方の母国日本と日本人のお蔭である。さもなくば我々は未だに和蘭の属国としてみじめな生活を続けていたでしょう」固く握手を交わし思わず涙ぐみ乍ら今一度乾盃した。聞く所によると第二次世界大戦争中彼は日本海軍基地で若い青年期を通じて同じ東洋民族日本の輝かしい戦果に胸おどらせた事，そして日本軍人に可愛がられていた事を語ってくれた。

日本に帰国し早速書棚の大東亜戦争に関するスクラップブック（昭和17年1月—4月）の一冊を取出し，インドネシア（当時の蘭印）に関する切抜きを拾って見た。

昭和17年2月13日の記事には大きな見出しでこう書かれている。

「蘭印震撼／　咽喉完全に制扼」

「首都バタビヤ初空襲廿機撃砕・制空権を掌握」

「マカッサル（セレベス）完全占領」

「全ボルネオ戡定バンジエルマシン占領」

そして昭和17年2月16日の記事は

「万歳・シンガポール陥落」

「無条件降伏時に昭和十七年二月十五日午后七時五十分」

の大きな見出しで詳細記事が第一面を占め，第二面には

「落下傘部隊初陣の殊勲」

「陸軍部隊パレンバン（スマトラ）上陸，敵撃破，飛行場基地他要地占領」

「海軍部隊メナド（セレベス）攻略参加」

の見出しで詳細を報道している。

更に3月3日の記事は

「ジャバ敵前上陸，蘭印の本拠に降魔の剣」

「島民の歓迎裡に進撃」

「豪放雄渾なるわが大作戦アジアの宝庫解放の日近し」

と報ぜられている。

まぶたを閉じて戦争のあった時代と平和になったインドネシア，そして老大佐の顔が浮かんでくる回想のひとときを過ぎ，再び目を開けるとはつらつとしたインドネシアの現在が走馬灯の様に私の頭をかけ廻る。

バタビヤは現在の首都ジャカルタであり，地名変更の理由は知らない。高速道路が走っており，車の数が東京市内と変らぬ位多い。かつての交通機関の一つであったペチャの市内乗入れが厳禁されていた。

BOROBUDUR（ボロブドール）

古都ジョクジャカルタの北方にあるピラミッド形の仏跡で世界最古・最大のものと云われているが，十九世紀に発見された事（発掘）及び如何にして創造された（石造り）か，今日迄ナゾとされている。第一層から第六層までが正方形の段台で第七層から第九層までが円形の段台で，方形段台の周囲は廻廊となっており，両側の壁面に釈迦如来の像，釈迦の母摩耶夫人及び釈迦の仏伝が物語り式に浮き彫にされており，壁面の一部が空洞でそこに数百の釈迦の仏像（石仏）が跌座安置されている。円形の段台三層には72基の鐘形基壇があり，その中に同じく釈迦の石仏が跌座安置されている。誠に見事と云うより賞め様のない仏跡である。

偶然に発見された仏教の遺跡も永年の風化により崩壊現象が進み，インドネシア政府は国家事業の一つとして，世界各国よりの経済的並に技術援助により修復工事が現在施行されているとの事である。幸に私は修復前の姿を見学出来た幸福な一人に数えられる訳である。

BOTANIC GARDEN（ボタニックガーデン）

首都ジャカルタから車で約一時間の所にある世界第一と云われている熱帯植物園で，広大な敷地に数百種の熱帯植物（主に椰子）その他の植物が繁茂しており，私は幸にも日本語の非常にうまい案内人のお蔭で隅から隅まで見物出来たが，英蘭

日語をマスターしている此の案内人は65才の老人で，適格な説明と豊富な知識，記憶とウイットに富んだ返事に驚かされた。彼の名は Mr. Asmin。

庭園の一隅に白亜の建物がある。現在大統領別邸となっているボゴール宮殿で，オランダ時代の総督の居城であったとか，内部の見物も出来る筈を時間の関係で取止めた。

数百種と云われる椰子，実に色々な椰子が繁茂している外に，案内人から聞いた実際に此の目で見た植物の名をあげると，赤・白・黄色の花が満開だったカンナ，ボダイ樹，ブーゲンビリヤ（バラの様なトゲのある木），カポック，水蓮，ラーワン，天然チクル（チューインガムの原料），ジョインベ（アフリカ産の精力剤），スリーピングリーフ（さわると葉が閉じる），ブロネア（葉がハンカチーフの様に柔かい），ガジュマル等々，その外に日本から贈り物の欅の大木（根元の直径1メートル半もある）は徳川時代のものと彼は云ってた。

果実の宝庫

航空機の発達は地球を非常に小さくして仕舞った。現在世界何れの土地に居ても世界中何処でも産する名物の果物が容易に手に入り，日本でも輸入果物は街の八百屋さんの店頭で国産の果物と一緒に並んで沢山売られており，その味覚を賞でられる。而し乍らここインドネシアでは街の店頭や早朝市場で山盛になっておいしい果物が売られている。

＊BABUTAN	＊MAGGIS
＊DURIAN	＊NANGKA
＊KATES（パパイヤ）	＊SALAK
＊PISAN（バナナ）	DUKU
＊KELAPA（ヤシの実）	SAWO
＊JERUK（オレンジ）	MANGGA
＊ATPOKAD	JAMBU
＊BELIMBING	

＊印の果物は実際に試食したものでKATES（パパイヤ）と PISANG（バナナ）は随分食べた。恐らく私の知らないもっと多くの果物がある事であろう。インドネシアは果物の宝庫でもあると思った。

現地妻

ジャカルタからテガールに向う急行列車の一等車の中で後部座席から突然「アナタは日本人デスカ？」と問う女性の声にふと振り向いて見合った人はインドネシアの老婦人で，その顔色と目，一瞬日本占領時代の日本人の現地妻の一人ではなかろうかの予感に間違いはなかった。やさしいひとみと目ざしは久し振りに会った日本人に急に声をかけたくなり思わず私に呼びかけた喜びに満ち満ちている様だった。

戦後三十年，恐らく使ったことのない日本語，たどたどしくはあったが彼女の語った言葉によれば，占領時代の司政官の妻であって終戦と同時に夫は日本に帰国し，以来音信不通になって仕舞っている。当時二才の長女と，妊婦であった彼女は終戦後二人目の子供を産んだが矢張り女の子で，長女はレイ子，次女はマツ子と名付けられた（勿論現在はインドネシア名に変っている）。母親の持っている写真の父しか彼女達は知らないが，未だ見ぬ父及びかつての夫に逢いたがっている気持を聞かされて痛ましい戦争の被害を真実此の耳で聞き，いたたまれぬ気持になって仕舞った。

赤子を抱いて坐っている隣りの女性を指さして，此の娘が長女です。この子は日本人ですと思わず叫んだ彼女の声，長女である女性に日本語で話しかけたがただ笑顔を見せるのみ，彼女は日本語は全然話せなかった。

バリ島

天然資源の外にインドネシア政府が大変な力を入れてるものが観光開発で，その一番目がバリ島であろう。

昭和48年の旅行の時私は幸にバリ島を訪れる事が出来た。それも偶然にGALUNGAN(ガルンガン)に当っていた。BALI HINDU NEW YEAR FESTIVAL と云う儀式の行われる期間で，道路には，ノボリが立ち，頭にお供物を載せた婦人の行列は近くの寺院にお供物を運んで行く所であった。ジャワ島とは風俗習慣の完全に異なる異人種とも云える位此の土地の人々は殆んどがバリ特有のヒンズー教徒であり，寺院の多い事，その寺院も彫刻をほどこした見事と云うより外ない側壁，階段，塔，尾根，ホコラが街のそこかしこに点在している。

観光コースの北の方向にあたるキンタマニーと云う所から見た活火山バツル山と火口湖バツル湖の眺望は確かに絶景である。ガメラン楽器を奏でる野外の女性の踊りバロンダンスも印象に残った

が，何と云っても素晴しかったのは，ケチャックダンスである。百人に近い数のたくましい半裸体の男性のみの大合唱団で，「ケチャク」「ケチャク」と云う言葉の繰返しが何とたった一人で発音してると錯覚を起こすほどの見事なリズムの合唱と同時に全身を反転，激しい運動の連鎖反応に見る者，聞く者の心を奪う様な見事な劇はバリを訪れた人の忘れられない憶い出の一つである。

一般的な憶い出としては，広々とした三毛作の畠，種々雑多の交通機関の中，特に庶民の足となっており，都会でも，田舎でも数の多い「ペチャ」それは客席が前にある人力三輪車で之を動かす運転手は競輪選手にもってこいの筋金入りの長い黒光りの脚をしている。日本製小型トラック改造乗合バス，「コタ」「カンポン」と称する村の賑わいと雑踏，そして素晴らしい手工芸品には目を見張るものがある。

首相時代訪イをして，全国民から総スカンを食い，迎賓館から一歩も外出出来ず「ヘリ」で空港に送られ帰国した田中角栄にとってインドネシアはいやな憶い出の土地であったろうが，私は良い憶い出を回想出来る幸福者の一人と云える。

親身な山のお婆あさん

応化昭6　望　月　藤　三

1月22日の読売紙上に，今度国語審議会が新漢字表試案を作成し，文部大臣に答申したと報ぜられ，その中で，現行当用漢字表から33字を削除し，83字を追加する由で，その削除される字の中に，「婆」の字が入っていた。一時嫁入りに「カー付き婆抜き」の言葉が流行したが，こんな親しい字を除いてしまってよいのだろうか。

「婆」の字で想い出すのであるが，私達母校で学んでいた当時から最も馴れ親しんだ人に，応用化学準備室の一小山テル一と云う「おばさん」がいたことは，衆知のことであろう。小山さんは，煙洲先生とは蔵前時代から極めて昵懇の間柄であり，先生御退官後はよく六ツ川を訪ね，先生の使い走りや身の廻りの世話を焼き，先生のことを「山のお婆あさん」と呼んでいた。

私は卒業後暫く応化教室の助手を勤め，小山さんとは親子同然のお付合いをしていた関係から，私もそれにつられて先生のことを質ねるのに，失礼を顧みず「山のお婆あさん近頃元気ですか？」などと云ったものである。もう1人受付にいた「おばさん」で，松林さんという人も，先生のことを「山のお婆あさん」と呼んでいたので，どこからそんな渾名か，愛称が生れて来たのか知らないが，恐らく先生は慈父というより親身の「お婆あさん」という印象を与えて居られた為であろう。

母校が大学になってから，私は庶務課長をしていたので，先生はしばしば例の葉巻をくわえて杖を引き，私の机の前で四方山話をして行かれたが，その際大学運営のことについては一切触れられず，干渉がましいことは申されなかった。万事冨山学長に後事を托して，「お姑婆あさん」的なところは微塵も示されず，いつも笑顔で母校の発展を見守って居られた姿が心に残り，その御様子は全く「慈愛溢れたお婆あさん」そっくりであった。

御退官の際の名句「疾如風，静如林」と共に，私の印象に強く残っている語の中に，「人は出処進退を弁えなければならない」というお訓しがあり，今以て脳裡から離れず，本当に頭が下る思いをしている。両先生や小山さんも今は亡く，「婆」の字に接し感無量なるものがあり，往時を憶い起し拙文をしたためた。

教育の本質

応化昭10　鈴　木　洋　二

戦後の日本経済の発展は，日本人自身予想もしないものであった。戦前ではタクシーに乗るのがやっとのこと，自分で自動車を買う等と考えてもみなかった。テレビ，冷蔵庫が茶の間に入るとは思ってもいなかった。それが今ではあたり前のことになってしまった。むしろないのがおかしいまでになった。それ程経済的・物質的に豊かになって来た。もう食うのに困る等と考えることすらなくなって来た。ところがこのすばらしい経済的発展とは逆に益々悪化し低下してきたのに教育がある。煙洲会の我々は名教自然ということを理屈ではなく肌で感じてわかってきた。今の小，中，高校の先生方の中に教育の何たるかを理解して教鞭をとっている教師は何人いるだろうか。

教育とは「教える」ことでもなければ「教わる」ことでもない。自己啓発によって学びとることが大切なのである。煙洲先生は1年生と3年生に修身という時間で話された。その時常に私は諸君にこうしろということは一言も言わない。こうではないか，ああではないかと社会の理について話をする。諸君はそれを受けて自らの責任で行動をすることである。更にこの学校は専門の学科について勉強している，ここで勉強すれば大学に行く必要はない，大学に行くのは頭の悪いやつだ，決して大学卒業した者と比較してまけることはないとよく言っていた。学生の頃はただそうかなと思う程度でなぜ大学に行かなくてもよいのか，わからなかった。卒業後機会を得て直接煙洲先生に本当に大学に行く必要はないのかと質ねたところ，学生に大学進学を勧めるようでは自信を失うだろう，大学に進学する必要なく専門の学校だけで決してまけないのだという自信をつけさせることであった。この自信とでも言うか大学卒業した者にも負けないのだという心構えは一生持ち続け努力してきた。これは私にとって大きな力となったのは事実である。

今ここで教育とは何ぞやと改めて考えてみる。学生当時は教育の本質を考える必要はなかった。それは教育の本質の中で勉強していたからであった。弘明寺の高工を卒業したということは教育の本質の中で育ち，理屈でなく肌で感じ取ることができた。まことに大きな幸を得たことといえる。

煙洲先生はなぜこうした自由教育を思いきって実施したのか，これについて次の様に話をしてくれた。自分は熊本・広島・蔵前と教鞭をとってきた。その間に教育とは何ぞやと色々考え，教えられたこと，学びとったことを，集積し，いつか校長になるときがあれば自由教育を実施しようと色々施策を考え信念をかためていたので自信をもって実施できたのだ。

戦後間違った教育が30年以上続いたことは，若い世代の人達の教育に対する考え方が他力的であり，良い学校を卒業すること即ちよい学校に入学することに全精力をつかう。それは自己の意志でなく無理なおしつけ教育によって，無理やりに入学させようとしている，まったく教育の何たるかを忘れさった時代となった，先生と生徒がストに参加する姿を見るにつけ，これで日本を背負って立つ人物を育てられるだろうか疑うのである。日本から教育が無くなったのではないかとさえ思われてならない。それだけに煙洲会の集りは教育の本質を肌でとらえながら育って来た幸な一つのグループである。このグループを我々だけのグループにすることなく，広く世に教育の本質は何かを主張し，広めてゆく活動も煙洲会の事業の1つにしたいものである。

煙　洲　会

機械昭11　小　汀　浩一郎

煙洲会の400回を記念して，先生の追悼の本が出ることでございますが，私も会に関係したものとして，先生に関することを述べてみたいと存じます。元，ハーバード大学の心理学実験所長であるミュステンベルヒの言葉に“誰でも偉大なる師の膝元に座ったことのある人間ならば教育とは，いったいどんな感じのものかを知っているはずである”と言っていますが，私は，煙洲会に，第40回位から出席して，第101回から第278回迄煙洲会の幹事として先生の晩年に，月1回ではございますが，先生の御教えを受けたことについて，今の言葉を思い出して深く感謝しています。先生は，同志社に学ばれ，新島襄先生の教育を受けられ，徳富蘇峰先生等と交友関係を結ばれ，その後帝国大学に学び桜井錠治先生に学ばれ，熊本第5高等学校，広島高師，独乙留学を経て東京高等工業学校の応用化学の先生を歴任され，横浜高等工業学校の創立の際に校長として来られました。その間，東京高等工業学校(蔵前)の校長であった，手島精一先生の影響を深く受けられたものでありますが，先生の教育の根本をなすものは先生が同志社に入られる前の漢学塾に於ける論語を中心とする，孔子の教えが先生の教育の中心をなしていると思われます。

煙洲会でお話し頂いた話の内2割近いものが論語からの話であり，書を頂いた中にも論語の中にあるものが多いと考えます。先生の教育は，三無主義とか自由教育と言われますが，横浜高工に於ける教育は，各科により相当に異っており，私の出た機械工学科は試験も相当あり，落第もあり，出欠も厳重でしたが，先生は格別気にもしておられなかったと思います。学校の中で各々の科が自由に自分達の方針に従って，各々特色を発揮していたと思います。特に先生が昭和10年に65才を機に退官され後任として冨山先生を選ばれた時に，私達は機械科の遠藤先生の処遇をめぐって相当に強い決意で色々奔走しましたが，円満に収められ特別の処置もされませんでした。私は煙洲会の幹事として先生を会の送り迎えをする時に，その頃の話を伺って先生の対処の仕方について深い感銘を受けました。又そのことが私のその後の生活に影響を与えたことが多いと思います。先生のことはこの位にして，煙洲会のことについて申しますと，創立の当初から菅さんに非常な御世話になり，経済的にもあらゆる面に於て煙洲会の今日在るのは菅さんの御陰であると思います。先生の遺志を継がれた菅さんの御指導により，今日煙洲会が400回の会合を迎えたことにつきまして，菅さんに感謝すると同時に卒業生一同が協力して今後の学校を盛り立て，煙洲会を発展，継続することが，先生，並びに菅さんに対する報恩の一端と考えています。

ああ40年・400回

機械昭12　前　川　正　男

煙洲会が，12月22日，遂に400回を迎えた。菅代表と4人の幹事の御努力に，感謝などという月並みな言葉では，表現しきれない，執念のようなものを感じさせられた。その上，丸岡さんが，ご

自分で撮影された，煙洲先生のお写真を，全員に配って下さったのは，ほんとうにうれしかった。大東亜戦争開戦10日後の，昭和16年12月18日の夜，丸岡さんら丸坊主の学生10数名が，六ツ川丘上の，先生宅にお伺した時の写真であるが，連戦連勝の緒戦の煙洲大人の表情には，手放しの喜びは現われていない。逆に，先生を取巻いている学生の表情には，余裕たっぷりの表情がよみとれる。火鉢にかざした先生の左手には，あのなつかしい葉巻が軽く握られているのは懐かしい限りだ。

当日の，竹内先生の「記念講演」が，また素晴らしく，私は，写真の煙洲先生のお顔をしみじみと拝見し乍ら拝聴したので，余計感銘が深かったのかもしれないが，このような，時宜に適したプレゼントを下さった丸岡君に，心から最高の謝意を表します。

大正9年4月4日，学校開校の日が，竹内先生の誕生日であり，結婚記念日であったそうで，先生は，煙洲校長と運命的結びつきを感じておられるようにお見受けしましたが，そのお気持の上に，線密な御準備を，この記念講演にかけられたことは，聴衆に与えたすがすがしい大きな感銘でもわかったが，さらに，その御努力を，きわめてさりげなく淡々とお話しになられたので，余計，心地よい響きを耳に心に残しました。

ヨコハマが，日本野球の発祥の地であることと，先生のベースボールにかけられる，並々ならぬ愛情には，感服いたしました。煙洲先生が，関東大震災で壊滅した母校に見切りをつけた文部省の「名古屋へ移れ……」という，勧告を頑強に斥けて，横浜の地を死守した話，銅像を立てようという動議に絶対反対して，あの「名教自然」の碑にされたお話。若かりし日第五高等学校で，内村鑑三先生の後任の英語の先生をされた話。90才の長寿の原因に，先生の散歩を挙げられ，しかも先生は当時既に「万歩計」を御使用になり，「今日は，何歩歩いたよ。」と自慢された話，等々，誠になつかしく，往時の回想にひたらせていただきました。

弟の小学校の同級生のIさんが，私のマンションの1階に車を置くようになった。彼は横浜国大の経営学部の助教授をしており，毎日新キャンパスに通っているという。そこで，彼の運転席の隣に乗って，突然13万坪のキャンパスへゆくことになった。第三京浜国道を突走り僅か25分で到着した。こんなに近くに，母校が来ているとは思ってもみなかった。8階の彼の個室からは，全学が見渡せた。

女子の姿が多いのに驚いた。教育学部に多いのだそうだ。工学部の研究棟はガラガラと建築中だった。帰途，家の前を素通りして，高商の「富丘会館」に直行した。一杯やっていると，偶然，富丘会々長の野村さん（東陽通商社長）が，幹部数人を引連れて，サロンに現われた。今まで，ホテルオークラで，富丘会の総会をやっておられ，一杯入っているらしく，上気嫌で，I助教授が私を紹介すると「いよおッ！」と握手され，歌い出した。

〽希望の光，うららかの
　曙ともに開かれて，
　七十余年，月に日に，
　栄いやます，横浜の，
　地はわが校のたつところ。

これにはビックリした。当然高商の校歌が出ると思っていたので……。そこで，私も

〽気高く清き富士嶺よ
　ふじみが丘のますらをよ
　明るく晴れし，大空の
　広き心に……

あとは大合唱となった。目をつむると，あの定期戦の感激が体の中に溢れてくるようだった。野村さん達も，きっと，同じ思いであったことと思う。定期戦には3連勝。校長は大煙洲。大東亜戦争前の平和な時期であり，われわれの学生生活はたのしかった。4月は女学校の近くの山で花見。5月は駅伝，6月定期戦（3連勝），7，8月は夏休，9月はボートのクラスマッチ（優勝してオールの切れ端に優勝と書いたもの貰い，製図室にかけた），10月は，富士の裾野の野外演習。11月記念祭。12月査閲（煙洲先生は，国民服に例の竹杖をついて，終始立ち会われた。），1月，寒中水泳。2月，酒のうまい季節（ザキのネオンが輝きを増す。），3月サクラ。4度目の弘明寺の桜を見上る頃，背広に着かえて，全国に散開そして大戦争。随分死んだ。そして生き残った者達が，川崎駅ビルに集って400回。そして，みんな，悩んで大物となった。年もとった。

わたしの卒業アルバムを引張り出して見ると，入学の時の坊主頭の顔写真が，全員真面目な顔を

して並んでいる。物故者の下に赤線が引いてある。数えてみると，10本あった（全員45名)。このうち，軍隊で死んだのを，数えてみたら，3名。結核が5名，十二指腸潰瘍1名，胃ガン1名であった。“三つ子の魂百までも”の通り，人相は40年後の今日，一寸も変っていないのは不思議だ。駅伝の賞品授与をする体操の石川先生の顔もなつかしい。

大太鼓や木刀をふりかざして，スタンドに駈け込む白鉢巻の応援団，堂々ザキを行進する高工優勝のプラカード。何しろ3年連覇だから鼻息は荒い。飛行機までチャーターして空からも，撮影したものだった。ただ，野球に勝つと，夜のザキの定期戦は，コソコソと，敗戦に殺気だった高商の集団の目をかすめて飲まなければならなかったのは，残念だった。

実習の写真では，現在，三菱化工機の常務のMが，ベルト掛けの旧型旋盤で丸棒を削っているのが印象的。40年後の彼は，今，世界中のプラント建設にとり組んでいるのだから，40年という年月の重みを痛感する。

新任の木型の先生を紹介されてビックリ。私が，横工に入る前，1年間働いた，東大航空研究所の仲間（木型工）ではないか。「君は，実習はやらんでえーよ。」と云われ，その時間はバレーボールの練習にはげむことが出来た。

授業風景の4枚の写真の先生が，全員亡くなられている。（ああ40年よ）

3年の大修学旅行は忘れられない。その後世界中を廻って歩いたが，この関西九州一周の旅にはかなわない。旅館のゆかた姿の記念撮影，阿蘇の噴煙を背景にしたもの，汽車の窓からお猿さんのように首を出し笑っている，あの顔この顔，今は亡き人の笑顔は悲しい。

どのクラスでもやる“離別旅行”は熱海だった。糸川べりの“大黒屋”という古い旅館だった。夜，風呂場の窓から，遊客の袖を引く糸川の女の姿が見え，その嬌声は深夜までひびいてきた。そして寝不足，翌朝そのままの顔で，屋上で撮った記念撮影の寝不足の顔顔もなつかしい。いまは，その糸川の灯も消え，大黒屋はあっても，熱海は味気ない街になってしまった。

（東京都糖尿病協会副会長）

不向如来行処行

応化昭12　林　　辰　治

横浜五大学連合会主催による“自治体改革の課題”公開シンポジウムが二年前にあった時のことである。殿りのパネラーとして山口辰雄(応4期)商科大教授は，住民自治や市民参加を口にするはたやすいが身をつまされるこんな矛盾もある，と次の通り指摘した。

明治百年の官治体質がまだ十分革新できずに相変らずお役所式が多い。従って，市民意識の変革といっても見せかけに終って素直に本当を言っていない。問題は，市民による批判性と創意性を集めるための自主と自覚の高めかたにかかる，という趣旨。3割自治の壁が厚い行政の仕組みをあげつらうお題目もさりながら，開かれた市民文化の成熟にむけるひとりひとりの自発性が鍵だと，15年も下請役の町内会長を勤め，40年にもわたって委嘱研究ともかかわった体験を披歴して話題の流れにチクリ釘をさしたので，知事も市長も貴重な警告と受けとめて赤面する幕切れとなった。

またこれと同じ頃，神奈川県が持ち番の教育モニター関東地区年次大会があって，文部省官房や県教育委員会のお歴々と討議した折のこと。教育行政にモノ申す“望ましい教師像”テーマのくだりである。私が，教育最大の効果は貧困にある，学校栄えて教育亡ぶことのなきやと，イデオロギー的独善に捉われてはなるまい日教組批判にも特にふれたと同じ色合で，続く隣席老紳士の発言がひときはの緊張感を呼んだ。

権利義務の分際もなく，やる気十分の本物教師

いま何処（？）。教える側の自覚度に異常性はないか，と訴える野武士の順番だった。教師自らがまず内なる権威を高めて，必がふれ合う手本づくりこそ大切。その基本に還る参考にもと，煙洲鈴木達治なる教育者の名を掲げて，三無自由啓発主義の風情が漂う醍醐味を披露した。そして，国破れてわれら何の顔かある〃，と結んだそのご仁が堀尾晃（応9期）さんと判って奇遇に驚く一瞬であった。

ところで，よもやご迷惑もあるまいと先輩の事例にはじまったが，こうした心情は等しく煙洲教育に触発された私どもに共通する潜在的な持ち味ではないかと思う。定見を以て失敗を恐れず，自己実現に向かう伝統的な側面を麗わしく発散した自由主義教育の内実が根にあるからと受けとめることができる。

差障りがあるかも知れない露骨な表現ながら，盲目化された管理体制に埋没せずに直情径行と愚直な発言に走りがちなのは，私の在野性がまたひと廻り余計に輪をかけているせいかも知れない。個性を主張しすぎて権威に挑戦したがる反骨性を拭い去れぬままの不肖の子であってみればいっそうのこと，今もなお心に生きる先生数々の高風の想い出である。

煙洲会との出合いは，戦後第115回を前後した横浜倶楽部の頃に遡る。それも僅か数度の出席にすぎず，そのあと長い空白が続いたが，ここ数年来またの帰参である。異色の大物校長として先生は当初から，教育者らしからぬ教育者との印象を深くしたが，あの青天の霹靂ともいえる劇的な訣別の辞が私を身震いさせた追憶の頂点にあっていまも消えることがない。先生が在職15年を区切り65才を契機に，清らかに潔く出処進退の範を示して降壇なされた。1年生在学時短期間の師事ということになるが，第15期生の1分子として平均的な存在に終ったことの回想である。

強いてあげれば卒業して20年たった頃，身辺雑感を石油業界誌に掲載した拙文をご覧願えたことから往事回顧にことよせた激励のご来信に接して，この時ほどわが師わがふるさとの感を深くまた気宇を壮大にしたことはない。ご退官のあと，たやすく時流に投じることもなく畢生を子弟への暖かい眼ざしで見守り通した煙洲思想全体の姿勢を学びたい一念につきる。

こうして学生の頃格別の個人接触もなく平凡に過ぎたものの，社会人として何事も根本にさかのぼり原典によらなければいけません，常に哲学がなければと教えられたことが脳裡を去らなかった。とりわけそれが後述のように，脱亜入欧をいさぎよしとしない閉鎖的発想がそうさせたのか，また高度成長と激動波乱の後遺症に備える潜在志向からなのか，あらためて古典領域への見直しに救いを求めた動機からかと思う。漢学に素養厚かった明治人の典型に思想と教養のやり直しを学んで，古代先哲に回帰できぬものかと心がけるうちに，やっと落ち着いた平常心に戻れた記憶である。ひと頃の屈折精神状態から解放されて，些かなりとも心理的余裕に安堵した経緯を省るにつけても，こうした自分作りの内観が煙洲教育の恩恵に由来する紛れもない喜びである。

どちらかといえば煙洲会常連の表情はおおむね一匹狼の色彩が強く，タテ社会型ならぬ同人が集う月一度の交流にすぎないが，虚々実々の裏話や確かな情報に巡り会える貴重な余暇活動のひと時となる。行動範囲を拡げる工夫や内面の時間を充実させる努力に役立つ領域でもある。世の中みんな浮付いていやがる，今の教育制度では面白い奴はでてこない，などと学生時代を嚙みしめながら慨嘆しあうことも屢々で，その処方箋づくりをどうするかの夢にかられる場ともなっている。

煙洲先生による広汎な座右の教訓は既刊数著に集約されているが，ご生前最終第219回の感話で「ロータリアンに就て」奉仕の精神を説かれたことは，いかにも象徴的な第2の訣別の辞ではなかったかと思う。今の不信時代にあったら先生が何を風刺なされ，どんな揶揄を洩らされるかと関心深いが，400回煙洲会を記念する集録遺産の素晴らしさを以て報いることができたらと希うばかりである。

煙洲会の運営は，取りも直さず菅代表によるライフワークに外ならない。それにしても菅さん日頃口癖の“去る者は追わず，来る者は拒まず”と，卒業生なら誰でも自由参加を呼びかけるこの「煙洲思想」の勉強会を，泉下の先生は慈顔の眼差しで定めしお喜びに違いない。加えて，“煙洲会は堅苦しいことないよ。スポット参加で結構，気後れも遠慮も全くの無用ジャ”とでも囁きかける先生。蔭の声が聞える気がしてならない。

更に，歴代世話人による裏方役の手間は可成のもの。特に，煙洲会だけが唯一の生き甲斐だと述

懐する平田兄の気負いといい，村松現幹事の長年にわたる万般の手配と心遣いには頭が下る。煙洲会々場に定着した川崎駅ビルの某氏曰く，“煙洲先生とか，なぜそんなに人気があるんでしょう。さぞや西郷さんなみ敬天愛人の思想に代表される秘密かしら，いま時珍らしいことだ”と，外交辞令ならぬ心底からの賛辞である。

翻って混迷と模索の時代入り，沁々と自助努力の立ち遅れを考えると，とかく外来刺戟だけに迎合したり即応することの一辺倒で，内部刺激の奮い起しに欠けた咎がまずあげられる。ささやかな私のベンチャービジネスが大企業からスピンオフのまま，曲りなりにもダイナミックに機能できるのは，謀反組の仲間入りがはずみで，科学的知性の劣勢を独りよがりな偏りで補えたとも言える幸である，と思えてならない。とりわけさる高名な先達のお蔭で，モノ優先の駈足生活を逃れて心のふるさとを名作古典の類に求めよと，かたくななまでの粘り強さをしいられた恩恵があげられる。

脱皮すべき選択幅の狭い中から，中洋の文明や中国の思想を日本の精神風土と対比しながら，米と西欧両文化的背景の違いや西欧伝統主義のエトスに及ぶ片鱗にふれることのできた余暇の勉強が収穫だった気がする。欲の文明に組せず，ホン物とニセ物を見分けるための苦しかった下積の経験を基に，直観的本能的に古書漢学によせる傾斜志向に浸るうちに，忘れかけていた大切なものが手近に沢山あることに気付いて無性に嬉しかった。人間を忘れた現代科学の救い手は何か，技術屋が良心を回復すべき大切な時機だ，とようやく我ながら納得のゆく気持の整理ができた思いがする。「名教自然」の極意を推測できる到達点までには，不束かながらもこんな自意識過程の歩みがあった。

陽明学派の雄横井小楠は，夜明け前の先覚者として早くから俊秀を知られ，舌剣人を斬る鋭さで幕末最高の思想家として誉高かった。自らは政治に関与して運営の衝にあたるたちではなく“低く暮して高く思う”典型は，煙洲思想の指南に適わしく両師ピタリ一致の図星といえる。加えて，煙洲教育の源流にあったとされる小楠の詩句「霊知神覚湧如泉不用作為付自然」はまさしく“天地の真理を極めるにあり”とした小楠の実学に符合する理念である。名教自然とは即ち，先生の熊本時代に小楠という巨匠によるこの電撃的感動に端を発した生気煥発の所産に外ならず，それが先生の生涯を貫ぬく原動力となったに違いない，との感触を高めるこの頃である。

加えて，幕末の儒者広瀬淡窓は，有名人たるを嫌った歴史上の詩人，妥協を排して奇人に近かった教育者とされるが，その秀歌一首に「鋭きも鈍きもともに捨て難し錐と槌とに使い分けなば」がある。煙洲先生が三無主義を文部省公認に取り付けた上で学校の運営に臨んだという悠然たる手綱さばきの一面では，落ちこぼれ問題学生には異様ともされる面倒を注がれたとかいうことにも窺える包容力の偉大さであるが，淡窓の気脈とも相容れる師道実践の鑑である。教育の画一性を嫌って，個性の豊かさを培う独自性を肉づけた共通点でもある。淡窓の不朽作「桂林荘雑詠」は青少年時代情感の最たるもの。“他郷に出し我々を，苦心多しと謂うなかれ。友は親しみ睦み合い，肝胆てらし義を誓う。柴扉開くれば暁の霜は雪かと迷うなり。君は流に水を汲め，吾は薪を集めてん”は，ひとしおの感動を覚える。

次に，名教自然碑の撰筆者たる蘇峰翁による多数名作は人口に膾炙して久しい。また，同志社創建の新島襄は蘇峰煙洲ら多彩な高弟を生んだ高名の人格者であるが，盟友愛吟の「寒梅」の作は余香馥郁たる風情を醸してやむところを知らない。

これら先哲に漲る開拓者精神を垣間見る限り，その心情はすべて一様に内容豊かな儒教精神による不変の信条に帰するもので，古今を通じて聖賢に学ぶ吟詠ほど心を洗う生命の息吹はない。煙洲愛好の「思無邪」や「心虚即見神」の幅を拝して偲ばれる余情は，初心に還るべき工夫の羅針盤となってわれらを躍動させてやまない。

筆致の赴くところ，縷々散漫の饒舌は止まることを知らないが，想えば自由啓発教育の恵みは広大無辺だった。素人考えの立場ながら教育課題を再び現状に戻して，枠が先行して枠にはまる練習に励む方式が今の学校の姿。ワク作りを変える力に目覚めさせる人間本来の教育を第一義とし，個性特技を生かすための基本的な選択力を培養するためには，横浜高工往年の自由主義教育による実証が，はき違えられることなく再現できぬものかと，今更のように煙洲教育に魅せられる感懐である。

教育，それはその前に立っている人の存在なのだ。師は師たるの襟度で道徳的な堅固さを必要と

すること勿論であるが，併せて“賢や得て望むべからず寧ろ愚を学ばん”と先生による「入愚亭独嘯」の教唆もまた深遠にして及ばずとうけとめる思いがひとしおである。煙洲イズムは，老子が教えた東洋的ミスティシズムに影響される処が大きい，と竹内秀雄先生も述べたが“言う者は知らず知る者は言わず”の玄妙とも言うべきか。孔子による「君子和而不同小人同而不和」の姿勢を道連れてのことである。

このように，バテ気味経済への私の景気刺戟策には香り高い古老に寄り添う趣向が自ずから胚胎してきた。自治精神の涵養をモットーに「雖千万人吾往矣」と孟子の気概を旨とした中学時代の学習に続いて，弘明寺学校での教育と交友は私にとって掛替のない支柱であり宝ともなった。だから，これだけ大きい流れの転換が進行しているさなか煙洲学校に有縁の皆さん，眠っている手はないでしょう，この灯を絶やすことなくその礎石をなんとか大きく育てたいと願う反面には，そのことがまことに短見だった指摘もわかる気がする。戦争を契機に大学への移行が節となって校歌の二分がそもそもの始まりで，時移り人変って歴史の流れに従う変遷もまた致し方あるまい，煙洲会とて……と人の言う世が世であって賛否さまざまである。

終りに臨んで足らざる力量を顧みず，なお私なりの人間の生きざまを補足したいことがある。“ソツのない人間不要論時代のいま，自分の哲学を確立するため積極的で効率的なヒマづくりこそが第一義”と諭してやまない高僧の言葉である。煙洲思想投影の実図たる煙洲会益々の弥栄を願いながら，私はこの意味を柄にもなく大それた夢のかけ橋にも通じる自戒の至言とうけとめている。

同時にまた，かつて弘明寺バラック講堂の壇上から“なんのその百万石も笹の露”と，一茶の句を引用した煙洲説話のくだりが耳朶にふれて蘇る思いである。坂本竜馬は，人間好きな道を貫ぬいて世を拓く，と言ったが，日本の習慣は人と違ったことをすると村八分にされるとも言い，だから卑屈な引込思案に陥るのも仕方ないさ，というのもちらほら。清貧に安んじる，武士は喰わねど高揚枝，と昔風に主張しても，腹が減ってはいくさもできぬ，とすぐの反論にぶつかる。

だが私の場合はどうしても，むかし右向け右左向け左だけだった時代もそうであったように結局は“如来行く所に向って行かず”である。勇を鼓して，再度わが道を往く新しい道を確認する外に策もなく，相変らず世話のやける粗野な奴ということで，暖かい理解のもとに真意をお汲みとり願うのみである。

ここに揺がぬ煙洲思想の軌跡を偲びつつ，禿筆を呵して一文を草した所以である。

（ルブローレングループ
キクナ・ルブリカンツ自営）

屋久島開発に思う

電化昭12　東　　登

1 昨年になるが私は電化の大先生横山盛彰先生のお供をして，鹿児島の南方にある屋久島を訪ね，其処で島の開発に当っている横浜高工応化を14年に卒業した吉田直樹君と37年に卒業した吉見満雄君を訪ねたので御両人の仕事の場である屋久島を紹介したいと思って筆を取った。

屋久島は年間8,000粍内外の雨量で日本では最も雨量が多く，また平均標高600米と九州一の高山があることで高落差が得やすい地形なので，水力資源の宝庫として早くから注目されていた。

この豊富な水力資源の開発と有効な電力利用工業の経営をめざして昭和27年に屋久島電工が創立された。主な出資会社は小野田セメントを中心とし，チッソ，旭化成，日本興業銀行，日本工営等であった。発電所建設の技術的な方面は北朝鮮に大発電所を建設した実績のある旧チッソの久保田豊氏のグループであった。昭和27年に発電所の建設に着手，工事用電源として初めに1,000 kWの発

電所を作り，川の上流にダムを作って，安房川第1発電所の発電所23,000kWが出来た。又渇水用補給電源として，12,000kWのディーゼル発電所も完成された。

ここから得られる電力は，港湾の設備を作るに好適な宮之浦に送電され，昭和35年にカーボランダムと電鋳レンガの生産が始められた。吉田君が屋久島に行かれたのは昭和35年であった。又発電所の増強に伴って，昭和37年にカーバイドの生産も始められた。それ等の製品はいづれも多くの電力を必要とするものであり，低廉な電力の供給が必要な条件である。

経済界の状況や石油化学の開発で電鋳レンガとカーバイドの生産は中止したが，カーバイド電気炉は昭和42年にフェロシコリン製造に転換した。電気は勿論全島の一般家庭の電化生活と各種産業用として離島生活の基盤にもなっている。

第4次中東戦争を契機として，これまで豊富で安い原油に依存していた，わが国のエネルギー政策は，大きな方向転換を迫られ，本土は電気料金の高騰で買電に依存していた諸工業は大きなショックを受けた。本島の自家発電は水力であり，輸入にたよらないクリンエネルギーである。水力資源の開発はわが国の経済発展のカギともいえる。

このような情勢のもとで，屋久島電工では第1発電所の下流に，長いトンネルを堀り，300米の高落差を利用した出力46,000kWの第2発電所の建設がすすめられ，今年末までに完成される。それと平行してフェロシリコン，カーボランダムの増設工事も行われる。いづれも現在生産能力の2倍以上になる。

又，電気炉の排温水を利用した養鰻事業も行われ，屋久島，種ケ島周辺で採れる鰻の稚魚を温水で養殖するため生育も早い。又最近は観光ブームで島を訪れる人々も多いので，道路も全島1周の舗装道路も出来，ホテルも整い，道路の並木としてハイビスカスや海紅豆が植えられ，一歩足をふみ入れると吉見君の会社のパイン畠，時計草の群生，本土の緑化用のハマヒサカキの植樹畠も見られる。

さらに将来は安房川上流の貯水池を含めた同水系全体の総合開発，および宮之浦川，栗生川，水田川など全島にわたる水力資源の綜合開発がなされるであろう。

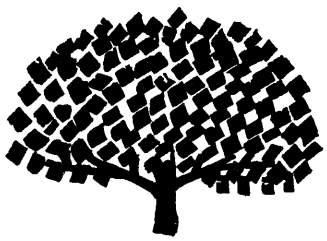
屋久島独自の豊富な水力資源を有効に利用して，他地域では得られない低廉な電力を利用する工業を経営していることが，この会社の特徴である。建設後暫らくは困難な時期もあったが，水力資源の活用という大目標に頑張って来た，そこに48年のオイルショックで一躍脚光を浴びるようになったのである。今後ともオイル価格の値下りは考えられないし，また原子力発電コストが安くなることも当分望めそうもないことなどを考えると，屋久島電工の将来はますます有望と思われる。

吉田君が赴任された35年頃は工場建設当時で生産されたものが，簡単に売れるという訳でもなく，カーバイドも石油化学への転換時機と重なったりして，非常に難しい時代を乗り越えて，今日の明るい時代を迎えたように見受ける。

吉見君の会社は屋久島パイン株式会社で島独特の自然現象を利用した仕事，植物の栽培，観光事業をやっておられるが，これも横浜高工の開発精神に燃えた人で，今に屋久島に育つ植物を利用して新しい仕事が生れることが期待される。

これからの経済成長は高度を望めないので他社，他地区でやっていることを僅に修正してやるというのではなく，その地域独自なもの，或は特有な技術を生かして行くという時代になっていると思う。

本土を離れた南の島で家族と共に頑張っておられる両君に天の恵の更に多からんことを祈って終ります。



煙洲会に思うこと

電化昭16　丸　岡　勝　美

煙洲会の存在を私は勿論知っていた。しかし私の様な不肖の卒業生が出席してもよいのか，という逡巡があった。だから昭和46年夏，村松幹事から煙洲先生の墓参の案内を頂いた時は，正直の処嬉しくもあり驚きもした。爾来つとめて例会に出席させて頂いているが会員としてはごく新米だと言える。小企業に身を置く者として色々な方のお話を聞く機会が乏しいので，煙洲会のひとときは私にとって誠に貴重なものである。新幹線の為に清水まで２時間程で帰宅出来るこの頃である。

私が横浜高工に入学したのは昭和14年４月であるから，煙洲先生は既に退官されていた。しかし時折山を降りては学校に見えられ暗い廊下でよく御目にかかり，又バラックの講堂で講演などされた。この時先生は，わしは古い化学者だがもう流酸の分子式も忘れてしまうた，と言われて私たちを笑わせたものであった。その後私は早朝の東郷神社参拝や六ツ川夜話を伺いにお宅へ御邪魔したりして，先生の声咳に直接触れることが出来たのは全くの幸であったと思わずには居れないのである。昭和16年夏，当時電化３年であった私は各科２年生４名と共に文部省主催興亜学生勤労報国隊中支派遣隊に参加した。私は分隊長として一同で参加の前後に先生に御挨拶に行ったのだが，この時も先生は大陸会の例などをひかれて私たちを激励して下さったものである。

ここに古い写真がある。これは昭和16年12月18日夜，先生のお宅で私が撮影したもので，正に六ツ川夜話を示すものだ。マグネシウムをたいたら煙がもうもうと天井をはっていった。新しいお宅で私はしまったと思ったが，先生は，ええよええよと仰しゃっただけであった。戦争が始って緒戦の大勝利に湧いていた頃である。私たちは当然戦争の将来について先生の御話が伺えるものと思っていたが，誰かがフリーメーソンの話を所望したのでこの夜はその話に終始してしまったのである。

私は神中36期だが昭和７年２年の時，創立35年の式典が時の文相鳩山一郎氏を迎えて挙行された。この時煙洲先生は他の市内専門学校長と共に出席して祝辞を述べられた。先生は神中が創立以来校名を数回にわたって変更したことをお蚕さんの様だと申され，その度に成長していった経緯を独特の口調で話された。そして横浜高工にも神中の卒業生が多数居るが何れも優秀であると賞讃された。私は40数年前の先生のこの話を記憶しているのである。

先生の米寿の祝は県立音楽堂で昭和33年７月に行われ，その夜ニューグランドで晩餐会があり，私も末席に坐っていた。この夜，野村洋三さんは，諸君はこんな立派な先生を持って幸福だ，米寿といわず白寿までと矍鑠と話されていたが，今やお二人とも鬼籍に入られた。

残暑の厳しい校葬の日も忘れることの出来ないものだ。黒布に巻かれた名教自然の碑，暗夜の様な講堂の中に灯火がわずかにゆらめいていた。そして先生が遂にこの世から去られたという実感がこみあげてくるのだった。巨星遂に墜つ，私はそう思いながら校門を去った。

戦後のいつ頃だったか，正門前阿波屋のウインドに先生の小さな色紙が掛けてあった。煙草が配給当時先生も行列に並らばれたそうで，その折の感想を書いて頂いたものだという。並んで頂かなくてもというのを，先生はやはり列に加われたそうである。先生らしい一面を思う。

六三制など戦後の教育制度も既に定着した感があるが，私にはどうもあきたりない。「物」の繁栄は戦前或は戦争直後思い及ばぬ程であるが，「精神」の荒廃は眼を覆うばかりである。しかもこの荒廃を自覚していない所に，憤りと絶望感をいだかずには居られない。これらはすべて教育に淵源すると思うのだが誤りであろうか。

そして今，煙洲先生が御存命ならば，一体何と申されるだろうかと思う。そして次には，もう先生の様な偉大な教育者は出まいと思わずにはいら

れないのである。

煙洲会が400回を超えるという。先生が亡くなられて既に十数年，その遺徳を偲び有志の話を聞き同窓の親睦を図って30数年，綿々と続けられたこの種の集りは稀少価値を有し，ひそかに世に誇ってもよいものではないか。これには勿論，菅さん始め歴代幹事の方々のかくれた絶大な御尽力があった事が誠に大きく，改めて厚く御礼申上げる次第である。

終りに，近く母校も創立の地弘陵を去ることになるのであるが，今後について同窓の皆さんと見守りたいと思う。

煙洲会が末永く続けられることを心をこめて祈るものである。 (52. 1. 16)

昭 16. 12. 18　煙洲先生宅にて

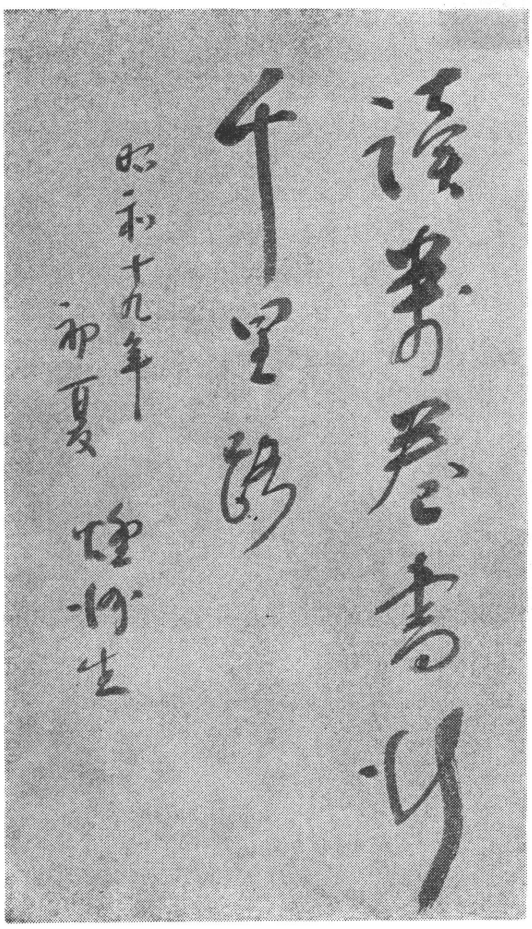
先生の思い出

機械昭19　中　山　一　郎

千里の路

昨秋，機会があって，久々に卒業当時のサイン帳を開いてみた。和とじのＢ６程度の小さいもので，和紙が40枚程度綴られたものである。物のない昭和19年当時に，よく売っていたものだと思うが，誰ともなく友人，先生方に署名を貰いだすと，流行するまでに至らず，売り切れてしまったと記憶している。

これだけが諸先生，先輩，友人を偲ぶもので，軍隊生活の間，大切に持ち歩き，戦災証明だけで４枚も貰い，私物がつぎつぎとなくなってゆく間に，図のうと称する腰にぶらさげていた将校鞄に入って，無事終戦を迎えたものだった。



勿論この冒頭に今では私の宝物ともなった別掲の煙洲先生，次いで六川小人と書かれた冨山先生の書がある。何げなく開いて眺めていた私が，改めてガクゼンとしたのはこの煙洲先生の書であった。曰く「読万巻書，行千里路」

元来，私は乱読の悪傾向にあり，先生の訓えとは別に，後々役に立ちそうもない雑文学を，猥本に至るまで読み散らして，万巻の書を読むぐらいは何でもない心算りで居たし，事実，読むつもりで毎年末にチェックして来ては居たが，１日１冊主義が看板通り行われた年もなく，最近は大分スローダウンして来て居る。戦後の分を集計してのガクゼンであった。

戦後の３年間は古本漁りで年間50冊。その後新刊の面白い小説が主体の出版が徐々に回復して来たが，若気の至りで，夜のつきあいも多く，本職も少々油がのって昭和20年代は平均150冊，昭和30年から50年までの21年間だけが平均300冊で，遂に年間330冊がピークのまま，老化現象のハシリに到達して，消化スピードがおとろえ，昨年は270冊となり，戦後の総計が7,600冊余り，それも最近の20年近く，雑誌，週刊誌の類いは，商売に関係ないものは避け，読み易い雑本，小説類に集中しても，この結果である。

千里の路を行くのは別としても，万巻の書ぐらいは，戦死しない限り，50才前には軽いと考えていた当時が，何ともはや情なく，と云うのも，先生はなにげなく書かれたのかも知れないこの一文が，ことによると，一年生の頃に，雑学でも雑文でも，数多く読むことが，人生を豊かにする手段と信じているような，大口を叩いた私を，或は記憶されていたのではないかと，日暮れて路遠く，8,000冊にも至らぬでは，千里の路の半ばにも達しない私は，今にして冷汗のしたたる思いのしたことだった。

最近は，ヤケクソ気味に読み易いポルノを手にとってみても，情けないことに鼻について読み進めず，好きなミステリー，S・Fのたぐいで数をあげてみても，読みたい本が手つかずのまま，机に山積する始末で，戦後，万巻の読破が改めて生きている間の目標となった。

幸いにして私は高崎線の桶川という駅の近くに住み，上野迄40数分，往復1時間半近くの読書時間が与えられて居り，その上，経営コンサルタントという，セミ失業者に特有の講演だ，指導だという地方廻りの機会も多く，読書時間にはめぐまれているので，先生のお言葉を口実に，当分の間好きな雑本を楽しみ乍ら何とか万巻まで，と考えている。

但し，千里の路を行く手助けになる書はその中に殆んど入れる積りはなく，「万巻の書は読んでも，半里の路がやっと」，というところが適当かと，草葉のかげの先生には，前以って弁解をしておく心算である。

葉巻き

入学と同時に新聞部に籍を置いた私は，六ツ川夜話なる先生の随筆の速記にやらされた。

上級生の話を聞くと，大変な大先生であり，「近頃の学生は文字を知らない」，などと言われた話許り聞かされる。始めての折りは1年生2人と2年生1人の3人と記憶しているが，何を聞き何を書いたかも緊張で一切記憶にない。参上して筆記している間に，葉巻を3本，その間に朝日を5，6本は吸われたことだけハッキリ憶えている。成るほど煙洲先生だわいと感心した。

その後何回か訪問して，余裕も生まれ，生意気盛りの1年生が先生を見習って煙草を吸い始めた頃のことだから，たしか夏休み近くである。1年坊主2人で，六ツ川夜話の速記に出掛けたが，先生が誰か来客中の様子でなかなか見えなかったのをよいことに，お部屋にあった珍しい葉巻きをいろいろと，のぞいているうちに，「おい，これだけあるんだから1本や2本戴いても大丈夫だろう。」と云うことになった。まさか太い試験管の兄貴みたいな中に1本入ったものは頂戴出来ないし，箱から1，2本手をつけたものも難しい，知能犯2人で意見が一致したのは大箱に4分の3程度残っているやつだった。あとで聞くところでは，先生がお好きなのを知っている諸先輩や，先生の知人方が，各所からとどけられたり，先生も苦心して手に入れられていたそうであるが，当時の私には好奇心だけだった。

持ち帰った戦利品は，仲間の1年坊主を集めて部室で廻しのみである。総勢5人と思ったが，夫々感想を語り乍らのまわしのみが何回か巡って来た頃，気持ちが悪いと言い出すものが三人，吸い終っての全員の感想が，「先生が吸っているところに居るのが一番良い。」というところに落着いて，「こんなものを沢山良く吸えるもんだ。」ということだった。

「あれはふかすもんだよ」と聞いたのはその後である。

2年生になってからのことである。たまたま1人で伺った折り，そのことを白状に及んだら，「時効ということもあるが，ワシントンとは大分違うな」「お前達だけじゃない。」

この言葉でどうやら罪の意識は消えたものの，その後葉巻きを吸う度びに，申訳ないことに煙洲先生より，次々に胸がむかつくと云って消えて行った友人の方が思い出されるのは一体どうしたものだろうか。

編 輯 後 記

村 松 四 郎
電化 昭17

昭和14年に始まって以来，毎月1回の煙洲会が昭和51年12月を以て400回を迎えるに至りました。他に比類を見ないことだと言われてます。このことは煙洲先生の御人徳は勿論ですが，菅さんの御熱意によるものであると思います。私達から菅さんに何か感謝の気持ちを表わさねばならない所，かえって菅さんから歴代幹事4名にそれぞれ感謝状と記念品を頂き誠に恐縮して居ります。その際に平田幹事のご挨拶の中に“歴代幹事は煙洲会の仕事は喜んでやれたもので，少しも負担に感じたことはなかった”とのお言葉がありましたが，全くその通りで，私達歴代幹事の誰もが煙洲会の仕事を重荷と考えていなかったということは煙洲会の性格を如実に表わしていると思えます。

その400回記念として英語の竹内秀雄先生の御講演をお願い致しました。これが又実にすばらしいスピーチであり，ご出席の皆様も特に感銘を深くされたようです。竹内先生ほんとうにありがとうございました。改めてお礼申しあげます。

更に400回記念誌の出版を計画して，皆様からはお早く原稿を頂いておき乍ら，出版がのびのびになってしまい，予定より1年以上もおくれて漸く今日皆様の許へお届けするような始末で，全くなんともお詫びのしようもない次第です。相すみませんでした。

私が入学した昭和15年には煙洲先生は既にご退官の後で直接先生の教えを受ける機会はありませんでしたが，機械昭16年卒の杉浦先輩にすすめられて新聞部に入った私が，六つ川夜話の筆記に先生宅にお伺いするようになり，先生に接する機会を得た事は後から考えて非常に幸運なことであったといわざるを得ません。先生の六ツ川夜話は口述されたものが即原稿になるようなたいへんに書き易いもので私達が筆記してから先生の許に持参しても殆ど筆を入れられることはない位でした。口述する先生の頭の中では既に文章になっていたようです。

煙洲会にも先生がお亡くなりになってから出席するようになった私ですが，16年間幹事をなさっていた小汀浩一郎さんの後を受けて第279回以降400回を超す長い間無事に続けてこれましたのも，菅さん始め皆様の御協力のおかげだと思います。12年余を振り返って只なんとなく過ぎてしまったような気もしますが，毎月の例会の盛況と毎年8月29日御命日の日野のお墓詣りにも多勢の方々が参加されるのをみて，先生の偉大さを思わずにはいられません。真の教育者と言われる多くの方々が居られましたが，特に煙洲先生のような立派な方は恐らく二度と再び現われることはないだろうといつも考えています。学校では先生に直接教えを受けなかった私が，今このように煙洲会の第4代幹事をお受けしているのも，先生への尊敬の念というよりむしろ親近感というか，むしろ無条件に先生の総てが好きであるからといった方が良いかも知れません。

横浜高工に於ける煙洲教育は既に皆様ご存知の通りであります。そしてその具象として遺されたものが名教自然の碑であり，此の碑には先生の魂がこもっていると考えています。先生が深く愛したこの弘明寺の地に先生の魂がこもった名教碑を永久に残しておかねばならないのではないでしょうか。そして又菅さんがよく口にされる煙洲思想の精神として受けつがれているものが煙洲会であると言っても言いすぎではないと思います。至らぬ幹事として申訳もないことですが，私自身は煙洲会は横浜高工の粋でありスピリットであると考えて居ります。歴代幹事の方々のお考えも恐らく余り違いはないかと思います。煙洲会も菅代表のもとにますます発展していくに違いありませんし，和気あいあいとしたこの煙洲思想の方々の集りは未来えいごうに続けていってほしいものだと念じています。私の次の幹事も又その次の幹事も少しも重荷と感じないで喜んでお世話をしていくことでしょう。

400回記念誌を手にしてみて，私の夢かも知れませんが毎年一回位は出してみたいという欲がでてきました。先生のことを中心に諸先輩の方々の色々各特色のある原稿を頂いて又まとめる機会を得たいものです。　（昭和53年7月末）

昭和53年8月 発行

煙洲会400回記念号

発　行　煙　洲　会

印　刷　株式会社 白橋印刷所

【非 売 品】

煙洲先生の著書“入愚亭独嘯”の出版を完了した昭和17年初夏の或日，六ツ川の丘の上にある鈴木先生のお宅に伺ったその頃まだ学生であった私が，先生に「何か書いていただけませんか」とお願いしたところ，「何がほしい」とたずねられた。

早速私は常々ほしいと思っていた“名教自然”の書をおねだりした。先生は「では墨をすりなさい」とおっしゃり，私のすった墨で私の眼の前で一気に書いて下さったのが上掲の書です。

此の字を見ると今でも先生の筆の運びが眼に浮ぶようです。雄渾な筆勢はとても72歳の方の書とは思えません。いかに煙洲先生が信念と勇気とを以て貫き通した名教自然の教育に満足されていたかが判るような気もします。

此の書は私の宝として秘蔵している訳ですが，本誌の印刷所である㈱白橋印刷所（北村専務・昭22電化卒）に複製を依頼したところ，なかなか立派なものが出来上りました。皆様に進呈する為に先生の書にあった“依村松君嘱”の文字は外しました。

又，先生の落款は鈴木家からご印を拝借して，一枚一枚に捺印したものです。右端の印は，一君万民と刻まれて居ります。先生の印は此の外にも沢山あり，名教碑に使用された20センチ角のもあります。これは徳富蘇峯先生から贈られたものです。いずれ機会を得て各印を集印帖に捺印して御希望の方には，お分けしようかと考えてます。

尚，上掲の名教自然の書は，電化会総会，横山先生を囲む会，煙洲会例会等を通じて皆様に進呈しております。座右の銘として先生の書をご希望の方はどうぞ私までお申し越し下さい。

（電化昭17/9　村松四郎）

煙洲会に~~就て~~ご出席下さい

毎月1回原則として第4水曜日午後6時から8時まで川崎駅ビル5階宴会場に集り，簡単な食事の後に1時間位当日のゲストのお話を伺っています。ご出席の時のみ3,000円の会費を頂いています。

御紹介の有無出身各科或は新旧等一切無制限で，どなたでもご出席自由です。なかなか和かな雰囲気の会です。お互に親睦を深め，同窓生お互に助け合っていこうという趣旨です。

毎月の御案内希望の方は下記へご連絡下さい。

〒135　東京都江東区豊洲4－6－2
村　松　四　郎
TEL.（03）（531）5894